

はじめに

英語教育は大きな転機を迎えている。英語教育の歴史における転機とは、廃止論など後退的なものが多かった。だが今直面している転機は、小学校高学年に初めて教科として英語が導入され、外国語活動まで含めると、英語学習が長くなるという前進的なものである。その結果、高等学校卒業時の到達レベルも従来よりかなり高く設定することができる。これは、グローバル社会において、英語が実質インターナショナルリテラシーとなったことを考慮すると、有意義な転換である。

だが、史上初めてのことであるため、対応が十分追いついていないことも事実である。その中でも、小学校教員の英語力や英語教育に関する知識等の不足は何よりも大きい。中高の英語教員にフランス語やドイツ語を教えるように言われるどころではなく、物理学を教えろと言われるようなものである。自分が学校時代に経験した記憶に頼るのが精いっぱいである。

とは言え、待ったなしで目の前の児童に英語の指導を行わなければならない。国は移行期の教材として*We Can!* を編集して配布し、積極的に研修を行ってきた。それでも実際には英語力は言うに及ばず、指導内容、指導方法、評価方法などあらゆる点で、不安を抱えておられる教員が多いようである。

それに加えて、小学校から中学校へと円滑に接続させることも考えなければならない。小学校では外国語活動に慣れているので、教科として系統的な指導を行って中学校へ引き継ぐことを考えてこなかった。一方の中学校も、まるで小学校での外国語活動はなかったかのごとくABCから教える授業が続いていた。その結果、せっかくの習得期を無駄にする結果になっている。

両者が双方に向き合って理解し、うまく接続することで、より高い英語力を付けさせることができる。本研究は、それを目指す考え方や具体的な指導方法などについて考察した。

本研究には、大学教員、小学校教員、中学校教員のみならず、小学校での英語教育に直接的に責任を持つ教科調査官を加えることで、小中接続の課題を洗い出し、それを解消する小中双方での授業展開や課題解決策を検討することができた。本研究の成果が、小中双方の英語教育に反映され、児童生徒のより高度な英語力の獲得に寄与できればこの上ない幸いである。

最後に、公益財団法人日本教材文化研究財団には多方面からご支援、ご協力いただいたことに対して心から感謝申し上げたい。

令和2年7月

研究代表者 松浦 伸和

目 次

はじめに	1
第1章 小・中学校の滑らかな接続を目指した英語科学習指導の研究 ー理論編ー	3
1.1 小・中学校の滑らかな接続を目指した英語科学習指導の研究	4
1.2 小中連携の必要性	14
1.3 英語教育における小学校から中学校への滑らかな接続を考える	22
第2章 小・中学校の滑らかな接続を目指した英語科学習指導の研究 ー実践編ー	35
2.1 「聞くこと」における小中の接続を目指した指導	36
2.2 「読むこと」における小中の接続を目指した指導	49
2.3 小学校外国語科における児童の意欲を高める授業づくり ～「話すこと〔発表〕」の言語活動を通して～	58
2.4 小・中学校の滑らかな接続を目指した外国語科学習指導の研究 ～「書くこと」に焦点をあてた学習指導の在り方についての提案～	67
2.5 小・中学校の連携を目指した「話すこと〔やり取り〕」の指導	81
2.6 文・文構造・文法事項の学習内容と学習方法とを小・中学校で滑らかに連携させるための指導	93
主要参考文献	105
執筆者一覧	106

第1章

小・中学校の滑らかな接続を目指した英語科学習指導の研究

-理論編-

1.1 小・中学校の滑らかな接続を目指した 英語科学習指導の研究

広島大学大学院人間社会科学研究科教授 松浦 伸和

1.1.1 研究の目的

改訂された学習指導要領が告示され、令和2年4月からすべての小学校で5、6年に教科として外国語が導入された。これまで、中学校で教科として外国語科が開始される前の「習得」期間としての位置づけが強かった小学校での英語教育が、本格的な「学習」開始段階として新たなスタートを切った。戦後最初の学習指導要領で、地域や個人の外国語の必要性の違いから選択教科として始められた外国語科が、小学校に導入されるというメルクマールとなる年である。改訂された学習指導要領は、指導内容や到達目標に関して十分に接続を目指した内容になっている。しかし、学習指導要領が接続を目指した内容であっても、その通りに実践されて、期待される成果が出せるとは限らない。これまでも数多くの問題や課題が指摘されてきた（詳細は1.3を参照）。たとえば、直接指導にあたる教員は大きな問題である。多くの小学校教員は英語の指導に関する知識や英語力が十分備わっていないにもかかわらず、日々の指導を余儀なくされる。外国語活動の指導経験がある教員が増えてきたことは事実であるが、教科書を活用して定着を目指した指導をし、学力評価を伴う教科としての英語教育となると状況は異なる。教師の不安も広がり、課題は増すばかりである。外国語活動は「習得」の性格を帯びていたため、そのシラバスには柔軟性が与えられていた。さらには、技能の習得よりも外国語に慣れ親しむことが求められていた。だが、その段階は小学校中学年に下され、教科の指導へ切り替えなければならないとなるとシラバスについて中学校との接続が必要となる。それに伴い中学校に円滑に接続できるような指導方法が求められる。一方、5年生から英語学習をしてきた生徒を受け入れる中学校においても、これまでのようなABCから始める入門期としての指導は不要になり、小学校での2年間の学習を十分に踏まえた指導が求められる。

そう考えると、小学校、中学校のそれぞれの指導において、表現力が十分身につけていないなど課題はあるが、その両者に関わる小中接続の在り方についてはさらに課題が多く、その解決策を十分に検討しなければならない。

本研究は、小中接続を取り巻く課題について検討し、円滑な接続を目指した英語教育の在り方を提案することを目的としている。

1.1.2 小中の英語教育と接続において検討すべき課題

小中接続に関わる課題を検討する前に、小学校、中学校それぞれの英語教育の課題を確認する。

(1) 小中の英語教育の課題

平成28年12月に出された『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習

指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』では、外国語科（英語科）における課題として、以下の点が指摘されている。なお本答申の性格上、そこで指摘されている課題は、英語の指導方法や生徒の学力実態に関するものに限定されている。

○小学校での英語教育の課題

- ・音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続がされていない
- ・国語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある
- ・高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる

○中学校での英語教育の課題

- ・学校種間の接続が十分とは言えず、学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができない
- ・「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動や「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が十分ではない
- ・複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていない
- ・コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することができない

両者ともに、小中接続が十分に図られていないことが課題として挙げられており、大きな問題であることが理解できる。そのことは、回答申で以下に述べる「小・中・高等学校を通じて一貫して育成を目指す」際の課題としても指摘されている。

- ・進学や進級した後に、それまでの学習内容を発展的に生かすことができていないといった状況も見られ、学校段階間の接続の不十分さなどが指摘されている。
- ・中・高等学校においては、文法・語彙等の知識の獲得に重点が置かれ、コミュニケーション能力の育成を意識した取り組みに課題がある。
- ・また、求められる英語力に達成した生徒の割合が目標である50%に達成されていない状況にあり、さらなる英語能力の向上が必要である。

（２）小中接続において検討すべき課題

上で確認したように、小中接続は今の段階で英語教育においては主たる課題と位置付けられる。それは、これまで検討されてきた中高接続の課題以上に多岐にわたることが問題を大きくしている。

一般的に学校種間の接続を検討する際の項目として、以下のような点を挙げることができる。

① 目標の側面

目標、カリキュラム、到達目標

② 指導と評価の側面

指導内容、シラバス、教材、指導法、学力評価

③ 制度、教員の意識改革の側面

指導体制，教員養成，研修，現職教員の英語教育に対する意識改革

なお，本研究では時間的制約や，内容的に実証を伴う提案ができない項目が含まれているため，これらすべてに関して検討することは控えた。①に関する分析検討ならびに②に関する実証的考察を行った。

1.1.3 小学校・中学校で求められる学力の分析

本節では，改訂された小学校および中学校学習指導要領で示されている英語学力を分析する。

(1) 目標の分析

小学校中学年で扱われる外国語活動も含めて，外国語科の目標を比較，分析する。目標の前半部分は以下のように記載されている。

○小学校外国語活動

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，話すことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

○小学校外国語

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

○中学校外国語

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」はいずれの段階でも前提として記載されている。次の扱われる英語技能については，小学校外国語活動では聞くこと，話すことという音声言語に限定されているが，それ以降の外国語科では読むこと書くことという文字言語も含めた4技能すべてを扱うことになっている。上述したように，外国語活動は系統的，意図的な英語学習を始める前の習得段階（母語と同じように自然な状況の中で体験的，無意識的に学習する段階）としての位置づけであるため，文字言語をはずしたと解釈できる。

目標の中心は，いずれの段階でも「コミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す」であり同一である。その前に外国語活動は「素地」，小学校外国語科は「基礎」と段階分けがなされている。『小学校学習指導要領解説 外国語活動 外国語編（以

後、小学校解説と略記する)』に、「「素地」としたのは、中学校の外国語科が「コミュニケーションを図る資質・能力」であることに対して、高学年の外国語科の目標がその「基礎となる資質・能力」であり、それに対しての「素地となる資質・能力」ということからである。総則にもあるとおり、小学校までの学習の成果が中学校教育に円滑に接続され、育成を目指す資質・能力を児童が確実に身に付けることができるよう工夫する必要がある。」との解説がある。それがどのレベルを指すのかは言語活動の指導内容から推し量ることになるだろうが、目標としてはそれらを総合して捉えたものであろう。いずれにせよ、このレベル記載こそが、小中接続を目指していることがわかる。

(2) 到達目標の分析

今回の学習指導要領の改定では、「英語の目標」として到達目標と呼べる内容が、技能ごとに示された。これは、これまでの指導要領にはなく、大きな前進である。『中学校学習指導要領解説 外国語編 (以後、中学校解説と略記する)』には、「小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして国際的な基準である C E F R を参考に、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の5つの領域で英語の目標を設定している。その目標を実現するために行う後述の言語活動についても、C E F R を参照しながらその内容を設定している。」と説明されている。

その中から、「聞くこと」および「話すこと [やり取り]」の目標を1つずつ取り上げて接続の実態を具体的に分析する。

○聞くことア

それぞれ、上から小学校外国語活動、小学校英語、中学校英語の到達目標である。

- ・ ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取れるようにする。
- ・ ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。
- ・ はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ることができるようにする。

この目標には、①「話される英語の速度、明瞭さ」②「話される英語」③「聞きとる内容」が述べられている。①については、小学校では「ゆっくりはっきりと話された英語」なのに対して、中学校では「ゆっくり」という速度に関する記述が削除され「はっきりと話された英語」のみになっている。中学校では、自然の速さの英語を聞かせることで、音の連結などより難度が高い英語の聞き取りを目指していることがうかがえる。このことは、到達目標が高まったと言える。

②については、「自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句」から、「自分のことや身近で簡単な事柄」となり、中学校では「日常的な話題」となっている。小学校英語では簡単な語句にとどまらず、基本的な表現で話されたことについても聞き取ることが目標となっている。中学校では「日常的な話題 (生徒にとって身近な学校生活や家庭生活などに

おける話題)」でのパッセージを聞くことになっている。このことは、聞く英語の幅が広がったと言える。

③については、小学校では話された語句や表現をそのまま聞き取る段階にとどまっているが、中学校では「必要な情報」となっており、自分にとって必要な情報を判断して聞き分けることが求められる。それには思考力・判断力が必要である。このことは、到達目標が深まったと言える。

同じような分析を、もう1つの目標を取り上げて行ってみる。

○話すこと〔やりとりイ〕

上が小学校英語、下が中学校英語の到達目標である。

- ・日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。
- ・日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。

それぞれ①「話す話題」②「話す内容」③「話す英語」④「話す活動」について述べられている。①については「日常生活に関する身近で簡単な事柄」から「日常的な話題」へと広がっている。②については、「自分の考えや気持ち」から「事実や自分の考え、気持ち」と高まっている。というのも、小学校では「自分の考えや気持ち」という主観的な内容にとどまっている。それが中学校では「事実」という客観的な内容が加えられていることから、技能の運用がより高度になったと言えるためである。③については「簡単な語句や基本的な表現」が「簡単な語句や文」と高まっている。④については「伝え合う」から「整理して伝えたり、相手からの質問に答える」へと深まっている。

これら2つとも、基本的な目標は「聞き取ること」「話して伝えること」と同じである。しかし、話す速度、明瞭さ、話す内容など言語運用を規定する要因に関して段階性を付けている。その段階性を広がり、高まり、深まりなどのキーワードで示すことで、接続を図っていると分析できる。

(3) 指導内容の分析

指導内容については、(1) 英語の特徴やきまりに関する事項(知識及び技能)、(2) 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項(思考力、判断力、表現力)、(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項の3つの事項について示されている。

(1)については後の2.6で詳述しているので、ここで言及することは控える。(2)については、小学校でも中学校でも以下のように同じ内容が記述されている。

具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを表現することを通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

外国語科の有識者会議による未定稿の内容を参考にすると、外国語科に思考力・判断力・表現力の内容を以下の図1のように整理することができる。

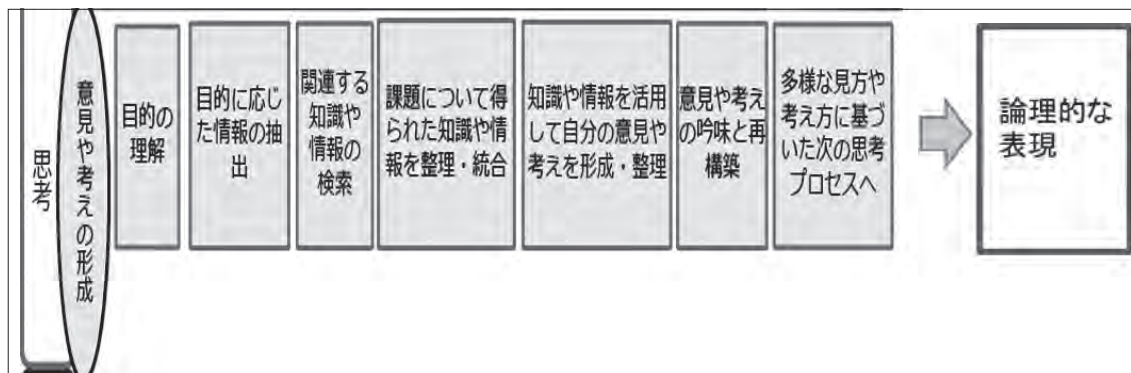


図1 外国語科における思考力等のプロセス

松浦（2017）によれば、「これは、①目的や場面、状況を理解する ②目的等に応じた情報を抽出する ③知識や情報を整理・統合する ④意見や考えを形成・整理する ⑤論理的に表現する」という思考力等を伴う一連のコミュニケーションのプロセスを述べたものである」と考察されている。

この表をまとめて文言化したものが、上述した学習指導要領の内容と合致している。そのことは、外国語科において育成すべき思考力は小中で同じであるが、それぞれで扱われる英語によって深まりが異なることを意味している。それについて、「聞くこと」の「言語活動」の内容についての記載から考察する。

以下は、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領の「聞くこと」におけるもっとも高度な言語活動である。

- ・ 友達や家族、学校生活など、身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現で話される短い会話や説明を、イラストや写真などを参考にしながら聞いて、必要な情報を得る活動。
- ・ 友達や家族、学校生活などの日常的な話題や社会的な話題に関する会話や説明などを聞いて、概要や要点を把握する活動。また、その内容を英語で説明する活動。

小学校学習指導要領にあるように、「具体的な情報を聞き取る」活動は「技能」に分類されるが、ここで示されている中学校の項目の中の一活動は「思考力・判断力・表現力」を伴う活動に分類される。なぜなら、聞き取った内容から「必要な情報」を選択するには思考・判断を伴うからである。同様に、「概要や要点の把握」をするには、単に情報を聞き取るだけでなく、聞き取った情報を目的に沿って「加工」する必要がある。そのような「加工」の段階で思考力等が必要となる。なお、これらの活動は、上の図1に当てはめると「①目的や場面、状況を理解する ②目的等に応じた情報を抽出する」が必要となる。このことから、小中で同じ思考力等を育成することになっていることがわかる。

思考の深まりの違いを生むのは「英語」の規定要因である。聞く英語の話題は、小学校では「身近で簡単な事柄」にとどまるが、中学校では「日常的な話題や社会的な話題」と広がっている。聞く英語は、小学校では「簡単な語句や基本的な表現で話される短い会話

や説明」なのに対して、中学校では「会話や説明」と高まっている。また、思考の程度も、「必要な情報を得る活動」から「概要や要点を把握する活動」へと深まっている。

なお、技能、言語、内容については、以下の図2のようにまとめることができる。



図2 扱う英語のまとめ

最後に、「言語の働き」についても分析しておく。

小学校では扱わないが、中学校で扱う言語の働きは以下の通りである。

- ・「気持ちを伝える」 苦情を言う
- ・「事実・情報を伝える」 描写する
- ・「考えや意図を伝える」 約束する、反対する、断る、仮定する
- ・「相手の行動を促す」 招待する

「描写する」については客観的な言語表現が求められる。小学校では「考えや気持ち」という主観的な内容のみを表現することにとどまっているために、扱われないのであろう。また、小学校では「礼を言う」「賛成する」「承諾する」のように支障なく円滑にコミュニケーションが進むような場面における言語の働きは扱われるが、「苦情を言う」「反対する」「断る」のように言いにくい場面、場合によっては人間関係にまで支障が出るような働きは扱われない。そう考えると、言語の働きにおいても、中学校では「広がり」が見られる。

さらには、働きの「深まり」も見られる。例えば、「相手の行動を促す」に含まれる「依頼する」を取り上げて考察する。小学校解説では、Come here, please. とI'd like spaghetti. が例示されている。前者はpleaseを用いることで、命令形を丁寧にして依頼にする表現である。後者は、Austin (1962) のいう発語内行為 (illocutionary act) として依頼を表している。この文は、発話行為 (locutionary act) としては「スパゲティがほしい」、すなわち話者の希望を述べたにすぎないが、その言葉を発することで「スパゲティをください」という依頼を表している。

中学校指導要領では、

例1 A : It's dark outside. Can you turn on the light?

B : Sure.

例2 A : I want to go to the museum. Will you show me which bus to take?

B : O.K, you should take that yellow bus.

例3 A : I'm Suzuki. Nice to meet you. May I have your name, please?

B : I'm Mary. Nice to meet you, too.

の3例が示されている。いずれも助動詞を用いたより丁寧な依頼表現となっている。文法事項として捉えると、扱う「助動詞」の種類が増えたに過ぎない（小学校でcanを学ぶ）。だが、それによって「言語の働き」が深まることに繋がったのである。

1.1.4 小中接続を念頭に置いた指導の在り方

前節の内容をまとめると、中学校では内容面な広がり、技能面での高まり、思考面での深まりがみられるということになる。学習指導要領の内容を、小学校中学年、高学年、中学校、高等学校と俯瞰的にみると、かなり滑らかに接続されていると言える。しかし、学習者である児童生徒にとっては、それぞれの段階の入り口で段差を感じることは事実である。上述した例でいえば、小学校では「ゆっくりはっきりと話される」英語を聞いて「簡単な語句や基本的な表現を聞き取ること」がゴールであったのに、中学校に入ると自然な速度で「はっきりと話される」英語を聞いて、「必要な情報を聞き取る」ことが求められることになる。その段差に戸惑いを感じるに違いない。

それを解消するためには、小学校6年生の後半から中学校1年の前半を「のりしろ」と位置付けて指導に当たるように努めたい。小学校においては技能の高まりを意識した指導を心がける必要がある。たとえば、上の例では、速度を遅くして聞かせている英語の速度を上げて聞かせる機会を作るなどである。

小学校での授業を参観すると、ALTが不自然なほど遅く話していることがよくある。母語の習得においては、そのような場面はまずない。速度が速くなると、語彙処理や統語処理が追い付かなくなるために「聞き取れない」ことが起こる。それを防ぐには、速度を落とすのではなく処理する時間を確保することで解消できる。すなわち、ポーズを入れて聞かせる練習をするなどの工夫をすることで対応できるのである。

書くことの指導についても言及しておく。小学校指導要領では、「例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができる」ことがゴールとなっている。小学校解説によると、「英語で書かれた文、又はまとまりのある文章を参考にして、その中の一部の語、あるいは一文を自分が表現したい内容のものに置き換えて文や文章を書くことができるようにすることを示している」との説明がある。中学校解説では、もっとも基礎的な目標について「「関心のある事柄」について、伝えたい内容を正確な英語で書くことができる力を身に付けさせる」となっている。小学校で行う単に語句を置き換えて引き写す活動にとどまっているだけでは、中学校で求められる活動に十分に対応することは難しい。音声で滑らかに表現できるようになった内容を、書いて表現させる活動に取り組ませたい。自己紹介カードを書かせたり、自分の好きなものを書いて他の児童と読み合うといった活動は、小学校でも十分可能である。

一方の中学校においては、小学校のゴールをしっかりと踏まえた指導が大事である。これまで外国語活動の枠組みで教えられてきたため、学校による指導内容の違いや、シラバスレベルで系統的な指導がなされていなかったためか、小学校での英語教育に配慮した指導がほとんど行われていなかった。そのため、外国語活動が導入される前と変わらず、ABCから始まる入門期の指導が行われることが多かった。しかし、教科として導入されるのであるから、小学校で教えられた内容は復習として簡単に扱う程度にとどめて、教え

直すことは避けてより高いゴールを目指さなければならない。また、たとえば文字指導において、小学校で音声での活動を行ってきた内容を書かせるなど、小学校で学んできたことをうまく活かした指導に取り組みたい。

なお、領域ごとの指導の実践については、第2章で具体的に述べる。

1.1.5 制度、教員の意識改革の側面での取り組み

冒頭で述べたが、小中接続には、教材や指導方法など直接的に指導に関する項目にとどまらず、指導体制、教員養成、研修、現職教員の英語教育に対する意識改革など多方面にわたって課題が残されている。

とりわけ中学校の英語教員には「英語は中学校から」の意識が根強く残っている。中学校教員の意識改革は不可欠の課題である。ここでは、徳島県鳴門市の取り組みを報告しておく。以下の文責は研究メンバーである坂田美佳先生によるものである。

鳴門市では、「小中高連携外国語教育研究委員会」が設置されており、市内全小学校の外国語活動担当者、中学校、県立高校の英語科教員、大学、教育委員会が参加している。年に数回、全体で行われる情報交換や研究授業の他、中学校校区毎に授業参観やTTでの授業等、地域の実態に即した小中連携の取り組みが進められている。このことにより、小中教員がそれぞれの学校や児童生徒の実態を知るとともに、お互いが自分の授業を見直す機会となっている。

(1) 情報交換

年度初めに行われる第1回小中高連携外国語教育研究委員会では、各校の担当者と教育委員会、大学が参加し、全体での情報交換と今年度の計画が行われる。その後、各中学校校区で本年度の小中連携の具体的な計画を相談する。年度末には、年間の取り組みについて各中学校校区から報告し合い、次年度に向けた成果と課題を協議する。

(2) 授業研究会

年に1回、講師を招聘して研究授業を行う。小学校での研究授業後、研究協議では小、中、高と様々な立場から活発な意見交換が行われ、お互いの授業理解と改善に寄与している。

(3) 授業参観

各中学校区において、小中それぞれの授業参観を行っている。授業参観日は市教育委員会を通して、他の中学校区にも通知されるため他の校区からも自由に参観することができるように配慮されている。中学校1年生の授業には、6年生担任が参加し、卒業した児童の中学校での様子を参観できるよい機会となっている。また、中学校の英語の授業を参観することで、小学校の外国語活動の内容とのつながりを感じることができたという声も聞かれた。小学校6年生の授業を参観した中学校教員は、参観後、小学校で使用しているクイズや歌、チャンツを中学校でも導入で使えそうだと話し、実際に1年生の授業で活用されている。

(4) 中学校英語科教員と6年担任での授業

中学校英語科教員がT2として、校区内の小学校6年生の授業で学級担任とTTでの指導を行う機会を設けている。卒業を控え、中学校の勉強への不安を感じる6年生もいるが、中学校の教員と一緒に授業をし、「中学校で待っているよ」と声をかけてもらうことで、不安が軽減されると考えられる。また、「中学校の先生と勉強するのが楽しみ」と中学校への期待をもつ児童の感想も聞かれた。



【中学校教員と6年担任でのTT授業】

1.2 小中連携の必要性

文部科学省初等中等教育局視学官 直山木綿子

1.2.1 はじめに

「小中連携」という言葉は、皆さんも、これまでに幾度となく聞いたり読んだりされているはずであろう。そのように話題になる理由は、それだけ重要でありながら、なかなか進んでいないからではないかと、筆者は考えている。また、この言葉を頻繁に使うようになったのは、小学校に外国語活動が導入されてからであろう。外国語活動導入前、各小学校で「総合的な学習の時間」で国際理解教育の一環として、いわゆる「英語活動」に取り組んでいた際には、そう求められなかったはずである。なぜなら、「英語活動」は、総合的な学習の時間の中で取り組まれるものであり（実際には、英語を使った活動であり、十分中学校英語科につながるものであったが）、「小中連携」をするとすれば、当然中学校の「総合的な学習の時間」と連携されねばならないからだと、筆者は考えている。

さて、「小中連携」が求められるようになった背景について考えてみよう。平成20年（2008年）小学校学習指導要領改訂では、小・中・高等学校で一貫した外国語教育を実施することで、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする力を身に付けさせることを目標に、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」などを総合的に育成することをねらいとして、小学校高学年に外国語活動が導入された。その後、平成23年度（2011年）学習指導要領全面実施以降、各小学校で外国語活動に熱心にお取り組みいただき、その指導の充実が図られてきた。その結果、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められた。一方で、音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘された。また、小学校から各学校段階における指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれ児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができていないといった状況も見られるといった課題も指摘された。すなわち、中学校英語科につながるものとして、小学校に外国語活動が導入されたにもかかわらず、十分に小学校外国語活動での学びが中学校英語科で生かされていないということである。

このような成果と課題を踏まえ、平成29年（2017年）改訂では、小学校中学年に外国語活動を導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年に教科 外国語を導入し、学習者の発達の段階に応じて段階的に「読むこと」、「書くこと」を加えて総合的・系統的に外国語の

学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することとなった。

上記のことから、いよいよ「小中連携」は待ったなしで求められていることが分かる。次の表1をご覧ください。この表は、研究開発学校や教育課程特例校などの一部の学校を除いた、2017年度から2024年度までの児童が受ける外国語活動及び教科 外国語の授業時数を示したものである。外国語活動及び、教科 外国語の時数が、「15-35H」「50-70H」と幅があるのは、新学習指導要領全面実施に向けた移行期間中に、中学年では、15時間、高学年では50時間の外国語活動を実施することが求められ、それ以上の時数に取り組むかどうかは、各校の判断に任されたためである。

	移行期		小学校学習指導要領全面実施	中学校学習指導要領全面実施	高等学校学習指導要領順次実施			
	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
5年活動 35H	6年活動 50-70H	中1	中2	中3	高1	高2	高3	
4年	5年活動 50-70H	6年活動 50-70H	中1	中2	中3	高1	高2	
3年	4年活動 15-35H	5年活動 50-70H	6年教科 70H	中1	中2	中3	高1	
2年	3年活動 15-35H	4年活動 15-35H	5年教科 70H	6年教科 70H	中1	中2	中3	
1年	2年	3年活動 15-35H	4年活動 35H	5年教科 70H	6年教科 70H	中1	中2	
	1年	2年	3年活動 35H	4年活動 35H	5年教科 70H	6年教科 70H	中1	

表1

表1の太枠で囲まれた中学1年生を見ると、小学校での彼らの外国語教育の経験に違いがあることが分かる。それが同じになるのは、2024年度の中学1年生からである。すなわち、2019年度から2023年度までの中学1年生は、毎年度入学時点で英語力が違う状況ということである。よって、中学校英語科教員は、この5年間は毎年度生徒の実態を十分に把握したうえで、指導をすることが求められる。そうでないと、生徒に無駄に足踏みをさせたり、いきなり難しい指導をしてしまったりすることになりかねない。この5年間を考えただけでも、「小中連携」が急務であることがお分かりいただけると思う。

1.2.2 「小中連携」とは何か

「小中連携が必要だ」と繰り返し言ったところで、小中連携とはどのようなことか、そのためにはどのようなことが必要なのかが分からなければ、取り組みようがない。そこで、ここでは、「小中連携」とは何かについて考えてみたい。

文部科学省は、「連携」について、「小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定」ということにポイントを置いている。次の図1を見ていただきたい。これは、文部

科学省が毎年度12月に実施している「英語教育実施状況調査」のうち「小中連携の有無」について、中学校長に尋ねた調査結果をグラフにしたものである。この「小中連携実施」と回答した場合、さらに「どのようなこと取り組んでいるか」という問いに、「授業参観、年間指導計画の交換などの情報交換」、「授業参観後の研究協議、中学校教員による小学校での授業などの交流」、「小中連携したカリキュラムの作成」三択で回答が求められた。よって、文部科学省は、「連携」の最終は、「小中連携したカリキュラム」をさしていると捉えることができる。

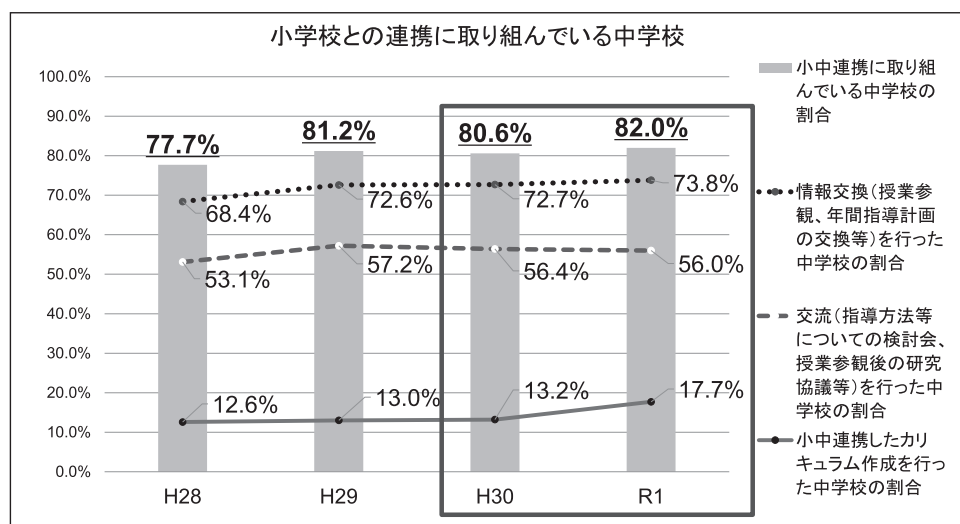


図 1

ところで、このグラフから、小中連携に取り組んでいる中学校区は、平成30年度（2018年度）で8割であることが分かる。この数値を多いと捉えるか、少ないと捉えるか。読者の皆さんはどうであろうか。筆者は、少ないと捉えている。この30年度は、移行期初年度であるが、その年度半分が過ぎた時点で、未だに2割の中学校区で小中連携を行っていないということである。

さらに、調査結果の詳細を見てみる。「授業参観、年間指導計画の交換などの情報交換」とは、小学校教員と中学校英語科教員が授業を見合ったり、使用している教材や年間指導計画などを見合ったり、どのような活動や教材で、どのような言語材料を扱って指導をしているのかなどについて「情報交換」をすることである。「授業参観後の研究協議、中学校教員による小学校での授業などの交流」は、単に上記のような「情報交換」で終わるのではなく、例えば、授業参観後、「今日の授業はこんなところがよかったが、ここをこのようにしたらもっとよいだらう」と次の授業を作るために協議をしたり、乗り入れ授業を行ったりすることなどである。同じ「時」と「場」を共有するなどの「交流」を通して、新しいものを作り出すことである。このような「情報交換」や「交流」を繰り返すことで、互いの気持ちの距離が縮まると考える。筆者は、教育において「遠距離恋愛」が成立するのは困難だと考えており、互いの顔を見て、同じ「時」と「場」を共有し何かを作りあげ的过程中で、互いのことをよりよく知り理解が深まると考える。このような理解の深まりがあって、初めて「連携」に進むと考えている。

さて、「小中連携したカリキュラムの作成」が、「小中連携の最終」と考えられると述

べたが、では、「小中連携したカリキュラム」とは、どのようなものかについて考えてみたい。

一般的にカリキュラムには、次の6つの要素があると考えられる。「環境」、「目標」、「学習内容」、「指導法」、「教材」、「学習評価」。

「環境」とは、授業時数や、どのような立場の人が指導しているのか、教育課程の位置づけは、「活動」か「教科」なのかなど、その環境をさす。そういった「環境」で、何を「目標」とするのか。次に、その「目標」を子供達に達成させるためには、どのような「学習内容」を扱うのか、その「学習内容」を子供達に指導するには、どのような「指導法」で、どのような「教材」を使って指導を行うのか、ということである。そのような「目標」や「学習内容」「指導法」「教材」で授業を実施してみて、どの子供が「目標」が達成できたか、どれぐらいまで目標を達成できたのかという、教師には「指導改善」、学習者である子供には、自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにする「学習改善」につながる、「学習評価」である。

これらのうち、「環境」や「目標」「学習内容」は、研究開発学校や教育課程特例校を除いては、学習指導要領に設定されるとともに、目標の一貫性、学習内容の系統性が担保されている。一方、「指導法」は、学習指導要領には規定されておらず、教師が、目の前の児童生徒の実態と、自身の特徴に合わせて決めていくことになる。これこそが、教師の腕での見せ所であり、十分に力を発揮できる「場」だと思われる。「教材」は、「教科」であれば、教科書を活用することになるが、その活用の仕方は、教師に任せられ、教科書以外の教材は、教師による工夫が生かされる。「学習評価」については、「目標」や「学習内容」、「指導法」「教材」などが大きく関係する。

そう考えると、「指導法」が子供の実態等に合わせて、教師が工夫する部分が一番多いと考えられる。この「指導法」が小学校と中学校で全く違っていたり、小学校で慣れてきた指導法から、急にそれが中学校で一変すると、学習者は戸惑いと不安を感じるであろう。かといって、全く同じということも、子供の発達の段階から考えると問題があると思われる。よって、外国語の特質から考えられる指導法や学習法は、活動や教科であっても、小学校や中学校であっても引き継がれつつ、小学校で児童が慣れ親しんだ指導法が、中学校入門期において、のりしろのように重なり、やがて、徐々に中学校での指導法に移っていくという、「継続性」が大切だと考える。

1.2.3 「指導法の継続性」を意識するために大切にしたいこと

「指導法」がうまく小学校、中学校と継続するために、小学校での指導の在り方と中学校でのそれとの「共通点」と「相違点」を、指導者が理解していることが大切だと考えている。この「共通点」と「相違点」を理解するには、当然のことながら、学習指導要領及び、その解説を十分に読み解くことである。小学校については、これらに加えて、2017年に文部科学省が発行した「小学校研修ガイドブック 外国語活動・外国語」（以降「研修ガイドブック」と呼ぶ）もその理解を助けられると思われる、ぜひ参照していただきたい。

さて、小・中学習指導要領から、この「共通点」「相違点」をかなり導き出すことができると思われるが、紙面の関係上、ここでは、「共通点」と「相違点」を1つずつあげることで、本稿のまとめとしたい。

○小・中学校において、「言語活動を通して」指導することが大切

表2は、小・中・高等学校における外国語教育の目標を分かりやすく並べたものである。これらを見ると、活動や教科であっても、小学校や中・高等学校であっても、児童生徒に「言語活動を通して」コミュニケーションを図る（素地/基礎となる）資質・能力を育成することが求められていることが分かる。

小学校		中学校	高等学校
外国語活動	外国語	外国語	外国語
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの 言語活動を通して、 コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの 言語活動を通して、 コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの 言語活動を通して、 簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次の通り育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの 言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、 情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

表2 小・中・高等学校における外国語活動及び外国語の目標

この言語活動について、「研修ガイドブック」では次のように記されている。

外国語活動や外国語科における言語活動は、記録、要約、説明、論述、話し合いといった言語活動よりは基本的なものである。学習指導要領の外国語活動や外国語科においては、言語活動は、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。したがって、外国語活動や外国語科で扱われる活動がすべて言語活動かというところではない。言語活動は、言語材料について理解したり練習したりするための指導と区別されている。実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うという言語活動の中では、情報を整理しながら考えなどを形成するといった「思考力、判断力、表現力等」が活用されると同時に、英語に関する「知識及び技能」が活用される。

つまり、授業の中心が、児童生徒が英語を使って自分の考えや気持ちを伝え合うことになるようにするということである。そのためには、当然指導者も自分の考えや気持ちを英語で児童生徒に伝え合うことが求められる。例えば、小学校では、単に言葉を繰り返すだけの歌やチャンツ、ゲームは、「言語活動」とは言い難く、それが授業の中心とならないようにするということである。また、中高では、文法解説が授業の中心とならないようにするということである。

ところで、この言語活動を設定するためにどのようなことに留意することが必要かを、やはり学習指導要領から見ることにする。小・中学校学習指導要領には、この「言語活動」にかかわって、次のような文言が記されている。

- ・コミュニケーションを行う目的、場面、状況などを明確に設定
- ・簡単な語句や基本的な表現を用いながら、友達との関わりを大切にしたい
- ・具体的な課題等を設定し、児童が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的や場面、状況などを意識して
- ・言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたり
- ・実際に英語を用いた言語活動を通して
- ・具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを論理的に表現することを通して
- ・実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、2の(1)に示す言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うこと。また、小学校第3学年から第6学年までに扱った簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し定着を図ること。
- ・言語活動で扱う題材は、生徒の興味・関心に合ったものとし、国語科や理科、音楽科など、他の教科等で学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること。
- ・各単元や各時間の指導に当たっては、コミュニケーションを行う目的、場面、状況などを明確に設定

これらのことから、コミュニケーション（言語活動）を行う目的や場面、状況の設定を明確にし、それを児童生徒と共有することが大切であることが分かる。

小・中（高等）学校の大きな共通点として「言語活動を通して」指導することが求められている。一方、相違点についても、学習指導要領に示されている、知識及び技能、思考力、判断力、表現力等に係る目標（表3）から考えてみたい。

○「読むこと」「書くこと」のゴールのギャップを埋める指導が必要

次の表3は、小・中学校学習指導要領に示された、それぞれの「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」に係る(1)(2)の目標を比較しやすく並べたものである。

小学校外国語	中学校外国語
<p>(1) 外国語の音声や文字，語彙，表現，<u>文構造</u>，言語の働きなどについて，日本語と外国語との違いに気付き，これらの知識を理解するとともに，<u>読むこと，書くことに慣れ親しみ</u>，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて，活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする</p> <p>(2) コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，身近で簡単な事柄について聞いたり話したりするとともに，<u>音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読み</u>たり，語順を意識しながら書いたりして，自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。</p>	<p>(1) 外国語の音声や語彙，表現，<u>文法</u>，言語の働きなどを理解するとともに，これらの知識を，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，日常的な話題や社会的な話題について，外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり，これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。</p>

**表3 小・中学校学習指導要領における「知識及び技能」
「思考力，判断力，表現力等」に係る目標（下線は筆者による）**

まず，(1)「知識及び技能」に係る目標から，「文字」の認識，読み・書きは，小学校外国語で扱うことが分かる。つまり，高学年でアルファベットの大・小文字を認識し，読んだり書いたりできるようにするということである。よって，中学校のその目標には，「文字」という文言が示されていない。中学校では，アルファベットの大・小文字は，すでに認識し，読んだり書いたりできるものとして授業が始まるということである。

また，小学校では「文構造」とあり，文の構成要素について理解する，つまり非常に荒く言えば語順についての知識を理解することを求められていると言えるであろうか。小学校外国語で扱う文は限られており，主語＋動詞，[主語＋動詞＋補語]のうち[主語＋be動詞＋名詞/代名詞/形容詞]，[主語＋動詞＋目的語]のうち[主語＋動詞＋名詞/代名詞]の程度であることに留意する必要がある。このように文構造については，限られた文の種類ではあるが，子供がこれらの表現を何度も聞いたり言ったりする言語活動を通して，語順に気付き，それらを書き写したり，例を参考に書いたりすることを通してその理解を確かなものにできるようにすることが大切である。なお，これに対して，中学校では「文法」と記されていることに留意が必要である。

また，高学年外国語の「知識及び技能」にかかる目標は，「聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて，活用できる基礎的な技能を身に付ける」ことであるが，「読むこと」「書くこと」については，中学年の外国語活動では扱っておらず，まず高学年外国語において，慣れ親しませることから指導する必要がある。

さらに，(2)「思考力，判断力，表現力等」にかかる目標には，「音声で十分に慣れ

親しんだ外国語の語彙や基本的な表現」と記されており、「読むこと」「書くこと」においては、中学年外国語活動から音声で十分に慣れ親しんだ語彙や基本的な表現を扱い、初出のものを読ませたり、書かせたりすることまで求めているわけではないことに留意する必要がある。

以上のことから、高学年外国語における「読むこと」「書くこと」については、「聞くこと」「話すこと」と同等の指導を求めるものではないことが分かる。つまり、小学校卒業段階で、これまでの中学1年生で求められた、聞いたり読んだりしたことについての感想や、身近な場面における出来事や体験したことなどについての自分の考えや気持ちなどを書いたり、まとまりのある文のあらすじや必要な情報を読み取ったり、書き手の意見などに対して感想を述べるなどができるよう、書かれた内容や考え方などを捉えたりする力を付けているわけではないということである。

このようなことから、小学校高学年で求められる「読むこと」「書くこと」の目標と、中学校で求められる「読むこと」「書くこと」のそれとの間に大きなギャップがあることが分かる。小学校教員と中学校英語科教員が大きなギャップがあることを理解し、小学校教員は、児童が中学校での学習に期待を持てるよう、確実に小学校での学びを指導することが大切であり、中学校英語科教員は、その専門性を生かし、このギャップを埋めるため、「読むこと」「書くこと」について細かなステップを踏み丁寧に指導することが大切である。なお、「書くこと」についての詳細は、本誌「2. 4 小・中学校の滑らかな接続を目指した外国語科学習指導の研究～「書くこと」に焦点を当てた学習指導の在り方についての提案～」を参照されたい。

1.3 英語教育における小学校から中学校への滑らかな接続を考える

岐阜聖徳学園大学教授 加納 幹雄

1.3.1 英語教育における「小中連携」のはじまり

新しい学習指導要領に基づく小学校の「英語科」が始まる段階において、小中の連携や「滑らかな接続」を考えるのが今回の研究課題である。この英語教育における「小中連携」という教育課題は、小学校における英語の学習を導入するかどうかの議論が長い検討の歴史を持つように、長きにわたって提案され続けている話題でもある。

そこで、最初に本テーマに関わってこれまでどのような議論があったのかを概観し、その後これまでの議論を踏まえて本研究会の提案を試みることにする。

(1) 文部科学省研究開発学校の研究テーマ

文部科学省は、学習指導要領に基づく研究指定校と学習指導要領に基づかない例外的な研究開発校を制度化して、よりよい教育指導の改善を図る仕組みをもっている。松川（2004）は、『明日の小学校英語教育を拓く』の中で、日本の小学校における英語教育の導入について歴史的な年表をつくり、まとめを行っている。その中で、「2000（平成12）年度に研究開発学校が変わって以来、ここ数年の研究開発のテーマや内容をみると、それ以前とは異なる傾向が見られます。1つは『教科としての英語』を研究テーマとする以外に、幼・小連携あるいは小・中連携を主題にした一貫性のある教育課程の編成が指定の内容として目立ってきたことです。特に小・中連携教育については、英語だけでなく各教科における9年間の系統的な教育課程の編成を主題にした取り組みが指定を受けています。」と述べている。

松川は、同書の中で文部科学省のホームページから拾い上げた研究開発の研究内容を一覧化しており、そこから「小中連携関連」の研究内容を拾い上げてみる。

- ・高知県田野町立学校（2002～）
- ・文字の指導時期と方法の研究
- ・埼玉県春日部市立学校（2003～）
- ・小中教員との連携の在り方
- ・教育課程編成の在り方
- ・岐阜県笠原町立学校（2003～）
- ・小中9年間を見通したカリキュラム・指導方法・評価・指導体制の研究
- ・沖縄県那覇市立学校（2003～）
- ・小中一貫した英語教育カリキュラムの研究
- ・千葉県成田市立学校（2003～）
- ・小学校から中学校への効果的な接続に関する研究
- ・石川県金沢市立学校（2003～）
- ・小学校教員の中学校への派遣による連携
- ・大阪府河内長野市立学校（2003～）
- ・小・中学校を通じて意欲的に学習するカリキュラム研究

このように掲載されている学校のひとつほとんどすべてが何らかのテーマで、小中一貫した英

語教育のカリキュラム研究を挙げていることがわかり、小中一貫と言えば、この時期では、カリキュラム研究を指すという状況が見受けられる。

(2) 中部地区英語教育学会の研究テーマ

中部地区英語教育学会は、2005年度の役員会で、課題別研究プロジェクトを検討し、「英語教育における小中連携」を取り上げて、学会組織を挙げて研究する課題であるとの認識を示した。その取り組みについて紀要に短い報告があり、それを概観してみる。

第1年目の研究の報告書「中部地区英語教育学会紀要36」（2006）334頁では、3名の研究者が報告を行った。

○大下邦幸（福井大学）は、

①小中連携を考える前提条件として「時間数」「教師の力量」「動機付け」「発達段階」の相互関連を整理すべきであること。

②また研究開発学校の小中連携の成果と課題を整理すべきである。

③小学校英語活動の目標と中学校英語教育の目標の明確化。

④小学校と中学校の学習の特徴や相違。

このような基礎研究の上に、以下のような研究を進める必要を指摘している。

⑤小中を見通したシラバス

⑥指導方法論の確立

⑦教材の整備・開発

⑧小中教員の連携

○高橋美由紀（愛知教育大学）は、小中の児童・生徒間での連携の取り組み例を示し、相互交流（中学生による出身小学校での授業参加、中学校文化祭での小学生の英語活動発表など）を示し実際の指導事例を紹介している。また、教師間の小中連携の取り組みとして「訪問型」研修、「集中型」研修の内容を紹介し研修の在り方の提案を行っている。

○野呂忠司（愛知学院大学）は、この当時、文字指導についての賛否両論に対して、実践研究の動向を調査して文字指導の必要性について指摘している。

第2年目の「中部地区英語教育学会紀要37」（2007）403頁をみると、

○白畑知彦（静岡大学）は、国語能力と英語能力を伸ばす9年間のプログラムを紹介し、

○大和隆介（京都産業大学）は、音声指導に特化したシラバス提案、指導者に求められる能力や資質、指導方法と教材の利用法についての提案を行っている。

○林桂子（広島学院大学）は、小中連携を阻むものとして、指導目標（コミュニケーション能力の育成）と学習目的（入試のための学習）との乖離を指摘している。この要因を分析して、「言語距離」「開始学年」「学習時間」の課題を掲げ、先進国との比較を通して小中一貫の英語の達成目標が不明確である点を指摘している。さらに小中の教育目標に応じた教員養成の在り方にも言及している。

なお、この間2007年に松川禮子と大下邦幸は、高陵社書店から『小学校英語と中学校英語を結ぶ』として中部英語教育学会の課題研究プロジェクトのまとめを出版している。この書の中で小中連携の課題として、

○白畑は「中学校からの学習により、小学校での英語学習の経験がなくてもいずれ追いつくことができる」「小学校で受けた英語教育の成果がその後十分に活かされなかったため、

足踏み状態が続いてしまった」という指摘をしている。これは、指導が発展的に継続していないという問題の指摘である。

○犬塚章夫（愛知県総合教育センター）は、「ALT（Assistant Language Teacher）が訪問するときは、ALTにおまかせの授業になっている」「ゲーム的な活動では、基本的な会話の問答文を暗記して、それを使いながらゲームを行っている。英語を正しく話している児童もいるし、あいまいなまなんとなくまねして話している児童もいる」と訪問の印象を述べている。これは、授業の成果が評価の対象として位置づけられず、十分に判定されないまま（やりっぱなし）になっていることを示すものとして深刻である。

○野呂は、1997年の中央教育審議会答申の「小学校で英語教育を導入する場合、文字を導入しない」を受けた2001年の文部省『小学校英語活動の手引き』がその後の英語教育へ大きな影響を与えたと指摘している。また、「フォニックスを取り入れた文字指導は小学校と中学校がうまく連携できる領域である」（116～117頁）とし、文字指導に係る課題は小中連携に避けて通れないと指摘している。

- 林は、①初等教育と中等教育のそれぞれのカリキュラムと達成目標を明確にすること
②開始時期、学習時間の一定量の確保、適切な教員養成訓練を受けた指導者
③文字指導の必要性
④課題活動や宿題は、学校だけでなく、家庭との連携が大切
⑤評価は、個人の目標達成の目安となるように考えること
⑥たくさんの英語に触れる言語環境を与えること

の6点に小中連携の課題を整理している。

○高橋は、教員研修の在り方から小中一貫教育の課題を解決しようと提案している。単なる情報交換の機会としてではなく、担任等が児童の実態を把握しているメリットを活かして授業のアイデアを出すこと、そのアイデアを英語のコミュニケーション活動として成立させるために中学校英語教員の専門的な支援・助言を求めることなどを提案している。

1.3.2 新しい学習指導要領に基づく英語教育の展開と小中一貫教育

小中一貫教育の課題は、その時々の英語教育の目標や内容面だけでなく、担当教員の資質・能力の課題や言語環境など様々な視点からとらえられてきていることがわかった。令和2年4月から新しい学習指導要領に基づく教育が始まる。これまでと新しい学習指導要領に基づく教育とは、何が違うのか。また、その違いは小学校や中学校の教育にどのような影響を及ぼすのか。

2019年8月号の『初等教育資料』の特集記事の中で、文部科学省は、今後取り組んでもらいたいことを5点にまとめ、その1つに「学年が上がるにしたがって、外国語を用いてコミュニケーションを図りたいという意欲とその力を高めるよう小中連携を一層進める」として小中連携に言及している。

引き続き、2020年1月号の『初等教育資料』では、特集Ⅱにおいてかなりの頁を割いて新しい学習指導要領に基づく中学年の外国語活動と高学年の外国語科の導入直前に押さえないポイントをまとめている。特に後述する小中の一貫・小中の滑らかな接続の授業づくりにつながるポイントを拾い上げてみる。（本項の下線は筆者による。）

直山木綿子（文部科学省初中局視学官）の指摘は以下のとおりである。

①目標達成に向けた資質・能力は、「言語活動を通して」行うことを何度も繰り返している。その理由は、「言語活動」が言語材料の理解や練習する指導と明確な違い・区別をもっているからとしている。つまり、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を行わないかぎり、言語活動を行ったといわないという指摘である。

②練習が言語活動につながるものになっていることが必要という指摘。この指摘は、新しい言語材料を導入する際には、分かりやすい説明を行いながらその理解を進め、その後説明事項が十分に理解できたか、あるいは理解を進めるために「練習」を行うことがあるが、この定型練習がうまくいったことで十分な活動が為されたと勘違いしてはならないという警鐘であろう。

③コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定し、子供と共有したり、あるいは、子供と設定したりした上で、言語活動を通した指導が必要という指摘。この指摘は重要である。それは、新しい学習指導要領の具体的な各教科目標の（3）に示された「学びの在り方」に深く関連するからである。教員の指示を受けていわば「受動的に」行う学習に終始してはならないというメッセージである。学習者が自らの学習についてメタ的な認知を求められていることを示しており、重要な視点となる。

④小学校教員の英語力や指導力に対する不安感がぬぐい切れていないという指摘。この点は、小学校における英語の学びの機会を設けるかどうかの議論が始まって以来の指摘事項である。この問題を教員研修や校内指導体制の整備に還元することは、時間的にも間に合わない。そのため、直山はこの不安感を授業づくりの中で走りながら養成に努め積極的に解決するしかないと指摘している。

⑤今回の改訂の大きな注目点となっている「話すこと（やり取り）」については、子供同士が実際に英語を使ってやり取りする中で、自分の考えなどを整理し再構成して、表現につなげていく姿を目指すべきだという指摘。ここでは、指導の場面として、実際に「やり取り」があること、「表現につなげていくこと」の2点の指摘が重要である。とかく、ペア活動やグループ活動がよく設けられるが、定型表現を言い合っているに過ぎないシーンがよくある。実際に期待される「やり取り」は、互いに「やり取り」することを目的化するのではなく、互いの考えなどの「やり取り」が基本であるとの指摘である。

1.3.3 新しい小中一貫教育・滑らかな接続を展望する英語の授業イメージをつくるために

先に挙げた資料1月号では、文部科学省の基調的な論説に引き続き、8つの教育委員会や学校の事例が掲載されている。その事例の中から、繰り返し提案されて重なりのある事項は以下の13項目である。

①Small Talk の設定・②クラスルーム・イングリッシュの使用・③言語活動の設定・④子供が自分の思いを伝える授業・⑤活動の必然性・⑥意味のある「やり取り」・⑦身近で必然のある教材・⑧子供を引きつける本物の教材・目的や場面、状況の設定・⑨相手に応じたやり取り・⑩十分に聞かせ発話に急がせないこと・⑪子供たちが学びのイメージを持つこと・⑫やり取りの最中に中身が変わってくるか、反応があるか・⑬何のための活動か、誰に対する活動か。

次にこの中から小中の一貫をイメージしやすい2つの実践事例を取り上げる。

(1) 「意味のあるやり取り」の設定例

① 小学校学習指導要領と中学校学習指導要領との関連

小学校（高学年）	中学校
ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問したり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。

② この事例のポイント

これは「話すこと（やり取り）」に関する事例である。以下に順に示す小学校の「インタビュー活動」も中学校の「自己紹介し合う」もたくさんの情報を収集する点では同じである。しかし、量的な多さの「やり取り」からは小中一貫の成果は出てこない。注目すべきは量ではなくて、情報を収集する活動に「やる意味を持たせること」を扱う点である。なぜ「たくさん」行うのかの意味を小学校の学習経験で理解させ、それを中学校に引き継がせたい。小学校では贈る相手を喜ばせるバースデイカードを作るには、相手からできるだけたくさんの情報を聞き出し、他にはない情報を選び出す仕事が必要であろう。これと同じことが、中学校の自分と気が合いそうな友達選びのために必要な情報を選び出す活動にも通じている。単に「情報をやり取りする」だけの活動や、やり取りの量だけに意味を見いだしているだけでは、小中接続の発展性は見えてこない。「たくさんの情報を得る」意味を教え、「唯一無二の情報」や「同じ価値観」を得るために「たくさん」行う意味が子供にもわかる必要がある。こうした認識や指導理念が「接続」には不可欠であるという事例である。

③-1 小学校5年生の事例

○活動例

Let's Try! 2 Unit 7 「バースデイカードを作るために「詳しく」インタビューしよう」

○授業過程（場面例）

教師：This is my birthday card for K sensei. What is this?（釣りの竿の手書きの絵をみせながら）

児童：マジであげるの？

教師：うん。マジだよ。Yes. K sensei wants a rainbow color fishing rod.
だけど、このカードをね、あげるんだ。

Today's Goal; (板書)

相手が喜ぶバースデイカードを作るためにインタビューしよう。

○この後の活動の進み方

- ・今日のキーワードは「詳しく」だよ。
- ・（先生が準備した）カードにインタビュー相手の「誕生日の日付」「欲しい物」を記入しよう。

- ・ 詳しく（相手に）聞くとね、相手のことがよくわかる。
- ・ だから、今までに習ってきた表現を使って詳しく聞き取ろう。
- ・ どんな表現が使えるかな？

When is your birthday? What do you want for your birthday present?

What color (do you like)? What size? How much? など使えるね。

What syurui? もいいけど、What kind? もいいよ。What flavor?

Why? 理由だね。

*このような必要な表現をインタビュー活動に入るまえに、児童と一緒に（こども大切な指導姿勢）表現の洗い出しをする。

- ・ インタビュー・カードを用いて、ランダムにインタビュー活動を行う。

○確認事項：なぜ、バースデイカードを作るために「詳しく」インタビューさせるのか？

- ・ バースデイは、1年に1回の大イベント・大切な日。
- ・ そのプレゼントは、他の誰にもできない素敵なものにしたい。
- ・ 他の誰にもまねができない心のこもったものにするには、相手をよく知らないといけない。だから「詳しく」が意味のあるやり取りを導く。

○提案事項

小中一貫した教育課程を考えると、直接的な活動は、情報を集めることになるが、本来の目的は、「相手が喜ぶ」カードの作成である。すると、集めた情報から、「相手が喜ぶ情報」「他の児童が思いつかないような個性的な情報」など「選択させる」が必要となる。「やり取り」というと、とかくその量的な多さが期待されることになるが、情報をやり取りする活動の意義を教えたい。では、やり取りの結果「価値ある情報を選択させる」工程に進めることは中学校の1年生の例でとらえるとどうなるであろうか。

③-2 中学校1年生の事例

○活動例 NEW CROWN 1 Lesson 1 I am TANAKA Kumi

学級のみんと自己紹介し合おう - どんな子が集まったかな。

○授業過程（場面例）

教師：Everybody! Open your text book to page 20-21. You can find the first day of Mr.Oka's class. What are his students doing?

生徒：Mr.Oka is talking with Emma.

Ken is talking with Meiling.

教師：Yes, that's right. Who are they talking with?

生徒：初めてクラスメートと話しているのだと思います。

教師：So, what kind of topics are they talking about?

生徒：名前。好きな食べ物、好きなスポーツ。

教師：自己紹介しあっているんだね。

Today's Goal; (板書)

たくさん自分を紹介をして、たくさん相手のことを知ろう。

○この後の活動の進み方

- ・今日のキーワードは「詳しく」で、自分を紹介したり相手のことを知ったりしよう。
- ・（先生が準備した）カードに「相手の名前」「聞き取ったこと」をメモしよう。
- ・今までに習ってきた英語の表現にはどんなものがあるかな。

Nice to meet you. Hello. How are you today? When is your birthday? What sports do you like? I play soccer. I can play the piano. Where do you live? What food do you like? When is your birthday?

- ・いっぱい質問できるなあ。たくさん教えてたくさん聞きましょう。
- ・紹介カード（先生が準備）を持って友達と自己紹介しあう。

○確認事項：なぜ、小学校における質問文を復習させたかという。この中学校1年生の段階ですでに相手に対してたくさんの質問ができることを思い起こすことにある。しかも、生徒と一緒に行うことに意味があり、「自己紹介の場面を想定させて使用できる質問応答表現を思い起こさせ確かめること」は、活動前の導入活動としてとても重要である。

○提案事項

初めて行う自己紹介の機会では、相手の素性を知ることが目的の第一義である。しかし、いろいろな情報を得ても、単純な情報にとどまるような情報もあれば、自分にとって有用な情報もある。新しいクラスになってだんだんと馴染んでくるが、外向的な生徒もいれば内向的な生徒もいる。初めのうちは、表面的に小学校で学んだ定型表現を使って「好きなものなどのやり取り」になっているが、情報を与えたり獲得したりするやり取りだけをさせていては一貫性は生まれない。そうではなくて「どんな友達がいるか」という得られた情報の中から「有用な情報としての価値付け」を行ったり「自分にとって深めたい情報の追加」などコミュニケーションの目的や価値を教えることがポイントになる。選択したり価値付けをする学習が「一貫・継続」を実現させると考えたい。

(2) 子供たちが「学びのイメージ」を持つ事例

①小学校学習指導要領と中学校学習指導要領との関連

- ・言語材料の一貫性：小学校のcan do と中学校 can do more ～, can do ～er

小学校（文及び文構造）	中学校（文及び文構造）
d 疑問文のうちbe動詞で始まるものや助動詞（can,do）で始まるもの *canは「能力」	f 形容詞や副詞を用いた比較表現 *can は「能力」「許可」「依頼」

言語材料（ここでは文法事項）がコミュニケーションを支える重要な柱であることは多くの教員が認めるところである。一番の問題は、そうした言語材料にどのように「出会うか」である。言語材料との唐突な出会いは、学習意欲を削ぐことになり、避けなければならない。そのように考えると、小学校では容易に動作がイメージできること（ここでは、can do）と中学校での容易に動作と動作の関係がイメージできること（ここでは、比較）は、文法事項への壁を低くする「出会い」の鍵となる。

②この事例のポイント

小学校では、canを用いて動物の特徴、A rabbit can run fast.等を言い表す単元である。様々な動物の特徴を can run fast で述べることは、小学生でも無理がない。もちろん、中学生でも無理がない。教科書で扱われた動物の例を用いて動作の特徴を「言い表す」(小学校段階)から動作の様子を「比べる」(中学校段階)という学習へ引き継ぎすれば、文法事項も大きな壁にはなりにくい。小学校の学習経験 (can do) を活かして例えば「ウサギと亀」はどちらが速いか(ウサギの動作とカメの動作の比較)に広げることによって、「ウサギは亀よりもっと速く走ることができる。」という比較の表現の導入や理解は容易となる。

③-1 小学校5年生の事例

○活動事例

We Can! 1 Unite 5 She can run fast. He can jump high.

○授業過程 (場面例: can との出会い)

教師: I like baseball. Who is this? (Ichiro の写真を見せて)

児童: Ichiro.

教師: Yes, he is Ichiro. He plays baseball very well. I like him. Do you like him?

児童: Yes. Yes.

教師: He can run s-l-o-w? f-a-s-t?

児童: Fast. He can run fast.

教師: Yes. He can hit a ball very well.

Today's Goal: (板書)

「できること」「できないこと」の言い方を知ろう!

○この後の活動の進み方

- ・教師がWho am I? クイズを行う。教科書の34~35頁の動物の運動会の様子を描写し、ヒントを与えて、どの動物のことに言及しているかを当てるもの。
- ・その後、グループになってクイズを作る。
- ・そのグループ内で、クイズを行う。
- *最初は、fly jump run などの動詞だけを言って該当動物を当ててしまう例が多発。そこで、指導を入れて、I can fly. I can jump.と言い直しを要求。

○確認事項

文法事項can の導入に際して、動物のもつイメージを生かして、対象となる動物の動作の特徴を使い、can do を導入する。

○提案事項

英語科の場合に、小学校と中学校の連携というと、「文法事項をどのようにつなぐことができるか」が持ち上がる。We Can! 1では、Unit 5 の最初の見開きはいろいろな動物たちが駆けっこやプールで競泳をしている場面となっている。比較の指導場面でもないのだが小学校の指導書の45頁には、「誰が一番早く走れるか、一番高く跳べるか、一番速く泳

げるか（歩けるか）」とのいった学習についても補足説明してあり、この単元が中学校の比較の学習に連動することがほめかされている。ここでは、馴染みの動物の特徴を活かすと、チータは足が速く、カンガルーは高くジャンプし、カモノハシは泳ぎがうまいというような一般論がうまく当てはまり、can run can jump can swim を連想しやすくなる。これがcan doの学習事項として動物を使う積極的な理由である。なお、動物を使うとcan doだけでなくcannot doもイメージしやすい。例えば、初めに教員が黒板に池や大木、山や草などを配置した野原を描き、ウサギのぬいぐるみを準備して野原を走らせれば、A rabbit can run fast. A rabbit cannot swim in the pond. など大喜びで自分たちの方からcan doの表現を見つけて、教員の役をしたいと言い出す児童も出てきそうである。

③-2 中学校2年生の事例

○活動例 NEW CROWN 2 Lesson 5 Presentation

○授業過程（場面例:比較級との出会い）

教師：Look at this picture. A rabbit and a tortoise. They are standing at a start line.
What are they going to do?

生徒：競争。

教師：Yes. They are waiting for a starting gun. Who will win?

生徒：A tortoise will win.

教師：Why? He cannot run. He can walk slowly.

授業の冒頭から「今日の学習は比較級です。」といきなり始めないで、おとぎ話を利用したりして生徒との対話を仕組めば、おそらく「比較」という概念の理解は容易となる。We Can! 1で習った動物をたくさん用いて動作を描写させれば動物のできることやできないこと、その動作の特徴などを活発に叙述することができる。このようにして動物の動作のイメージや動作の比較を膨らませる。その際に、「英語で比較したいときはこういう言い方をする」という比較級の言語形式を添えるだけで説明はあまり必要ない。「添える」とは「速く走る」なら A rabbit can run fast. 「亀よりももっと速く走る」なら A rabbit can run fast. と A tortoise can run fast.とを示し、どちらがfasterかを「添える」ということである。

○確認事項

この事例のポイントは、常に説明して練習して、運用へ運ぶという教授スタイル・ステップを踏む必要があるかどうかを問い直すことにある。むしろ、先に目標言語形式に入り込ませることもあってもよい。小中一貫という意味は、「無駄を省く・効率的な教授」も重要なポイントとなる。「今日の学習は比較級です。比較とは」で始まる講義調で学習を開始しては、小学校の2年間の学習を生かすことにはならない。

We Can! 2の指導書の24頁には、自分たちで言いたいことを言えるようになるためには「文の仕組みを理解することが欠かせない。しかし、まだ外国語学習を始めて間もない児童に、いきなり分析的に文の構造を学習させるより」として分析的な教授法にこだわらないことが述べてある。このような工夫が小学校でもあるのだから、中学校でも同様の工夫があってもよいと思われる。

1.3.4 小中一貫英語教育に関する議論のまとめ

本会は2年間にわたり、計8回の会合をもった。その間に、「小中一貫の英語教育」に関するいくつかの知見が得られた。その中の中心的な議論の成果は、本書に実践記録や実践的なモデルとして理論的な裏付けを添えてまとめて掲載されている。しかしながら、議論を深めて審議することはできなかったが、今後検討を必要とされると思われる事案も多々あった。そこで、単発的ではあるが、今後どこかで再考したい事項を書き留めておくこととした。

- ・目標は一貫性、内容は系統性、指導方法は継続性の視点から考察する。
- ・子供の活動をベースにシラバス化を考える。すると、経験シラバス・知識シラバス・活動シラバスなどができてくるのではないか。
- ・これまでの英語教育は13才から。今後は9才から始まる。大人の認知と子供の認知の特徴の研究が必要。
- ・他教科や他の学校の授業を見合うことはあるが、学びの在り方を共有できていない。
- ・認知処理と量の関係をもっと考えるべき。そもそも教える量が少ないのではないか。
- ・言語としてみる（国語科）見方、コミュニケーションとしてみる（英語科）見方。
- ・「やり取り」ができるには、話題があって話しかける側と聞き取る側の双方の条件がそろふこと。
- ・連携という言葉を使っているが、接続の在り方としても考えるべきではないか。
- ・ことばの使用場面とか働きというが、小学校ではあまり実際的ではないかもしれない。小学校では、むしろ日常的な体験、暮らしの中で考える。中学校では必然的に get（理論）→use（実践）が扱われる。
- ・発話している風景を観察すると、量は増えるけれど、質が高まってこない例が多い。
- ・読むことや書くことのスタートが遅れていないか。扱いが遅れる分、習熟も遅れる。
- ・赤ちゃんや幼児に話しかける母親のスピードは速い。ゆっくりばかりでは速い内容は聞き取れないのでは。指導案にスピードの意識は加味されているのか。
- ・小学校では、同じようなフレーズが何度も出てくるが、それが「覚える」になっており、まとめられることはない。骨組みを教えることをしなくてもよいのか。
- ・中学校の教科学習が外国語活動化しているとの批判が散見されるようになってきた。
- ・子供にとっては、表現形式を知っていることと何かを産出することは同じではない。
- ・モーラ（日本語）と音素（英語）の違いなど、L1の影響は、小学校3・4年生でもないのか。その一方で、そもそもことばの学習への出会いが13才では遅かったのではないか。
- ・授業に問いがない。形式的な「わかりますか?」「知ってますか」に終始している。
- ・なぜ、中1ギャップが生まれるようなことになったのか。考えるきっかけとして発問がKeyになる。Factual Question, Conceptual Question, Provocative Question などによって「高度化」「広がり」「深まり」を企画してきたか。
- ・「使用」に勘違いがないか。用意されたものに当てはめて「使用」しても「使用した」とは言わず、「当てはめた」というのではないか。
- ・「同じ間違いを何度も繰り返す」例がある。小学校では、間違えることを前提とするも、いかに修正していけるかを問うことも必要。

- ・「目的や場面、状況に応じて」は、小学校から中学校に進むにつれて「使い分け」が求められると考える。
- ・例えば、英語の文章を読む。「何が書いてありますか?」という問いに、書いてある事実を述べれば、読むことの知識・技能を働かせる。これを「この文章の中で一番作者が言いたいことは何ですか?」と問うと、生徒は読み取った事柄を「加工する」ことになる。このような読むskillを中心にすることから「相手意識」「自分の主体性」を問うような発展性は重要。

昭和の終わりから議論が始まった英語教育の開始年齢の議論は、令和2年の4月から「教科」としての英語教育が教科書に基づき開始されて、ひとまず議論の決着をみることになる。しかしながら、これまでの議論がすべて解決されたことではない。その意味では、走りながら今後も考えるということである。今後の「小学校と中学校の接続の在り方」は、目標から内容・教材、指導方法や評価のどの断面を切ってもこれまでの経験則を単純に当てはめることをしないようにしたい。外国語活動を行ったといっても、それは、似通ったものを扱ったとは言えるが教科を扱ったわけではないからである。その意味で、今回の研究会の報告はいくつもの提案であり、これから実践的に検討されるべきものであると考えている。

(参考)

文法の項目について、本稿の終わりに文部科学省の小学校の資料と中学校の検定教科書で扱われている文法（言語材料の扱いの一覧）項目の学年比較を付した。その理由は、小学校5、6年生と中学校1年生で扱われる言語材料を拾い上げてみると、中学校の内容は、ほとんどすべて小学校で何らかの形で扱われていることがわかるからである。つまり、中学校が新出の文法事項としている大半は、実は新出ではないということである。（ただし、令和2年4月から用いられる教科書については、手に入れることはできないので別途点検されたい。）

なお、小学校や中学校の教員が考えている文法事項の扱いに関して、先に参照した『小学校英語と中学校英語を結ぶ』では、

- ・小学校の教員が英語活動において「基礎的な文法の学習」を否定的に回答している。（積極的に指導する事項との認識にはないということ。）
- ・中学校の教員は、小学校で英語を学習してきた生徒に対して、文法力が高いとは評価していない。
- ・中学校の教員は、「基礎的な英文法の学習」を小学校での重要な学習としてとらえていない。

と調査結果をまとめている。さらにこのまとめに、小学校の英語活動を受けて中学校英語教育を変えていくことの必要性についての調査を加えている。しかしながら、調査結果には、中学校側に英語教育の在り方を変える必要があるとの認識はあまりないことがうかがわれると記している。これらの調査を重ねると、小学校の教員は文法事項は中学校の仕事と考え、中学校の教員は自分たちの英語教育の在り方を変える必要がないと考えていることとなる。これらの結果を合わせると、小学校における言語材料の扱いは何処へ行くことに

なるのか。小学校が英語科の教育を始めるに当たって、「基礎的な文法事項の学習」は行き場を失っているかもしれない。（ただし、この状況は教科としての英語教育が始まると、大きく変わってくるかもしれない。）

文法（言語材料の扱いの一覧）項目の学年比較

We Can! 1	We Can! 2	New Crown 1
Unit 1 Hello, everyone. アルファベット・自己紹介 Hello, I'm Saki. Nice to meet you. I like blue. I don't like red. What sport do you like? I want a new ball. 疑問詞・S+V	Unit 1 This is me. 自己紹介 I'm from Shizuoka. I can play soccer. I am good at playing soccer. What is your favorite color? What fruits do you like?	Lesson 1 I Am Tanaka Kumi 田中久美です。よろしく。 I am Tanaka Kuni. You are Ken, right? Are you from Australia? I am not. I'm from Canberra. Nice to meet you. I'm tired. Be 動詞
Unit 2 When is your birthday? 行事・誕生日 When is your birthday? Do you like soccer? Yes, I do. 助動詞 Do you ?	Unit 2 Welcome to Japan. 日本の文化 In summer we have festival. we have It's fun	Lesson 2 My School ALT 1 の先生を案内しよう This is -. Is that - ? This is not - . What is this? 指示代名詞 三人称
Unit 3 What do you have on Monday? 学校生活・教科・職業 Do you have P.E. on Monday? I study Math. I want to study Math. want to 不定詞 曜日・教科名	Unit 3 He is famous. She is great. 人物紹介 I like tennis. She is famous. 三人称 英語の語順への気付き	Lesson 3 I Like Soccer 好きなものは何？ I like to play soccer very much. Do you play the guitar? What do you have in your hand? What food do you like? I sometimes cool it for my family. 一般動詞 SVO 疑問文否定文 What food
Unit 4 What time do you get up? 一日の生活 What time do you get up? I usually get up at 7:00. 頻度・数字	Unit 4 I like town. 自分たちの町・地域 We have a park. We can enjoy fishing.	Lesson 4 Field Trip 校外学習って楽しいね。 I have two bags. How many -? Play - Don't play - . Some any 複数概念 命令文 否定命令
Unit 5 She can run fast. できること Can you sing well? She can. He cannot. 可能のcan like ~ing 動物名	Unit 5 My summer vacation. 夏休みの思い出 I went to my Grandmother's house. I saw the blue sky. It was exciting. 過去形 Do you? の活用	Lesson 5 Our New Friend インドからの転校生 Who is -? him her When do you -? Where do you -? 疑問詞 目的格
Unit 6 I want to go to Italy. 行ってみたい国や地域 Where do you want to go? I want to eat pizza. sound+c 様々な国名	Unit 6 What do you want to watch? オリンピック・パラリンピック What do you want to watch? I want to watch basketball. Are you good at basketball? Yes, I am. No, I'm not 不定詞 スポーツ競技名	Lesson 6 My Family ALT の先生のふるさとはどこ？ Miki plays - . Does Miki play - ? Miki does not - 三人称現在
Unit 7 Where is the treasure? 位置と場所 Where is the treasure? Go straight. Turn right 時間・場所前置詞 文房具名 命令文	Unit 7 My best memory. 小学校生活・思い出 What's your best memory? We enjoyed running. We went to Kyoto. 規則動詞・不規則動詞 the best -	Lesson 7 Sports for Everyone. いろいろなスポーツ Koji can play - . Can Koji play - ? Koji cannot play - . 助動詞can 能力
Unit 8 What would you like? 料理・値段 I'd like spaghetti. How much? Here you are. 助動詞would 受動態 fried grilled	Unit 8 What do you want to be? 将来の夢・職業 What do you want to be? I want to be a vet. スピーチ原稿 大文字小文字の書き分け	Lesson 8 School Life in the USA アメリカの中学生の生活 Tom is studying - . Is Tom studying? Tom is not studying- . 現在進行形
Unit 9 Who is your hero? あこがれの人 Who is your hero? He is good at playing tennis. She can cook well. be good at -ing	Unit 9 Junior High School Life 中学校生活・部活動 I like basketball. I want to join the team. What club do you want to join? I want to study hard. 現在進行形	Lesson 9 Four seasons 日本の四季を楽しもう Amy played - . Did Amy play - ? Amy did not play - . Amy went to . 過去形規則不規則動詞

第2章

小・中学校の滑らかな接続を目指した英語科学習指導の研究

-実践編-

2.1 「聞くこと」における小中の接続を目指した指導

広島大学附属小学校 主幹教諭 西原 美幸

2.1.1 小学校学習指導要領と中学校学習指導要領との関連

(1) はじめに

2016年12月に発表された中央教育審議会の答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策などについて」には「持続可能な開発のための教育（ESD）は次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」と記載されている。この答申に基づき改定され、2017年3月に公示された幼稚園教育要領，小中学校学習指導要領においては前文及び総則に「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられており，各教科等においても関連する内容が盛り込まれた。

従来の学習指導要領では，「子どもの人間として調和のとれた育成をめざし」と個人の成長を目指していたが，今回の改定では新たに「前文」が設けられ「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」ことが明記されている。自分自身の豊かな人生だけではなく，多様な他者と力を合わせて「持続可能な社会の創り手となる」よう強く求めると解釈できる。小学校外国語科でも，中学校との接続を考慮し，この理念に資する教育をめざし，英語学習指導の研究を進めていく必要がある。

(2) 学習指導要領における「聞くこと」について

【小学校外国語科の「聞くこと」の目標】

ア ゆっくりはっきりと話されれば，自分のことや身近で簡単な事柄について，簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。

イ ゆっくりはっきりと話されれば，日常生活に関する身近で簡単な事柄について，具体的な情報を聞き取ることができるようにする。

ウ ゆっくりはっきりと話されれば，日常生活に関する身近で簡単な事柄について，短い話の概要を捉えることができるようにする。

【中学校外国語科の「聞くこと」の目標】

ア はっきりと話されれば，日常的な話題について，必要な情報を聞き取ることができるようにする。

イ はっきりと話されれば，日常的な話題について，話の概要を捉えることができるようにする。

ウ はっきりと話されれば，社会的な話題について，短い説明の要点を捉えることができるようにする。

（下線は筆者による）

本提案では，「聞くこと」に関して，小学校のウの目標から中学校のイの目標へのつな

がりについて、児童・生徒が円滑に中学校での英語学習を行えるようになるために必要な教師の小中接続の橋渡しのための支援と指導を提案する。

「聞くこと」の指導内容について

- ①「表現」の接続 ②「話題」の接続 ③「技術」の接続
①「表現」の接続

小学校で聞き取る内容は、「簡単な語句や基本的な表現」、「具体的な情報」（誕生日や時刻、値段等）、「短い話の概要」である。中学校では、「必要な情報」（店や公共交通機関等で用いられる簡単なアナウンス等）、「話の概要」、「短い説明の要点」を聞き取ることになっている。聞く内容が、小学校から中学校へと高度化されている。

②「話題」の接続

小学校の目標は、「自分のこと」（好きな色、食べ物、着ている服等）、「身近で簡単な事柄」（よく知っている人や事柄等）、「日常生活に関する身近で簡単な事柄」（食えること、着ること、遊ぶこと等の出来事や習慣的なこと等）について聞くことができるようにするとされている。

中学校の目標は「日常的な話題」（生徒にとって身近な学校生活や家庭生活等）や「社会的な話題」（エネルギー問題や国際協力等）について聞くことができるようにするとされている。

このように、聞く話題が、小学校から中学校へと進むにつれて、自分自身のことから、身近な事柄、日常的な話題、そして、社会的な話題へと広がっている。

③「技術」の接続

小学校では「ゆっくりはっきりと話された」英語を聞くのに対して、中学校では「はっきりと話された」英語を聞くこととなる。つまり、ゆっくりと明瞭な音声で聞く小学校段階から、ある程度自然な速度に近い音声を聞き取る中学校段階への移行を示している。

2.1.2 実践事例

(1) 単元名 Striving for a Better World ～ The Peace Message ～ （第4学年）

(2) 単元について

本単元では、社会科と協働し、シュモアに学ぶ会編『ヒロシマの家－フロイド＝シュモアと仲間たち－』を教材化し、教科協働型単元として設定した。社会科単元は小学校4年の地域学習における歴史的学習「地域の発展に尽くした人々」である。この単元において、フロイド＝シュモアを取り上げると、戦後の復興におけるアメリカ人の貢献が理解できるとともに、平和への実践を進めたシュモアの平和の考えを学ぶことができる。そして、シュモアがアメリカ人であるとともに、平和＝peaceへの強い思いがあちこちに残されており、英語科による平和の学習と結びつけることで、相乗効果が期待できると考える。広島

の復興に大きく貢献しただけでなく、平和のために自ら実践したフロイド＝シュモーの精神に学ぶ価値は非常に大きいと判断し、社会科と英語科で同時期にフロイド＝シュモーを取り上げ、両教科で平和について学ぶ学習を実践し、その効果について検証することにした。

① 英語科における単元構成について

英語科における単元構成のねらいと実際の授業の流れについて説明する。前半では、地元広島の前原爆ドームや平和記念公園等、身近なテーマを例に出しながら、平和の概念を理解するための基礎・基本となる語彙について、導入を図り、定着を目指した。そしてフロイド＝シュモーがどのような人生を送ったのか、家族やボランティア達とどのような活動をしたのかということに焦点を当てて、人物理解を行った。英語科でも子どもたちが「平和とはなにか」をシュモーがどのように考えていたのかを考える契機になると考えたからである。

また、ドット・パール著（堀尾輝久訳）“The Peace Book”（童心社、2007年）という絵本を用いて、学習を進める上で土台となる語彙や英語表現を導入した。ここでのねらいは、英語で理解するための知識・技能を習得することである。小学校4年生段階はまだ英語学習初心者であり、十分な語彙が身に付いていない段階であり、文脈や場面から英語表現の意味を推測したり関連付けて考えたりすることが求められる。

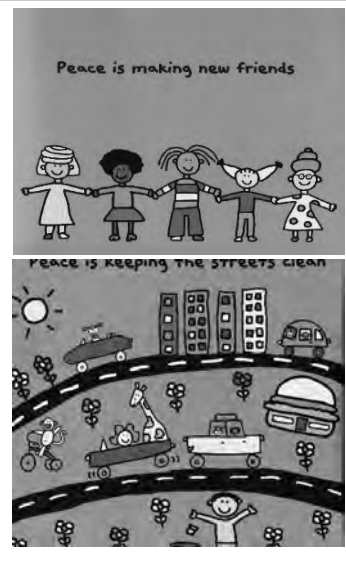
単元の中盤では、学校生活における平和について考えさせた。ここでは、実際に英語を使って教師や仲間とやりとりすることが目標である。平和を戦争の対比としてとらえるだけではなく、日常生活において、自分にはどのようなことができるか、また、シュモーの生き方から学べることは何かについて英語でやりとりさせた。社会科の学習で用いた年表と同じ内容の英語版年表を作成し、シュモーがどのような人生をたどったかについて、社会科の授業と同時進行で英語による理解を促した。また、シュモーが平和な社会・世界の実現のために、活動したことについて理解を図り、そこから自分達には何ができるか、また、将来どんなことができるようになりたいかについて、英語で考えさせ、意見交換させた。

単元の終末では、ALTや留学生とともに折り鶴作りを通して交流させる。単元終末に学習内容の総合的な活用を促す言語活動を設定することによって、子どもに明確な目的意識を持たせると同時に、学習項目（「フロイド＝シュモーについて」や「語彙・英語表現」）の積み上げだけではなく、学習項目の何を、どのように使用するかを自己決定させ、主体的言語使用者となることを目指した。そこに向かうことは1時間ごとの学習を自己管理していく力を身に付けさせることにもつながると思われる。英語を通して、フロイド＝シュモーの生き方に学び、教師や友だち同士、留学生と意見を交流することで、他者の生き方や気持ちを自分の中に取り込むという視点でまとめを行った。

このように、英語を学ぶとともに、シュモーがどんなことを考えて一生涯活動したのかや探究したのかなど、英語の表現に含まれている表現者の精神、発話者の気持ちをくみ取るようにし、社会科のねらいと同様、その人の変わらない精神を見つけるように構成することとした。

② 使用する教材「The Peace Book」について（一部抜粋）

Peace is making new friends.
Peace is keeping the water blue for all the fish.
Peace is listening to different kinds of music.
Peace is saying you're sorry when you hurt someone.
Peace is helping your neighbor.
Peace is reading all different kinds of books.
Peace is new babies being born.
Peace is being free.
Peace is traveling to different places.
Peace is being different, feeling good about yourself,
and helping others.
The world is a better place because of you.



(3) 単元目標（「聞くこと」について）

○シュモーさんが行った活動や絵本のメッセージを英語で理解し、自分にはどんなことができるかを考え、表現する。

○友達とピース・メッセージを聞き合い、感想を話し合う。

【小学校学習指導要領「聞くこと」】

ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。

【中学校学習指導要領「聞くこと」】

イ はっきりと話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができるようにする。

(4) 英語科と社会科の教科協働型単元計画

3つの資質・能力のうち特に重点を置く項目	ねらい	社会科	時間	英語科	ねらい	3つの資質・能力のうち特に重点を置く項目	
共生を創る態度	さん灯籠からシユモーさんに関心をもつ。	灯籠の写真を見て、疑問に思ったことを話し合う。	1	灯籠や折り鶴の写真を見て、どんなことが英語で記されているか話し合う。	絵本や実物に書かれている英語を読んで英語でどのよに言えばよいのかを知る。	知識や技能	
		灯籠を見学して疑問に思ったことを話し合う。	2	平和に関する絵や写真を見て、どんなメッセージが込められているか知り、英語で表現する。			
知識や技能、思考力・表現力	つシユモーさんの行動を理解するとともに、彼の思いに考えて思考する。	シユモーさんの年表から、詳しく調べたいことを話し合う。	3	Peace Bookの読み聞かせを聞き、どんなメッセージが込められているかを知る。		本シユモーさんが行った活動や絵のメッセージを英語で理解し、表現する。	思考力・表現力
		家を建てるまでのシユモーさんの活動について調べ、分かったことや考えたことを話し合う。	4	シユモーさんの生い立ちや行った活動について、英語で聞き、理解する。また、人物紹介の仕方を知る。			
		家を建設するときの苦労について調べ、考えたことを話し合う。	5	シユモーさんの生い立ちや行った活動について、英語年表から情報を読み取る。			
		平和住宅という名前にし、灯籠を置いた時のシユモーさんの思いを考える。	6	今の自分にできることや将来できるようにしたいことを考え、ピース・メッセージを書く。			
		家を建てた後のシユモーさんの活動を調べ、分かったことや考えたことを話し合う。	7	友達のピース・メッセージを聞き、感想を話し合う。			
共生を創る態度	シユモーさんへの思いを伝える。自分たちができることから、	8 「シユモーに学ぶ会」の方に話を聴く。		折り鶴と一緒に作ることを通して、留学生と交流する。	留学生と折り鶴作りを通して交流を行うことよって、これまでに知り得た情報や平和への自分の思いを工夫して伝えるとする。	共生を創る態度	
		折り鶴モニュメントを見学して考えたことを話し合う。	9				
		広島復興とこれからの発展について考えたことを話し合う。折り鶴をどうするか考える。	10				これからの学校・家庭生活の中で、自分が頑張ることをメッセージ・カードに書く。

■はそれぞれの教科でシユモーさんについて学習する時間

※筆者が勤務する広島大学附属小学校では、本実践当時、子どもが身に付けるべき資質・能力の3つの柱を「生きるために必要となる知識及び技能」「文脈に応じて全体を向上させる思考力・判断力・表現力等」「アイデンティティをもち、異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度（共生を創る態度）」と設定している。

(5) 英語科単元計画 (全10時間)

	主な学習のねらいと学習活動	「聞くこと」に関する教科スケルトン
1	○絵本や実物に書かれている英語を読んで英語でどのように言えばよいかを知る。 ・灯籠や折り鶴の写真を見て、どんなことが英語で記されているか話し合う。	・単元全体の導入を図る。
2	○絵本や実物に書かれている英語を読んで英語でどのように言えばよいかを知る。 ・平和に関する絵や写真を見て、 <u>どんなメッセージが込められているか知り、英語で表現する。</u> ※指導例①	・ティーチャートークを聞いて単元全体の内容を予測する。
3	○絵本や実物に書かれている英語を読んで英語でどのように言えばよいかを知る。 ・Peace Bookの読み聞かせを聞き、 <u>どんなメッセージが込められているかを知る。</u> ※指導例②	・絵本の読み聞かせを聞き、ストーリーの概要を知る。
4	○シュモーさんが行った活動や絵本のメッセージを英語で理解し、自分にはどんなことができるかを考え、表現する。 ・ <u>シュモーさんの生い立ちや行った活動について、英語で聞き、理解する。</u> ・人物紹介の仕方を知る。 ※指導例③	・オーラル・イントロダクションを聞く。
5	○シュモーさんが行った活動や絵本のメッセージを英語で理解し、自分にはどんなことができるかを考え、表現する。 ・ <u>シュモーさんの生い立ちや行った活動について、英語年表から情報を読み取る。</u>	
6	○シュモーさんが行った活動や絵本のメッセージを英語で理解し、自分にはどんなことができるかを考え、表現する。 ・ <u>今の自分にできることや将来できるようにしたいことを考え、ピース・メッセージを書く。</u>	
7	○シュモーさんが行った活動や絵本のメッセージを英語で理解し、自分にはどんなことができるかを考え、表現する。 ・ <u>友達とピース・メッセージを聞き合い、感想を話し合う。</u> ※指導例④	・友達とピース・メッセージを聞き合う。

8	○留学生と折り鶴作りを通じた交流を行うことによって、 これまでに知りえた情報や平和への自分の思いを工夫 して伝えようとする。 ・「シュモーに学ぶ会」の方にお話を聞く。	
9	○留学生と折り鶴作りを通じた交流を行うことによって、 これまでに知りえた情報や平和への自分の思いを工夫 して伝えようとする。 ・折り鶴を一緒に作ることを通して、留学生の方々と交 流をする。	・学習してきた内容を 生かして留学生や ALTと伝え合う
10	○留学生と折り鶴作りを通じた交流を行うことによって、 これまでに知りえた情報や平和への自分の思いを工夫 して伝えようとする。 これからの学校・家庭生活の中で、自分が頑張ることを メッセージカードに書き、読み合う。	

2.1.3 本單元における中学校への接続を踏まえた「聞くこと」の指導実践の詳細について

(1) 指導例① (第2時) : ティーチャートーク

教師が子どもに向かって話す目標言語はティーチャートークと呼ばれ、大切な点は本物の言語使用 (authentic language use) であるということである。教室で目標言語を使って指示や説明をすることによって子どもはその内容を理解したり推測したりして行動することが求められており、現実の意思伝達活動と言える。教師が話すことの意味や目的が学習者に伝わりやすい状況の中で話されることが多いので、目標言語で話された意味や機能が明示的な説明をはさまずに子どもにも理解される。

教師がどのように自分の発話を学習者にとって理解可能なものになっているかが明らかにされている。話すスピードを調節したり単純な表現 (語彙・文法) を多用したり、繰り返しや言い換えを多く行ったりと様々な言語的修正を行っている。言語習得を促進するティーチャートークはこのような修正が適切に行われて子どもに理解されるものである。さらに、単に理解されるだけでなく、子どもにとって少し上のレベルではあるが状況や前後の文脈によって理解されうるインプットを与えることが鍵となる。

(シュモーさんの写真を見せながら)

T: Do you know this man?

Ss: Yes! シュモーさん!

T: Yes, you're right. He is Floyd Schmoie. Where is he from?

Canada? Australia? America?

Sl: シュモーさん is from America.

T: Right. How old is he?

Ss: I don't know. (口々に)

T: He is 53 years old. Fifty three.

S2: Fifty three? I see.

T: He came to Japan after the war.

S3: ウォー？

T: Yes, the war. Atomic bomb fell down at the war. (写真を見せる)

The war.

Ss: ああ戦争ってことか。

...

(2) 指導例② (第3時) : 絵本の読み聞かせ

絵本を用いて最終的にPeace Messageを作成するために必要な語彙の導入を図る。語彙単独で導入するのではなく、意味のある文脈の中で語彙や英語表現を用い、導入することによって、どんな場面や目的で使用される表現なのか概要を掴ませる。

手順として最初に教師の英語を聞く前に、子どもと一緒に誌面にある絵本の表紙を見ながら質問することから始める。これは音声を聞かせる前段階として行う指導 (Pre-Listening) の基本であり、これから聞く内容について児童の興味・関心を高めたり、スキーマを活性化したりする目的で行う。

次に、教師の読み聞かせから聞き取れたことや繰り返し出てきた表現などについて、児童に質問して確認する指導を展開する。これは内容確認 (While-Listening) の段階であり、ここでは複数回音声を聞かせることを原則とし、1回目 (1st-Listening) は話題や聞き取れたキーワードなど、大まかな内容をつかむ発問を子どもに投げかけ、2回目 (2nd-Listening) は詳細な内容を聞き取ることができるよう、より絞り込んだ発問を工夫する。もちろん実際の指導場面においては、子どもの理解度に応じて、聞かせる回数や発問の種類を適宜調整する柔軟性が必要である。

これに続き、既習のpeaceに加えて、何度も○○ingという言葉が出てくることに気付かせ、学級の児童の例などを挙げながらそれが『○○であること』という意味であることを捉えさせるようにする指導に進む。当単元の新出表現である語彙や動名詞の文の導入部分に当たる。この段階では、新出表現を含んだまとまりのある内容を聞かせる中で、その表現の意味 (や機能) を類推させ、徐々にその形式に児童の意識が向くように帰納的指導が展開される。

その後、子どもが聞き取った言葉をなるべく文レベルで確認する段階となる。単に機械的に繰り返して聞かせるのではなく、子どもとのやり取りの中で、何度も聞かせる状況を作る。

指導が続く (Post-Listening) が、この段階では比重がインプットからアウトプットに移っている。ここに「聞くこと」から始めて徐々に「話すこと」に移行する、このように、同じ教材の読み聞かせの場面を取り出しても、その背景には「聞くこと」の基本的な指導手順、音声インプットを中心とした新出表現の導入、子どもとのやり取りを通じた発話の引き出し方、段階を踏んで無理なく発話につなげる指導など、さまざまな指導技術に関連した要素が含まれている。ここに示された指導例に沿って実際に指導してみることで、求められている指導の在り方を体現できるだろう。実際の指導場面においては子どもの実態に応じて適宜調整していく必要もあり、また、理想的には映像等の視聴覚教材等も活用し

つつ、子どもにとっては誌面の登場人物よりも身近な指導者自身の話を多めに加えて、新出表現の導入場面をさらに充実させる創意工夫も求められる。あくまでも、基礎基本とされる指導の在り方を、実際の指導を通して体感または体得するための視聴覚教材であることを、参照にする際には留意する必要もあるだろう。

子どもの年齢・興味・英語習得度にあわせて昔話、または文学作品を選択する。子どもが英語で話を聞いても不安にならないように、彼らが既に知っている話やイラスト等を理解のヒントにしやすい視覚教材を用意する。この活動の第一目的は、子どもが豊かな英語に接し、大量の英語を聞くことに慣れていくことであり、1つ1つの単語や文法を理解することではない。子どもが全体的に話の内容を理解できたと思えば成功である。

実際に、第1時で導入して、単元の進行とともに毎時間「Story Time」としての読み聞かせを行った。留意点としては、以下の3点が考えられる。

(ア) 絵本に載っている文言をそのまま読むのではなく、絵本の英語を子どもに分かりやすく別の言葉で言い換えたりして、子どもの理解を助ける。

(イ) 一方的に聞かせるのではなく、子どもに絵本の絵やあらすじについて時折質問したり、「子どもとのやり取り（インタラクション）」「間を取る」などしながら、子どものつぶやきや繰り返しを引き出したりして、子どもを絵本の世界に引き込むようにする。

(ウ) 一通り読み聞かせた後、注目させたい点を示し、もう一度読み聞かせをする。

これらのことに留意しながら、ストーリーテリングを行った。読み進めていくうち、子どもは指導者とともに、絵本の内容を発話し始める。それをうまくキャッチし、アウトプットに移行していく。

(絵本の表紙（地球の周りを多くの人々が手を繋いでいる挿絵）を見せながら

T: Everyone, look at this, please.

S1: New book?

T: Yes, that's right. Let's start new story today!

S2: Yeah! What's that?

T: You can see many colorful clothes.

What color can you see?

(おそらくclothesが理解できていないと思われたため、一人一人の洋服を指しながら)

These are clothes. What color are they?

...

(3) 指導例③（第4時）：オーラル・イントロダクション

子どもは具体物を表す語彙や表現の意味の理解は早いですが、概念や抽象的なものを表す語彙や表現の意味の理解には時間を要する。ここでは焦らず、子どもの反応や理解度をよく観察し、把握しながら授業を進めていく。

絵本の本文等の内容を教師が目標言語を使って母語を介さずに説明していくものであり、写真・絵や図等の視覚補助等を活用してそのままであれば理解しにくい本文を理解可能なインプットにして学習者に与える指導技術である。効果的な点は、

(ア) 学習者の背景知識を活性化させる

本文に関連する写真、映像、音楽等を用いたり日常の出来事を本文内容に結びつける内容を教師が話したりすることによって、題材内容に関する学習者の背景知識を活性化することができる

(イ) 理解可能なインプットを学習者に与えることができる

絵や図等の視覚補助を用いることによって学習者が既に知っていることを土台にして新しい言語項目を理解することが可能となる

(ウ) 新出言語項目の形式・意味・機能のつながりを子どもに文脈の中で提示することができる

全体の話の中に埋め込まれる形で新出言語項目が提示されるので、新しい言語項目の音や形とその意味が1つのものとして学習者に取り込まれる。

(4) 指導例④ (第7時) : 友達と考えを聞き合う

絵本のメッセージを参考に、現在の自分にできることを発表し、お互いに聞き合う活動を行う。ここでは聞き手の育成が非常に重要であると考え。話者が不安にならないように、受容的な雰囲気をつくること、聞き手が理解できないときには、それを伝えることも重要である。まずは、ペア・グループ等の小集団で友達の英語が聞き取れた、内容がわかったという体験が聞き手にとっても話し手にとっても自信となり、全体で聞き合う活動が可能となると考える。また、聞く力を高めるためのインプットは音声と文字だけでなく、できるだけ多感覚に訴える方法を取り入れることが大切であると考えている。音声インプットとどうしても既習表現で言い換えられない概念の視覚情報・文字インプットをバランスよく十分に取り入れる必要がある。

2.1.4 本單元における「聞くこと」の指導実践についての考察

日本における子ども達の英語の音声言語発達を考えると、英語の母語話者やESL学習者に見られるように自然発生的なものではなく、学習した言語項目を発話しているのがほとんどである。現実として、使用しているテキストや教材に出てきた単語や表現などを覚えて言っているだけの活動が多い。しかし、どのようなテキストや教材を使おうとも、最も大切なことは、子ども達が「意味のある文脈の中で言葉に接する」ことができているかどうかである。意味のない、文脈のないやり取りの中でいくら聞いたところで言語は発達しないであろう。コミュニケーションを図る相手が伝えたいメッセージがあり、聞きたいメッセージがあるところで言葉は育っていく。母語である日本語では十分な文脈の中で子どもに言葉を提供することができるが、外国語となると、文脈から切り離された形で言葉だけが教えられる場合が多くなる。ややもすると、母語で得られた知識を転用し、訳を教えるだけに終わる授業がこれまでの中学・高等学校での伝統的な授業スタイルではあったように思う。学習活動が子ども達にとって「意味のある文脈」を作るものでなければならない。「内容を大切にした授業」「言語活動中心の授業」「タスク重視の授業」これらに共通するのはことばが「生きた文脈」の中で提供されるということであり、「聞く」技能を高める外国語教育に最も必要な条件は「文脈」を整備することであると考え。言い換えれば、「どのように聞くか」の指導だけではなく、「何を聞かせるか」ということが

重要であると考えられる。

なお、「小学校学習指導要領 3（1）オ」でも以下の記述がある。

言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心にあったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他の教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりする等の工夫をすること。

つまり、英語による言語活動を児童が主体的に行うためには、扱う題材やトピックにいかに関わりがもてるかが非常に大きな鍵となる。そこで、英語科で扱う題材やトピックを児童の認知発達段階と一致させることで、英語力とその内容に関する知識・技能や、それを活用する思考力・判断力・表現力を一体的に伸ばすことができると考える。つまり、カリキュラム・マネジメントの視点から、教科等間での学びのつながりや広がり、深まりがあるものとなるようにすることが重要である。

実際の「聞くこと」の指導では、いきなり活動を始めるのではなく、活動の前・中・後に分けて、丁寧に行う。活動前には音声を聞かせる前に、場面設定や語句や表現の確認をする。活動中は聞かせる音声を分割して何度か聞かせ、情報を推測させたり、友達と相談させたりしながら、少しずつ内容を理解する経験を持たせる。活動後は答え合わせをしたり聞き取れなかった箇所を確認したりする。資料や映像を用いながら、複数の会話を聞き、自然な場面の中での基本的な語句や表現に触れられるような工夫が必要である。はじめは、教師も子どもも情報の多さに戸惑うかもしれないが、徐々に子どもも慣れてくる。

答えがすぐにでない場合は、隣の子どもと答えを確認させてから答えてもよいと考えている。「聞くこと」の指導において大切なことは、教師が安易に日本語で訳したり説明したりせず、聞き取れた部分をもとに内容を推測させ、他の子どもと一緒に理解を作り上げながら活動を進めていくことであると考えられる。

技能面だけではなく、「何を聞かせるか」といった内容や質も重要な意味をもつと考える。例えば、平和学習は子どもにとっては大きな意味をもつ。英語をツールとして、世界の人々とやりとりし、つながる楽しさを伝えることだと考えている。体験的に理解させることで、対話は表面的なものではなく、内容の豊かさによってより豊かになるものであることを実感できる機会となりうるし、知りたい内容を英語で聞き、伝えたい内容を表現するためには、授業で予定されている目標語彙や文法を超えるものであると考えている。

聞いている時に、未習の表現が含まれていても前後の関係からわかってしまうようなインプットが理想であると考え、インプットの量だけではなく質に留意し、取り入れるインプットの条件として以下の3つの条件を意識している。

(1) 生きた文脈の中で理解可能なインプットを与えること（理解可能性）

Krashenが「i+1」と呼ぶ児童が理解できる英語より「少しだけ上のレベル」の理解可能なインプットのことである（Krashen, 1985）。わからない言語項目が含まれてはいるが、文脈の助けによってそれらの意味も全体の意味もだいたいわかるようなインプットを大量にかつ毎授業時間継続的に取り入れることが不可欠である。

(2) 児童の経験や生活と関連させること（関連性）

インプットの内容が自分の生活・体験・将来・興味・関心に関連があるかという点である。背景知識によって言語処理が助けられるためであり、語彙や文法の知識が弱くても学

習者が既にもっている関連知識によって意味理解が可能になるケースである。

(3) 本当のことであること（真実性）

インプットが現実の言語使用を目的として書かれたり、話されたりしたものかどうかということである。教材英語と現実のコミュニケーションで使用される言語に違いがあり、できるだけ本物のコミュニケーションのために発せられた英語をインプットすることが重要となる。

今回は、「平和」についてのストーリーを読み聞かせることで、本単元の導入を図った。

「平和」というテーマは、子ども達にとって、コミュニケーションを図りたくなる、また図る必要性のある話題であり、また、主体的で対話的な深い学びをもたらすに十分な他教科にも関連する内容をもたらしてくれる。異文化間能力を育むことが外国語教育の重要な目的の1つであることを考えても、それぞれの平和に対する思いの醸成とそれを表現したり発信したりすることのできる言語能力の育成とは切っても切れない関係にある。また、「平和の大切さ」という世界共通の、そして喫緊の課題をトピックとして取り上げることで、日本と外国の子ども達がともに協力して持続可能な社会、世界を創っていくのであろう。地球市民としての連帯感を共有することができ、英語を学ぶ意義も感じられると思う。今回協働的な学習をした後、単元末のリフレクションでは、「平和について他の国の子ども達とも話してみたい」と書いている子どもが多かった。すべての命は環境や平和な生活なしにはあり得ず、その奇跡的な恵みに支えられているからこそ、私たちは多様で文化的な生活が営めるのと思う。そういった意味でも、欠かすことのできない内容・テーマであると考えている。

2.1.5 さいごに

小学校での英語教育ではまずは子ども同士が楽しみながら自己を開示し、思いを自由に表現し合うことができるかという点に着目する必要がある。スタートは、やはり自ら人と関わっていきける温かい人間作りを目指したコミュニケーション教育である。さらに、中学校英語に繋がる英語教育の一環として捉えた時に、スキルの面から「聞く力の育成」がこれからのコミュニケーション能力を支える根幹となることが見えてきた。聞く力の伸びは一朝一夕に見られるものではない。インプットの量とともに、その質に着目して、継続的に自薦していく必要がある。また、指導者自身のスキルをさらに向上させ、「ティーチャートーク」の充実と改善が求められる。デジタル教材の音源をフル活用したり、読み聞かせの紙芝居を効果的に提示したりする等、指導者自身のティーチング・スキルアップとともに、指導法の工夫・改善が求められる。

さらに、本実践だけに限らず言えることであるが、教室の英語使用量を増やすことである。こう書くと、英語や発音に苦手意識をもつ先生方は不安になったり「難しいな」と感じたりしてしまうかもしれないが、子ども達に適切なインプットを与えるには、指導者による子ども理解や見取りが欠かせない。そこで、インプット量を増やそうとニュースのようなものを見ても、それは難しすぎて雑音のようなものになってしまう。

そこで、「聞くこと」の指導の大前提として、改めてClassroom English（教室英語）をしっかりと用いて授業進行することを再確認したい。小学校の先生方がネイティブスピーカーと同じように英語を話す必要は全くなく、英語学習の先輩として、楽しみながら子

ども達と一緒に英語を使うことが大切である。間違いながらも指導者が英語を使う姿を見せることが何より重要である。子ども達が英語のノンネイティブスピーカーとして成長するためにも、指導者自身がまずは英語使用のモデルを示し、子どもに多くのインプットを与えるように心がけていくことは小中接続において非常に肝となると考える。

最後に、小学校における授業実践で大事だと考えているのは「良い聞き手を育てる」ことである。Reaction, Echoing, Questionの3つのストラテジーを活用することによって聞く力を高め、育てると同時に、聞いていることを相手に知らせ、お互いに心地よい安心感の中でコミュニケーションを図ることを大事にしている。日ごろの学級指導でも、「1回で聞き取る」「指導者や友達の言葉を聞き逃さない・聞き漏らさない・聞き飛ばさない」ためにどのような聞き方が良いのかを学級経営・学級指導として意識し、全体で実践するようにしている。それが英語授業でも生きてくる。

今後も意味のあるコミュニケーション活動を設定し、聞きたい、伝えたい、わかり合いたいという願いをもって活動する中で「聞く力」を育て、子どもが自信をもっていきいきと話す姿が見られる授業を追い求めていきたい。

2.2 「読むこと」における小中の接続を目指した指導

広島県呉市立昭和北小学校教諭 細川 裕香

2.2.1 小学校学習指導要領と中学校学習指導要領との関連

学習指導要領（平成29年度告示）の改訂により、これまでの小学校高学年の外国語活動は教科となり、新たに「読むこと」「書くこと」の領域が加わった。そこで、系統的・総合的な教科学習を行うとともに、小学校から中学校への円滑な接続を図ることが求められている。本事例では、「読むこと」に焦点をあて、学習指導要領の目標の関連を基に、小中の滑らかな連携を目指した学習指導について提案する。

学習指導要領における小学校、中学校の「読むこと」の目標は次の通りである。

【小学校学習指導要領 目標「読むこと」】

- ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができる。
- イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。

【中学校指導要領 目標「読むこと」】

- ア 日常的な話題に関して、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。
- イ 日常的な話題に関して、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。

小学校では、活字体の読み方や文字の音などを頼りに、書かれている語句や表現を音声化し、その意味が分かるようにすることが目標とされている。それに対し中学校では、まとまりのある文の全体を読み通し、その中から目的に応じて「自分が必要とする情報」を読み取ったり、「概要」や「要点」を捉えたりすることができるようにすることが目標とされている。小学校と中学校の目標の関連については、中学校学習指導要領解説に、中学校の目標アについて、小学校の目標イを受け設定された目標であることが明記されているが、高学年から始まる「読むこと」の学習においては、まず慣れ親しませる必要があることから考えると、中学校との段差はかなり大きいと思われる。さらに、中学校の目標イ及びウは、読み取った内容を目的に応じて総合的に判断し、生徒同士が考えを伝え合うといった領域間の統合的な言語活動を工夫することも必要となり、より高度化した目標となっていることが分かる。

そこでまず、小学校と中学校の目標を比較し、①表現、②話題、③技能の3つの視点から小学校から中学校へのつながりを整理する。

①表現

小学校で読むのは、「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現」であるが、中学校では、「簡単な語句や文で書かれたもの」や「簡単な語句や文で書かれた短い文章」を読むことになる。小学校では、語句や表現を音声化すれば、意味が分かるものに限られていると言える。一方、中学校学習指導要領解説には、小学校での学習やこれまでの経験の中で触れてきた語彙や表現を含め、中学校で扱う語句や文を用いて書かれているものとあり、初出の語句や表現等も含んだ、まとまりのある文を読むことになる。

音声で慣れ親しんだ限られた語句や表現から、ある程度の分量で書かれたまとまりのある文章へ表現の幅が広がっていく。

②話題

小学校では、身近で簡単な事柄（自分のこと、友達や家族、日常生活）を話題として取り上げるが、中学校では広く日常的な話題（生徒にとって身近な学校生活や家庭生活など）や社会的な話題（自然環境問題、平和問題）までを扱う。

自分自身や身近なことに関する話題から、日常的、社会的なことへ話題が広がっていく。

③技能

小学校では、音声で慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を言語外情報と結び付けたり、文字の音を頼りに音と文字を結び付けたりしながら意味や読み方を推測して読むことが求められている。一方中学校では、特定の部分にとらわれず、文章全体を読み通し、目的に応じて必要な情報を取り出したり、文章の構成や論理の展開を理解したうえで、書き手が述べている大まかな内容を捉えたり、最も重要な情報はどれか判断したりすることが求められている。また、領域間を統合した言語活動を工夫することで、取り出した情報について総合的に判断し、自分の考えを伝え合うことができるようになることも求められる。

音と文字を一致させながら一語一語、一文一文を読む段階から、逐語読みから脱却し、目的に応じた読み取り方をする段階へと高まっていく。

次に、小中連携の視点から、小学校の目標イから、中学校の目標アへ円滑に接続するために、小学校における指導の方向性を整理する。

①表現

音声で十分に慣れ親しんだ既習表現を基本とするが、それだけに限らず、外来語等で馴染んでいる語も含め、読ませたい内容に合わせた不自然でない表現や、必要な情報を取り出すために適した情報量とする。

②話題

中学校の日常的な話題（学校生活や家庭生活に関すること）につながるよう、身近に迫っている中学校生活に関する話題を取り上げる。この時期の児童にとって身近な事柄であるからこそ、自分の考えや思いがもちやすく、主体的に読む活動に取り組むことができる。できるだけ児童にとって現実的な場面を設定し、児童が得たいと思う、意味のある情報であることを留意する。

③技能

読む目的や自分が置かれた状況に応じて「必要な情報」を読み取ることができるように、

「目的・場面・状況」を明確にした活動を設定する。そして、既習表現を別の場面設定でも読むことができるように単元計画を工夫し、内容に注目させながら、同じ文を繰り返し読ませることで読むこと慣れさせていく。さらに、読み取った情報について、自分の考えや思いを伝え合う活動を設定し、領域間を統合した活動を意識した学習となるようにする。

2.2.2 実践事例

(1) 単元名 My Future, My Dream ～将来の夢を伝え合おう～

(NEW HORIZON Elementary6 東京書籍 Unit8)

本単元は、第6学年の最後の単元である。そこで、単元の終末に、中学校生活への期待や将来の夢について発表する活動を設定する。また、I want to join ～. I want to enjoy ～. I want to be a ～. I am good at～. といった表現を使って中学校生活への期待や将来の夢について原稿を書き、応援メッセージをそえて卒業文集にする。卒業を間近に控えた第6学年の児童にとって、身近に迫ってきた中学校生活や、自分の将来について考える活動は発達段階に沿っており、自分の考えや思いを表現するために適している。中学校生活への期待や将来の夢を伝えるために、中学校のリーフレットから、自分が入りたい部活動や楽しみたい学校行事に関する情報を読み取ったり、友達に応援メッセージを伝えるために、友達が書いた原稿を読んで考えや思いを捉えたりすることで、自分に必要な情報を読み取る力を育てる。

(2) 単元の目標

中学校生活への期待や将来の夢について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができる。

【言語材料】

I want to join (the volleyball team).

I want to enjoy (sports day).

I'm good at (running).

I want to be (a volleyball player).

部活動, 学校行事, 動作, 教科, 職業など

(3) 単元計画 (全9時間)

	目標 (○) 及び主な学習活動 (・)
1	<p>○部活動についての表現を知り、聞いたり言ったりすることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生の中学校生活や将来の夢に関する話を聞く。 ・入りたい部活動を尋ねたり答えたりする語句や表現に慣れる。 ・モデル文を聞いて、文を見ながら声に出して読む。 ※指導例① ・入りたい部活動について、例を参考に書き写す。

2	<p>○学校行事についての表現を聞いたり言ったりすることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生の中学校生活や将来の夢に関する話を聞く。 ・楽しみたい学校行事を尋ねたり答えたりする語句や表現に慣れる。 ・モデル文を聞いて、文を見ながら声に出して読む。 ・楽しみたい学校行事について、例を参考に書き写す。 <p style="text-align: right;">※指導例①</p>
3	<p>○将来の夢に関する話の大体の内容を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生の中学校生活や将来の夢に関する話を聞く。 ・将来就きたい職業を尋ねたり答えたりする語句や表現に慣れる。 ・モデル文を聞いて、文を見ながら声に出して読む。 ・将来就きたい職業について、例を参考に書き写す。 <p style="text-align: right;">※指導例①</p>
4	<p>○中学校の学校行事に関して必要な情報を読み取り、楽しみたい行事やその理由を伝えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校の学校行事について書かれた文を読み、楽しみたい学校行事を見付ける。 ・中学校で楽しみたい学校行事についてペアで尋ね合う。 ・得意なことについて、例を参考に書き写す。 <p style="text-align: right;">※指導例②</p>
5	<p>○中学校の部活動に関して必要な情報を読み取り、入りたい部活動やその理由を伝えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校で入りたい部活動について書かれた文を読み、入りたい部活動を見付ける。 ・中学校で入りたい部活動についてペアで尋ね合う。 ・したいことについて例を参考に書き写す。 <p style="text-align: right;">※指導例②</p>
6	<p>○将来の夢について書かれた文を読み、自分の将来の夢について考えや思いを伝えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な人や有名人の夢について書かれた文を推測しながら読み、内容を捉える。 <p style="text-align: right;">※指導例③</p>
7	<p>○例文をもとに中学校生活への期待や将来の夢について原稿を書くことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書きためた文を使って、将来の夢について伝えたいことを整理して書く。 ・書いた文章を音読し、推敲する。 ・スピーチの練習をする。
8	<p>○中学校生活への期待や将来の夢について書かれた原稿を推測しながら読むことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級の友達と原稿を読み合い、応援メッセージを書く。 <p style="text-align: right;">※指導例④</p>
9	<p>○他者に配慮しながら、中学校生活への期待や将来の夢について伝えようとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校生活への期待や将来の夢について、スピーチをする。

(4) 「読むこと」に関する指導の具体

指導例① モデル文を読む活動について

中学校生活への期待や将来の夢を発表するために、第1, 2, 3時では、I want to

join ~. I want to enjoy ~. I want to be ~. といった基本的な表現について音声で十分に慣れ親しませるようにする。それらの表現を十分に聞いたり言ったりした後、モデル文を読む活動を行う。このような活動を通して、一文ずつ音声と文字を一致させていく。

【活動の流れ】

- 1 モデル文を指でなぞりながら音声を聞く。
- 2 モデル文を指でなぞりながら音読する。





指導例② 中学校の部活動や学校行事の紹介文を読む活動について

第4, 5時では、児童にとって身近に迫っている中学校生活に関する話題を取り上げる。単元の終末で、中学校生活への期待や将来の夢を発表するために、必要な情報を得るという目的で読む活動に取り組みせ、伝える内容を考えさせるようにする。

これまでの指導は、部活動や学校行事の英語表現を知り、自分の好みや特技から入りたい部活動や楽しみたい学校行事を判断し、伝え合う活動を行っていた。しかし、現実的には好みや特技だけに限らず、複数の情報の中から、自分の条件に合ったものを選ぶことが多い。したがって、本事例では、部活動や学校行事の紹介文は、実際に児童が入学する中学校の内容にし、活動する曜日や、人数、できることといった複数の情報の中から、入りたい部活動や楽しみたい学校行事を判断することができるようにした。

また、ここで使用する表現は、これまでの学習で、繰り返し音声で慣れ親しんできた We have ~. You can ~. といった既習表現とし、別の場面設定で繰り返し読ませることで、内容に着目させながら定着を図るようにした。

【中学校のリーフレット】

<p style="text-align: center;">Welcome to Showakita junior high school.</p>  <p style="text-align: center;">We are waiting for you!!</p> 	<p style="text-align: center;">Sports Clubs</p> <p>Baseball Team We have 39 players. You can play baseball every day from Monday to Sunday.</p> <p>Soccer Team We like soccer very much. You can play soccer every morning and after school.</p> <p>Volleyball Team We have 12 girls players. We are good friends. You can play volleyball every day.</p> <p>Table tennis Team We have 12 players. We enjoy table tennis. We have our rackets. It's nice.</p>	<p>Track and field Team We like running. We can run fast and long. You can join national championships.</p> <p>Soft tennis Team We have 30 girls and 15 boys. You can play tennis every day. It's fun.</p> <p>Basketball Team We have 13 players. We play basketball everyday. We have nice basketball shoes.</p>  <p>Handball Team We have 7 players. We have boys team and girls team. You can join Chugoku Championships.</p> 
--	--	---

【部活動紹介文】

Baseball team

We have 39 players.

We like playing baseball.

You can play baseball every day.



Handball team

We have 7 players.

We have boys team and girls team.

You can join Chugoku Championships.



【活動の流れ】

- 1 複数の部活動の中から、興味のある部活動について書かれた紹介文を1人で黙読させる。
- 2 ペアになって音読を聞き合わせる。読みにくい語はペアで補い合うようにする。
- 3 全体で、音声化できない表現や意味が分からない表現を共有し、その部分を音読したり、指導者が簡単な英語や児童がよく知っている表現に言い換えたりして、意味を捉えさせるようにする。
- 4 自分が入りたい部活動について、魅力的だと思った部分や一文に線を引かせる。
- 5 指導者が代表児童に質問をしながら入りたい部活動に関するやり取りを行い、やり取りのモデルを示す。
- 6 読み取った情報をもとに、児童同士で入りたい部活動に関するやり取りを行う。

【情報を読み取った後のやり取りの例】

S1 : What club do you want to join?

S2 : I want to join the baseball team.

S1 : You want to join the baseball team.

Why?

S2 : Because I can play baseball every day.

I like playing baseball.

S1 : That's nice.

※下線部は読み取った内容を生かした表現

指導例③ 身近な人や有名人の将来の夢について書かれた文を読む活動について

第6時では、身近な人や有名人の将来の夢について書かれた文を読む活動を行う。

これまでの指導では、中学校への期待や将来の夢を伝える表現を1時間ずつ増やしながら書きためていき、最後に書きためた文を並べ替えて発表原稿を作成するといった指導が一般的であった。しかしそれでは、一定の表現に限られてしまい、伝えたいことが伝えられなかったり、どのように文を並べ替えたらいかが明確な意図がないまま、まとまりのない文章を作成したりすることがよくある。

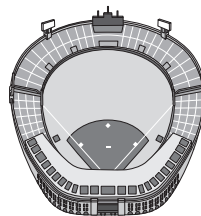
そこで、本事例では、単元の終末に行う発表のモデルとなる文を読み、内容だけでなく、表現の仕方や文の構成の仕方に気付かせて、発表に生かすことができるようにしたいと考えた。そこで、身近な中学生やALT、児童が他教科等で学習した人物等の将来の夢につ

いて書かれた原稿を用いて誰の夢かを当てるといった目的をもたせ、主体的に読ませるようにした。また、自分の生き方について深く考え始めるこの時期の児童にとって、身近な人物や有名人の考え方をすることで、自分の生き方に取り入れたり、自分の将来を考える契機にしたりすることもできると考える。

ここで使用する表現は、基本的には本単元で学習する表現を使って書かれた文だが、児童は初めて読む内容である。そのため、児童は内容に着目しながら、繰り返し読む活動に取り組むことができる。このように、定着を図るためには内容を替えて同じ表現を繰り返し読ませることが大切だと考える。

【将来の夢原稿例（イチロー選手）】

I want to be a baseball player.
I want to join the baseball team.
I want to play baseball in Koshien stadium.
I practice 360 days a year.
I don't want good records.
I want to join all games.
Do my best!



【将来の夢原稿例（身近な中学生）】

I want to be a nurse.
I want to help many people in need.
I will study very hard.
I want to be a good nurse.



【活動の流れ】

- 1 誰の原稿か当てるといった目的をもたせて原稿を配る。
- 2 1人で黙読させる。
- 3 全体で、音声化できない表現や意味が分からない表現を共有し、その部分を音読したり、指導者が簡単な英語や児童がよく知っている表現に言い換えたりして、意味を捉えさせるようにする。
- 4 大体の内容が捉えられた時点で、「Who is he / she?」と問いかけ、児童に誰の夢か答えさせる。
- 5 その人物の考え方や表現について「すばらしいと思うところ」「自分に取り入れたいと思うところ」に線を引かせ、自分の発表原稿の参考にさせる。

指導例④ 学級の友達と中学校生活への期待や将来の夢について書かれた原稿を読み合う活動について

第8時では、友達が書いた原稿を読む活動を行う。これまでに同じ表現を使って書かれた文を繰り返し読ませてきている。そこで、音と文字を一致させたり、友達同士のやり取

りで得た情報と文字を結び付けたりしながら読ませるようにする。原稿を読んで書き手が分かったら、書き手に応援メッセージを書いて送るようにする。

このように、読んで得た内容について、返事を書いたり、返事を読んだりすることで、友達の考えや思いを知ることができる喜びや、読んだり書いたりすることのよさを味わわせるようにしたい。

【将来の夢について書いた原稿例】

My Dream My Future	(挿絵)
I want to join the volleyball team. I want to enjoy sports day. I am good at running. I want to be a volleyball player.	
(友達からのメッセージ) You can run fast. Good luck.	

【児童に提示する応援メッセージの例】

Good luck. Nice dream. You can do it. Do your best. You can ~ well. You are good at ~.

【活動の流れ】

- 1 将来の夢について書いた原稿を読み、書き手に応援メッセージを伝えるという目的をもたせる。
- 2 誰が書いた原稿か分からないようにして配る。
- 3 原稿を1人で黙読させ、誰の原稿かを推測させる。
- 4 書き手が分かったら、書き手だと思ふ人の所に行き、「Do you want to be a ~?」「You want to be a ~. Right?」と書いて書き手を確認させる。できれば、書かれた内容に関して簡単なやり取りを行わせるようにする。
- 5 応援メッセージの例をいくつか提示し、ワードボックスの中から、自分が書きたいメッセージを選んで書かせる。
- 6 書き手にメッセージを添えた原稿を渡す。
- 7 メッセージを読み合う。

2.2.3 考察

本事例では、将来の夢を発表する単元の終末の活動に向けて、「発表の内容を考えるための情報を得る」という目的と「発表原稿のモデルとして活用する」という目的で読む活動を取り入れた単元を構成した。何のために読むのかという目的を明確にすることで、読

む必然性が生じ、児童が主体的に読む活動に取り組むことができると考える。

また、「読めるかもしれない」という児童の意欲をさらに、中学校の学習につなげていくために、慣れ親しんだ表現を違う場面で繰り返し読ませたり、複数の情報の中から目的に応じて必要な情報を読み取らせたりするといった中学校の読み取り方を小学校段階に合わせた形で取り入れた。読む内容が、児童にとって知りたいと思うものであれば、初見の単語や表現を含んでいても児童は主体的に読もうとすることが分かった。相手や内容を変えながら、同じ表現で書かれた文章を繰り返し読ませることで定着を図ることができ、児童は自力で読めるようになっていった。このように、「読める」という安心感が、「読むこと」への意欲を高めていくことになったと捉えている。

2.2.4 まとめ

「読むこと」の指導では、児童が「読んでみたい」という話題や内容を扱うことが最も重要であると考え。読んだことによって、知らなかった情報を得たり、新たな発見をしたりするなど、児童に「読んでよかった」という思いをもたせることが、主体的に読むことにつながっていく。

この実践を通して、児童は読んだ内容について、「相手にもっと聞いてみたい」「自分の考えを伝えたい」「応援メッセージを送りたい」など、読み取った内容について、さらに自分の気持ちや考えを伝えたいという思いをもっていることが分かった。小学校段階でも、書かれた内容を読むだけでなく、読んで得た情報について、相手に返事を書く、感想を伝えるといった、読むこともコミュニケーションの手段であることを実感できるような体験をさせることが重要だと考える。このような体験を積み重ねていくことで、読むことのよさを実感させながら、中学校の学習へ円滑に接続することができるのではないだろうか。

2.3 小学校外国語科における児童の意欲を高める 授業づくり ～「話すこと〔発表〕」の言語活動を通して～

徳島県鳴門市立板東小学校教諭 坂田 美佳

2.3.1 はじめに

小学校外国語活動、外国語科の授業づくりにおいては、児童の思いに寄り添い、「聞きたい」「伝えたい」という意欲を高めるために、相手意識・目的意識のある場面設定や必然性のある活動を大切にしてきた。友達や指導者と関わり合い、学び合う場を設定することで、児童が英語を使って人と関わる楽しさを実感させたいと考えている。聞くこと、話すことの言語活動を通して外国語の音声に慣れ親しんだ中学年での学びに加え、小学校高学年の外国語科では、中学校での学習内容を見据えて滑らかな接続をめざした指導をすることが必要となる。本実践例では「話すこと〔発表〕」の言語活動に焦点をあて、小中連携の視点を踏まえた指導計画を立てた。

2.3.2 小学校学習指導要領と中学校学習指導要領との関連

学習指導要領（平成29年3月公示）における小学校（外国語科）、中学校の「話すこと〔発表〕」の目標は以下の通りである。

【小学校学習指導要領 目標「話すこと〔発表〕」】

- ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。
- イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。
- ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。

【中学校学習指導要領 目標「話すこと〔発表〕」】

- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。
- イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

「話すこと〔発表〕」は5つの領域の中で、小学校外国語活動から設定されている3つ

の領域のうちの1つである。ここでは、小学校外国語科と中学校外国語科の目標を比較し、(1) 表現、(2) 話題、(3) 技術の3つの視点から小学校から中学校へのつながりを整理する。

(1) 表現について

小学校では「簡単な語句や基本的な表現を用いて」話すことが目標とされており、児童は様々な活動を通して十分に慣れ親しんだ語句や表現を用いて発表する。小学校学習指導要領解説には、自己紹介で使用されることが想定される語句や英語表現として、次のような例が示されている。

“My name is～.” “My birthday is～.” “I like/have/play/watch～.” “I can～.”
“I’m good at～.” “I want to～.”

中学校では「簡単な語句や文を用いて」「まとまりのある内容を」話すことが目標とされている。中学校学習指導要領解説には、1つのテーマに沿った発表をしたり、内容に一貫性があるスピーチをしたりするなど、小学校の目標にはない「まとまりのある内容」を話すことが大切だと示されている。また、「例えば、文化祭を説明する際に、“We have our School Cultural Festival in September.”や“Our School Cultural Festival is held in September.”など、学習した文法事項やその習熟の度合いによって様々な言い方が可能である。」とあるように、限られた語句や表現を扱う小学校に比べて、中学校ではより多くの既習語句や表現の中から、多様な言い方を選んで扱うことも示されている。

(2) 話題について

小学校の目標では、「日常生活に関する身近で簡単な事柄」(時刻や日時、場所など)、「自分のこと」(自分の趣味や得意なことなどを含めた自己紹介)、「身近で簡単な事柄」(学校生活や地域に関することなど)について話すことができるようにするとされている。

中学校の目標では、「関心のある事柄」(学校行事や日常の出来事など)、「日常的な話題」(学校生活や趣味、週末の出来事など)、「社会的な話題」(環境問題や人権問題など)について話すことができるようにするとされている。

小学校から中学校へと進むにつれて、話す話題が自分の身近なことから関心のある事柄、社会的な話題へとより広がり、高まっていると言える。小学校、中学校共に、様々な話題について自分の考えや気持ちなどを話すことが重視されているため、小学校の段階でも、単に学校生活や地域に関する事実などを発表するだけでなく、それらに対する自分の考えや気持ちなどをもち、それを伝えるための英語表現を言えるようにする指導を段階的に行っていくことが必要である。小学校で、自分の考えや気持ちなどを話す経験を何度も行うことで、中学校で環境問題や人権問題等、社会的で高度な話題を取り上げた際にも、自分が考えたり感じたりしたことを、より適切に表現できると考えられる。

(3) 技術について

小学校では、「伝えようとする内容を整理した上で」発表することが目標とされているのに対し、中学校では「即興で」「事実や自分の考え、気持ちなどを整理し」発表するこ

とが目標とされている。準備したものをそのまま発表するのではなく、様々な話題についてその場で英語で話すことに慣れていくために、メモなどを活用しながら口頭で要約したり、即興で発表することが求められている。中学校学習指導要領解説には「話すこと〔発表〕」の言語活動として「（イ）日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどをまとめ、簡単なスピーチをする活動。」があり、「話し手として伝えたい順番や聞き手に分かりやすい展開や構成を考えて、それらをメモにするなどして整理し、英語で『簡単なスピーチをする活動』を示している。」とされている。また、「ペアでスピーチの練習をする際などに、分かりづらかった表現を確認したり、聞き手に分かりやすい語句や表現を調べたり考えたりする活動を取り入れて、聞き手に配慮したスピーチになるように指導する必要がある。さらに、スピーチをする際には、アイコンタクトや姿勢、表情などに加えて、聞き手に問いかけたり、問いかけた後に考える間を取ったりすることにより、コミュニケーションとしてのスピーチとなるよう留意しなければならない。」とある。これらのことを、小学校の授業でも意識して指導することで、小学校での学びが中学校へと無理なくつながり、より主体的な発表が行えるようになると考えられる。

2.3.3 実践事例

（1）単元について

① **単元名** My Best Memory ～小学校の思い出を紹介しよう～（第6学年）

② 単元の内容

本単元では、小学校の卒業を前に6年間の学校生活を振り返り、思い出の行事を紹介し合う。卒業に向けた文集作りと同様の時期に実施する単元で、児童はこれまでの生活を振り返り、伝えたいことを英語で表現するために、I went to～I enjoyed～. It was～.などの過去形を使用する。お世話になったALTや交流した留学生にも紹介する場を設定することで、自分たちの小学校のことを覚えていてもらえるように思い出を伝えようと、意欲をもって取り組める単元である。

単元終末の発表の場面では、児童があらかじめ用意した内容を一方的に発表するだけでなく、友達に質問したり、聞いた児童が感想を述べたりする等、双方向のコミュニケーション場面を設定する。単元を通してSmall Talk等の時間を活用し、これまで慣れ親しんだ表現を想起させたり、ペアでの練習で聞き手に配慮した発表を意識させたりすることで、より充実した「コミュニケーションとしてのスピーチ」となるようにする。さらに発表の内容については、中学校の目標にある「まとまりのある内容」を意識し、1つのテーマに沿った、内容に一貫性がある発表となるよう、高まりを意識して段階的に指導をする。

（2）単元の目標

思い出の行事について相手に伝わるように、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを含めて話すことができる。

(3) 関係する内容のまとめ

	小学校 (外国語)	中学校 (外国語)
(話すこと 発表)	ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、 <u>簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。</u>	イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、 <u>簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。</u>

(4) 単元計画 (8時間)

	目標 (○) と主な活動 (・)
1	○ <u>学校行事の言い方について、理解する。</u> ・ Small Talk ※指導例① ・ 思い出の写真をヒントに” What’s event?” クイズ (Part1思い出編) をする。 ・ ポインティングゲームをする。 ・ チャンツ “What’s your best memory?”
2	○ <u>思い出の行事についての表現を聞いたり話したりすることができる。</u> ・ 学校行事について学級担任とALTの話聞く。 ・ カード・デスティニーゲームをする。 ・ <u>学級担任の思い出の行事を聞く。</u> ※指導例② ・ <u>思い出の行事についてペアで話をする。</u> ※指導例③
3	○ <u>思い出の行事とその理由について尋ねたり答えたりできる。</u> ・ Small Talk ※指導例① ・ <u>“Who am I?” クイズで思い出の行事を聞き、どの先生かを予想する。</u> ※指導例② ・ ビンゴゲームをする。 ・ 行事名について、例を参考に書き写す。 ・ <u>思い出の行事とその理由についてペアで尋ね合う。</u> ※指導例③
4	○ <u>思い出の行事とその理由について尋ねたり答えたりできる。</u> ・ ぴったりゲームをする。 ・ 外国の子どもたちの映像を視聴し、話を聞く。 ・ ALTの話ヒントに” What’s event?” クイズ (Part2 ALT編) をする。 ・ 楽しかったことについて、例を参考に書き写す。 ・ <u>思い出の行事とその理由についてペアで尋ね合う。</u> ※指導例③
5	○ <u>思い出の行事について、例を参考に語順を意識しながら書くことができる。</u> ・ Small Talk ※指導例① ・ マッチングゲームをする。 ・ 登場人物の学校行事について聞く。 ・ <u>ALTの思い出のアルバム紹介を聞く。</u> ※指導例② ・ 思い出の行事や理由を書く。

6	<p>○思い出の行事やその理由について、相手に伝わるように、例を参考に自分の考えや気持ちなどを書くことができる。</p> <p>・ <u>Small Talk</u> ※指導例①</p> <p>・ <u>中学生が思い出について話すビデオレターを視聴する。</u> ※指導例②</p> <p>・ <u>小学校生活の思い出について、例文を参考にしたり、単語を選んだりして書き、思い出のアルバムを作る。</u></p>
7	<p>○思い出の行事について、相手に伝わるように、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを含めて話すことができる。</p> <p>・ <u>Small Talk</u> ※指導例①</p> <p>・ <u>思い出の行事や理由をペアで伝え合う。</u> ※指導例③</p> <p>・ <u>相手に伝わりやすいスピーチになるような工夫をする。</u> ※指導例③</p> <p>・ <u>友達のアルバムを見て、推測しながら読む。</u></p>
8	<p>○思い出の行事について、相手に伝わるように、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを含めて話すことができる。</p> <p>・ <u>思い出のアルバム発表会で、思い出の行事とその理由についてスピーチする。</u> ※指導例③</p>

(5) 「話すこと[発表]」に関する指導の具体例

指導例① Small Talkの活用

単元を通して授業の始めにSmall Talkの活動を設定している。Small Talkは、高学年で設定されている言語活動の1つで、「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（文部科学省）」によると「あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝えあったりすること」と記されており、その目的は、「(1) 既習表現をくり返し使用できるようにして、その定着を図ること」「(2) 対話を続けるための基本的な表現の定着を図ること」の2点が挙げられている。

本単元では冬休みの思い出や週末の出来事等、過去形を使用するテーマを選び、児童が指導者や友達と英語を使って伝え合うことの楽しさを実感できる活動にできるようにする。このことは、既習の表現を定着させるだけでなく、発表場面での自然なやり取りにもつながる。さらに、ペアで話す経験を繰り返すことで、反応しながら聞いたり、より詳しく質問したりする「聞く力」を育てることができる。「話し手」は次のペアとの会話では、質問されたことを生かしてわかりやすい表現で言い換えたり、詳しく説明したりしようとする。このように、「話し手」を育てるのはよい「聞き手」の存在であり、Small Talkは「聞き手」の質問力の向上を図る機会とも言える。

前述したように、中学校学習指導要領解説では「話すこと [発表]」の言語活動として、その場で考えを整理したり口頭で説明したりして、自分の考えや気持ちなどを話す活動が求められている。そのために小学校段階でも豊富な言語活動の場を設定し、児童にとって無理のない段階的な指導を継続していくことが必要だと考えられる。

指導例② モデルによる児童へのゴールイメージの提示と意欲づけ

第2時に学級担任の思い出の行事を聞く活動をすることにより、単元の始めの段階で児

児童は単元のゴールをイメージすることができる。第5時ではALTの思い出のアルバム紹介を聞く活動を設定し、学級担任と同様に、児童のモデルとなるように実際に作成したアルバムを提示しながら発表する。指導者は児童に問いかけたり、問いかけた後に間を取ったりすることにより、コミュニケーションとしてのスピーチのモデルとなるようにする。さらに第3時の“Who am I?”クイズでは、校内の身近な先生の思い出をクイズ形式で出題する。指導者がその先生になりきって発表し、児童に問いかけたり、質問に答えたりすることでコミュニケーションの機会とする。

〈学級担任による「思い出のアルバム紹介」発話例〉 T：指導者 S1,S2,S3：児童

T：Everyone, This is my album. My best memory is the sports day. We enjoyed running and dancing. The relay race was exciting. You did your best. It was wonderful day.
Kota, How was the sports day?

S1：It was fun.

T：What's your best memory of the sports day?

S1：Tsunahiki.

T：Oh, your best memory is “Tug-of-war” .

S1：Yes, it was fun.

S2：Me too. It was exciting.

T：Yuka, What's your best memory of the sports day?

S3：I enjoyed dancing.

T：You like dancing. You are good at dancing. I like dancing too.
My best memory is the sports day. Thank you.

また、本単元では小中連携の取組として、第6時を中学校英語科教員とのチームティーチングで指導した。事前に中学校英語科教員と連携し、中学生が小学校の思い出について語るビデオレターや、小学校の思い出を書いたワークシート等を準備して児童に提示した。中学生が英語を話す様子や書いた作品を見ることで児童は、「あんな風に英語を話したい」「もっと英語を書いてみたい」という思いをもち、自分のアルバム作りや発表への意欲を高めることができた。また思いをこめて書くことで、単元終末の主体的な発表へと結びつけることができると考えられる。




【中学生からのビデオレターを視聴する児童】

指導例③ 単元終末のスピーチに向けた発表内容とコミュニケーションの高まり

第2時から第7時にかけて、思い出の行事やその理由について、ペアやグループで話す時間を設定している。単元終末のスピーチで、まとまりのある内容の発表をするために、慣れ親しんだ表現を段階的に増やしたり、質問されたことを生かして内容を工夫・改善し

たりしながら、言語活動の場をくり返し設けるようにする。

<p>〈予想される通常の発表例〉</p> <p>My best memory is my school trip. We went to Kyoto . It was fun.</p>		<p>〈まとまりのある内容を目指した発表例〉</p> <p>My best memory is my school trip. We went to Kyoto . We went to the Uzumasa-Eigamura. I enjoyed shopping. It was fun.</p>
--	---	---

各時間の児童の発話例と留意点を次に示す。

<p>【第2時：思い出の行事を話す】</p> <p>A : My best memory is my sports day. It was fun. How about you? B : My best memory is my school trip. It was wonderful.</p>

<p>【第3時：思い出の行事とその理由について、ペアで尋ね合う】</p> <p>A : What's your best memory? B : My best memory is my school trip. A : Oh, school trip. Why? B : It was wonderful. I enjoyed shopping. I …買った…キーホルダーを買ったって何て言うのかな。 What's your best memory? A : My best memory is my sports day. …</p> <p>ペアでのやり取りの中で、上記のように英語で言いたいと言いがわからない表現が出てくることがある。コミュニケーション後、全体でその表現を共有して別の言葉に言い換えられないか考えたり、必要な場合には新出表現を伝えたりすることで、次時には新しい表現を加えて話すことができる。</p>

<p>【第7時：思い出の行事や理由をペアで伝え合う】</p> <p>ペアで紹介した経験を生かし、相手に分かりづかった表現を確認したり、より伝わりやすい発表となるよう内容を工夫したりする活動を取り入れて、聞き手に配慮したスピーチになるように指導する。さらに、発表する際には、アイコンタクトや表情、声の大きさなどの態度面に加えて、聞き手に問いかけたり、問いかけた後に考える間を取ったりすることができるように指導を行う。</p>

【第8時：思い出のアルバム発表会】

S1：発表者 S2,S3：発表者以外の児童

S：What's your best memory?

S1：My best memory is my school trip. We went to Kyoto. We went to the Uzumasa-Eigamura. I enjoyed shopping. It was fun.

S2：I like the Haunted house. How about you?

S1：Me too! I went to the Haunted house with friends. It was exciting. We went to Nara. I saw deer. Do you like deer?

S2：Yes, I do.

S3：No,I don't.

S1：Why?

S3：Scary.

S1：I see. That's my best memory. It was wonderful. Thank you.

S：Thank you.

単元のまとめである第8時の「思い出のアルバム発表会」では、学級の実態に応じてグループや全体で自分の思い出を紹介する。発表の際には中間評価の時間を設け、これまでの留意点が意識できていたか児童に考えさせるとともに、よいモデルを紹介するなどして、常に目標を意識した活動となるようにする。また、Small Talkの経験を想起させ、話し手だけでなく、聞き手の姿勢や反応についても活動前に目標を示しておくことで、一方的な発表ではなく、コミュニケーションとしてのスピーチとなり、話し手と聞き手が相互に育つ言語活動を展開することができると考えられる。

〈児童が作成した「思い出のアルバム」〉



2.3.4 おわりに

「話すこと（発表）」の指導では、「誰に」「何のために」伝えるのかという相手意識や目的意識を明確にし、児童の「伝えたい」という意欲を高めることが大切であると考えられる。また、児童が自信をもって発表するための知識と技能を無理なく身に付けることができるような指導も必要である。さらに、本事例では単元全体を通して、「話し手」と同時に「聞き手」を育てるための実践を続けてきた。外国語科に限らず、自分の考えや気持ちを自分の言葉で話すことに苦手意識をもっている児童は少なくない。自分の思いを安心して話すことができる受容的な学級の雰囲気の中で、発表することの楽しさや喜びを感じられるような取り組みを今後も続けていきたい。小学校でそのような体験を積み重ねることで、中学校で、より高度な内容、社会的な話題になった時にも、進んで自分の考えや気持ちを発表しようという意欲につながると考えている。

外国語教育は大きな変化の時期を迎えており、小学校教員からは不安や戸惑いの声が多く聞かれる。しかし、小学校に外国語活動が導入されてから、私たちは授業で生き生きと活動する子どもたちの姿をたくさん目にしてきた。教科「外国語」となっても構えることなく、これまでの外国語活動で培ってきた力が、さらに高まり広がり、豊かになるよう、小学校外国語教育の可能性を探っていきたい。課題は山積しているが、これからも目の前の子どもたちにとってよりよい時間にするを大切に、笑顔あふれる授業を子どもたちとともに創っていきたい。そして、小学校、中学校、さらには高等学校教員が、共に子どもたちを育てていこうという意識をもち、共に学び合おうとすることで、よりよい連携が進むことを願っている。

2.4 小・中学校の滑らかな接続を目指した 外国語科学習指導の研究 ～「書くこと」に焦点をあてた学習指導の 在り方についての提案～

広島県廿日市市立七尾中学校教諭 山崎 学肖

2.4.1 小学校学習指導要領と中学校学習指導要領との関連

(1) 目標からの関連

平成29年7月に告示された学習指導要領解説外国語編によると、小学校高学年・中学校の外国語科における「書くこと」の目標は次のように明記されている。

小学校学習指導要領 目標「書くこと」

- ア 大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする。また，語順を意識しながら音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。
- イ 自分のことや身近で簡単な事柄について，例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本表現を用いて書くことができるようにする。

中学校学習指導要領 目標「書くこと」

- ア 関心のある事柄について，簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。
- イ 日常的な話題について，事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて，考えたことや感じたこと，その理由などを，簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

小学校高学年の「書くこと」に関して言えば，小学校ではアルファベットの大文字と小文字に関しては何も見ずに書くことが求められており，それ以外については書き写すことが目標として挙げられている。一方中学校の「書くこと」に関しては，1文単位を正確に書くことから，まとまりのある文章を書くこと，そして聞いたり読んだりした内容について自分の考えなどを書くことが求められていることが分かる。小学校の目標と中学校の目標との関連については，中学校目標のアについて，小学校で学習してきた内容を踏まえて指導することが学習指導要領解説にも明記されているが，中学校目標イおよびウに関しては，アを受けてより発展的な目標となっている。

これらの目標における関連を見ると，小学校から中学校への接続はかなりギャップがあるのではないかと推測できる。その理由としては，小学校段階では何も見ずに書くのはアルファベットだけであるのに対して，中学校では何も見ずに1つの文からまとまりのある

文章を英語で書くことが求められているからである。英文を書くことは、多くの技能が求められる。例えば、英語で1文を書く場合には、一般的に①日本語を英文に直す、②英単語を知っている、③英語の語順を理解している（定型文は除く）、④英文の書き方（ルールや文法など）を理解している、のような知識・技能が必要になるのではないかと想定される。小学校の学習を踏まえて中学校で学習を継続させるとはいえ、小学校で英単語や英文を「書き写す」ことしか経験していない生徒が、中学校での「書くこと」に対してどれだけ抵抗感なく学習を進めることができるのかは疑問が残ると考える。

外国語科の「書くこと」の指導で留意しておかなければならないことは、小学校学習指導要領の目標にも明記されている「音声で十分に慣れ親しんだ」ということである。この表現については中学校の学習指導要領には明記されていない。しかしながら、言語習得の流れを意識していけば、音声で十分に慣れ親しませることは小中学校問わずとても大切なことであると考えられる。したがって、書く活動を行わせる前には音声（スピーキングやリスニング）でその話題についてしっかり活動した後に取り組ませることが、有効ではないかと考える。

（2）目標の関連から見える課題と指導の方向性

「書くこと」の中で最も児童生徒にとってハードルが高いのは音と文字の一致であろう。英語では話すことはできても、それを文字で書くと分からなくなることが多い。この音と文字の一致をどのように指導していくかが「書くこと」におけるポイントとなるであろう。小学校の指導で一般的に行われているのは、ピクチャーカードを使って絵と文字を併用しながら指導していく方法である。小学校と中学校の指導方法の面からみても、この方法を継続していくことで円滑な接続が期待できると考える。そして、もう1つの方法は、音と文字とを関連づけて指導することである。小学校学習指導要領解説では、「読むこと」の目標において音と文字とを関連づけて指導する内容が明記されている。発音と綴りを関連づける指導は中学校の外国語科で指導することと明記されてあるが、歌やチャンツを使ってアルファベットには2種類の読み方（名前読みと音読み）があることを小学校でも指導することが「のりしろ」部分の指導ではないかと考える。

音と文字とを関連づける指導については、アレン玉井（2010）は、その指導の前に、①大文字の学習、②小文字の学習、③音韻（素）認識能力の訓練を十分にすることが必要であると述べている。これら3つの学習は小学校3年生国語科の授業で行われるローマ字の学習である程度可能である（ローマ字学習については後述する）。さらに、畑江ほか（2014）は、phonemic awarenessを促す外国語活動の実践について研究しており、研究のまとめとして「6年生は「理解できたから面白い」「将来役立つ」等のメタ認知の発達に基づく学習が可能になるため、英語の「音素への気づき」は、「音声」のみで雲をつかむような状態から脱却させ、英語を「読んでみよう」「読めるかもしれない」という姿勢を作る。これが中学校で本格的に始まる「読み書き」の学習前の素地づくりとなり、「不安」ではなく「意欲」をもって中学での英語学習に取り組むことを期待する」と述べている。これらの研究結果から分かるように、英語の音韻への気づきを促すためにも音と文字とを関連づける指導をすることが「読むこと」だけではなく「書くこと」にもつながる指導であると考えられる。

これまで小学校と中学校の「書くこと」における目標を比較検討してきた。そこで、滑らかな接続を実現させるために、小学校と中学校で共通して行うべき指導内容を次のようにまとめた。

- ・言語習得のメカニズムを意識して指導をする。
（インプット → インテイク → アウトプットの流れを意識する）
- ・口頭練習（リスニングやスピーキング）を最初に繰り返し行う。
- ・文字と絵を見せながら指導する。また英文を読む時には、指でなぞりながら読むことを指導する（音と文字を一致させるため）
- ・まとめて書かせるのではなく、少しずつ（1文ずつ）書かせる練習を計画する。

表1 「書くこと」における小中学校共通した指導方法の例

このような指導を基本とすることで、小学校と中学校での接続がスムーズになり、目標達成に向けて指導が可能となると考える。次に小学校と中学校での具体的な指導について、具体的な単元を取り上げて示す。

2.4.2 小学校における「書くこと」の指導の実践例

小学校での具体的な指導については、本研究では単元構成や授業構成のフォーマットを提示することにする。その理由としては、単元によって指導方法が異なっては小中学校での滑らかな接続が十分ではなくなるし、同じようなスタイルでの指導を行うことで、スパイラルな指導が可能となり児童生徒の英語に関する学力を向上させることが可能になるからである。

(1) 授業内容フォーマット

①帯活動【目標アの達成を意識した活動】

- ・音と文字とを関連づけたアルファベットゲーム

音と文字とを関連づけた指導では、アルファベットの音読みだけでできる英単語を提示し、その音を聞かせながらアルファベットカードを使って英単語を作成する活動を用いる。単語は身の周りの単語や授業で扱う単語を使用する。単語の文字数は3語以上6語程度のものであるが、児童の実態に応じて長い単語にチャレンジさせてもよい。また、活動に慣れてきたらアルファベットカードを使用せずに四線にアルファベットを1文字ずつ書かせることもできる。児童は最初、戸惑いながら活動を行っていくが、次の授業後アンケート結果からみても分かるように、全体的には好意的に学習に取り組むようになっていく。

回答選択肢	回答数 (%)
①英単語を作ることができて楽しい	171 (76.0%)
②英単語を作ることができないが楽しい	40 (17.8%)
③英単語を作ってもあまり楽しくない	10 (4.4%)
④英単語を作ることができないので楽しくない	4 (1.8%)

表2 筆者が行ったアルファベットゲームに関するアンケート結果
(平成30年度12月実施)

・ワードビンゴ【目標イの達成を意識した活動】

小学校の外国語科の授業で学習した内容の単語を10語程度用意して、それをビンゴシートに8語程度書き写す。それを使ってビンゴゲームを行う。毎時間の帯活動とすることで、英語を書くことに慣れさせることや、単語の定着を図る目的で実施する。

②既習の表現練習（単語練習や英文の練習）

③本時内容にかかわるリスニング練習及びスピーキング練習（インタビュー活動が主）

④本単元目標達成のための「書くこと」の学習

英文を構成させる際に、語順を意識させるために色で分けた単語カードを使って英文を作る「英文作成パズル学習」を取り入れる（主語は青、動詞は赤、目的語は緑など）。この活動では、4人程度のグループを作り、児童が相談したり確認したりしながら学習を進めることが望ましい。またここで作成させる英文については、児童が授業中に音声で十分に慣れ親しんだ表現を中心に、語句を入れ替えながら実施させる。

【目標アの達成に向けたスモールステップになる活動】

⑤振り返り（本時で学習した表現の中で1文を英文で書く）

本時の授業内容にかかわって繰り返し練習した英文を授業者が提示して、黒板やワークシートを見ながら、特に重要な表現（その後の活動で使用する表現など）を書き写すように指導する。毎時間書かせた英文を活用することで、単元ゴールの活動におけるスピーチや紹介文を完成させることができるように英文を工夫することが大切である。【目標イの達成を意識した活動】

(2) 具体的な指導例

①単元名

Unit 9 Junior High School Life (We Can ! 2 文部科学省)

②単元目標

中学校生活で楽しみたいことや頑張りたいことを友達に英語で伝えることができる。

【思考力・判断力・表現力】

③評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
<知識> スピーチに関する語句や、 I want to ～, What do you want to ～?の表現について理解している。 <技能> 好きなことやできること、 やってみたいことなどに関する ことについて、書く技能を身に付けている。	中学校生活について、自分が やってみたいことや理由 などの伝えたい内容について、 音声で十分に慣れ親しんだ 語句や表現を用いて書いている。	中学校生活について、自分が やってみたいことや理由 などの伝えたい内容について、 音声で十分に慣れ親しんだ 語句や表現を用いて書く こうとしている。

④ゴールイメージ（最終パフォーマンス課題）

中学校生活で楽しみたいことや頑張りたいことを5文程度のスピーチ形式で伝える。

例 I'll talk about junior high school life. I want to enjoy baseball club. I like playing baseball very much. I want to enjoy Sport Day. I am good at running. I want to enjoy English. I want to speak English. Thank you.

⑤単元計画（全7時間） ※□内の活動は「書くこと」につながる活動を示す。

めあて	主な学習内容	主な表現例
・中学校生活についてイメージを膨らまそう。（第1時）	<input type="checkbox"/> 帯活動 <input type="checkbox"/> 中学校生活について知っていることを出し合う。（日本語で） <input type="checkbox"/> Let's Watch and Think1 (P67)を見て、中学校生活についてイメージする。 <input type="checkbox"/> 中学校で何を楽しみたいのか英語でインタビューをする。 <input type="checkbox"/> 練習した表現を1文書く。	<input checked="" type="checkbox"/> What do you want to enjoy? <input checked="" type="checkbox"/> I want to enjoy club / event / subject.
・中学校の部活動について話そう。（第2時）	<input type="checkbox"/> 帯活動 <input type="checkbox"/> 表現の復習練習をする。 <input type="checkbox"/> 所属する中学校の部活動の名前を練習する。 <input type="checkbox"/> Let's Watch and Think2 (P68)を見て、リスニングに取り組む。 <input type="checkbox"/> 自分が楽しみたい部活動についてインタビューをする。 <input type="checkbox"/> 練習した表現を1文書く。	<input checked="" type="checkbox"/> What do you want to enjoy? <input checked="" type="checkbox"/> I want to enjoy club / event / subject. <input checked="" type="checkbox"/> What club do you want to enjoy? <input checked="" type="checkbox"/> I want to enjoy baseball club. 等
・中学校の学校行事について話そう。（第3時）	<input type="checkbox"/> 帯活動 <input type="checkbox"/> 表現の復習練習をする。 <input type="checkbox"/> Let's Listen1 (P68)を聞き、スピーチ内容を聞き取る。 <input type="checkbox"/> 所属する中学校の学校行事についての説明を聞き、名前を練習する。 <input type="checkbox"/> 自分が楽しみたい学校行事についてインタビューする。 <input type="checkbox"/> 練習した表現を1文書く。	<input checked="" type="checkbox"/> What club do you want to enjoy? <input checked="" type="checkbox"/> I want to enjoy baseball club. <input checked="" type="checkbox"/> What event do you want to enjoy? <input checked="" type="checkbox"/> I want to enjoy Sport Day. 等

<p>・中学校の授業について話そう。 (第4時)</p>	<p>○帯活動 ○表現の復習練習をする。 ○Let's Listen 2 (P69) を聞き, スピーチ内容を聞き取る。 ○中学校の授業について説明を聞き, 教科名を練習する。 ○自分が楽しみたい教科についてインタビューする。 ○練習した表現を1文書く。</p>	<p>●What event do you want to enjoy? ●I want to enjoy Sport Day. ●What subject do you want to enjoy? ●I want to enjoy English. 等</p>
<p>・中学校生活に関するスピーチを考えよう。 (第5時)</p>	<p>○帯活動 ○表現の復習練習をする。 ○Let's Listen 3 (P71) を聞き, スピーチ内容を聞き取る。 ○単語カードを使った英文作成活動(英文作成パズル)をグループで行う。 ○練習した表現を1文書く。</p>	<p>●What subject do you want to enjoy? ●I want to enjoy English. ●I want to enjoy baseball club. 等 ●I want to enjoy Sport Day. 等 ●I like running. ●I like English.</p>
<p>・中学校生活で頑張りたい内容を考えよう。 (第6時)</p>	<p>○帯活動 ○表現の復習練習をする。 ○Let's Listen 4 (P71) を聞き, スピーチ内容を聞き取る。 ○書き溜めた英文を使って自分のスピーチ文を書く。 ○作成したスピーチ文を伝える練習をする。</p>	<p>●I want to enjoy English. ●I want to enjoy baseball club. 等 ●I want to enjoy Sport Day. 等 ●I like running. ●I like English. ●I'm good at running.</p>
<p>・中学校生活で楽しみたいことを英語で伝えよう。 (第7時)</p>	<p>○帯活動 ○表現の復習練習をする。 ○自分のスピーチを相手に伝える練習をする(ペアを変えながら繰り返し行う)。 ○クラス全体に向けて自分のスピーチを発表する。 ○振り返り(スピーチ内容について)</p>	<p>●I want to enjoy English. ●I want to enjoy baseball club. 等 ●I want to enjoy Sport Day. 等 ●I like running. ●I like English. ●I'm good at running.</p>

⑥「書くこと」の活動に関する補足

上記のような単元計画で「書くこと」を実施する中で、1時間ごとの授業の最後に「練習した表現を1文書く」活動を設定している。これは、1時間の学習のまとめ、そして最終パフォーマンス課題にスムーズにつなげるための活動として位置付けている。それぞれの授業における英文例は次のように考えられる。

授業内容	練習した表現の1文例
中学校生活についてイメージを膨らませよう。(第1時)	I want to enjoy club / event / subject.
中学校の部活動について話そう。(第2時)	I want to enjoy <u>baseball club</u> . (下線部は児童によって異なる語句になる)
中学校の学校行事について話そう。(第3時)	I want to enjoy <u>Sport Day</u> . (下線部は児童によって異なる語句になる)
中学校の授業について話そう。(第4時)	I want to enjoy <u>English</u> . (下線部は児童によって異なる語句になる)
中学校生活に関するスピーチを考えよう。(第5時)	I like <u>running</u> . / I'm good at <u>running</u> . (下線部は児童によって異なる語句になる)

表3 各授業のまとめ英文例

このように毎時間1文ずつ少しずつ書く活動を入れていくことで、1時間ごとの学習を振り返ることもできるし、最終パフォーマンス活動に取り組む際にも児童が困ることが少なくなると想定される。単元開始時にこのような指導を行うことを児童に説明することにより、児童も見通しを持って授業に取り組むことができるし、最終ゴールイメージを持ちながら学習を行うことができる。

(3) 小学校中学年での外国語活動から「書くこと」の流れについて

小学校の高学年で外国語科として英語が導入され、そして「書くこと」に関して言うとアルファベットは小学校段階で習得すべき内容に変更される(小学校学習指導要領 書くことアの目標より)。中学校1年生初期での指導が変わることで、それ以降の指導も変更することは必然的なことである。小学校段階で、文字指導をどこまで指導するかは議論の余地があるところだが、「聞くこと」「話すこと」の領域における実践で分かるように、活動内容を変えながら繰り返し練習していくことで児童生徒の英語力を伸ばすことを期待している。したがって、「書くこと」においても、活動内容を変えながら繰り返し練習することが必要になると考える。ただ、「練習」という言葉はかなり範囲が広いと想定される。例えば、「単語の書き取り」も練習であるし、「自己紹介文を書く」ことも練習の1つである。大事なことは、「書く目的」を明確にして指導することが大切になると考える。

小学校では3年生国語科の授業においてローマ字(訓令式)を学習する。ここが児童が教科授業でアルファベットと出会う最初だと想定される。ローマ字を学習する意味としては、コンピュータ使用に関わるなどの情報教育的な視点でも重要であり、外国語教育の面からみても重要だと考える。現在は小学校3年生でローマ字(訓令式)を学習してから、

高学年の外国語科授業までアルファベットを書く機会はあまりない。そこで、ローマ字（訓令式）を学習する小学校3年生から、中学年の外国語活動授業においては自分の名前をはじめとする人名や地名、身の回りの言葉を書く活動を取り入れてみることを提案する。ローマ字学習の有効性について松浦（2005）は、英単語の読み書き能力とローマ字知識との間には強い因果関係があることを確認している。ローマ字習得者は非習得者に比べ、単にローマ字知識が多いだけでなく、ローマ字処理速度が速い。このような理由で、入門期ではローマ字が英語単語の読み書き能力を促進し、その結果英語学力を向上させるという因果関係がありそうなことを確認している。さらに丸山（2010）は、「圧倒的に書くことに関して、ローマ字が不得意な生徒は、書くことに関して困難さを感じている生徒が多い。このことから中学校入学以前にローマ字の習得が、入学後の「書くこと」の学習を容易にすると考えられる」と述べており、松浦（2005）と同様にローマ字学習の有効性を示している。

そのような指導が可能になると、高学年では英語の単語や文章を書くことにもあまり違和感なく移行できると考える。中学校では、その流れを受けて、文法知識を指導しながら英文を正しく作る（書く）ことにもつなげていくことが可能になると考える。

2.4.3 中学校における「書くこと」の指導の実践例

中学校での指導に関しても、前述した小中学校共通の指導内容を考えてフォーマットを作成する。中学校での指導フォーマットでの特徴は2つある。1つは、単元構成である。それぞれの単元において横浜市立南高等学校附属中学校で行われている「5ラウンドシステム」をベースにして、単元内容フォーマットを構成する。ただし、横浜市立南高等学校附属中学校で実施しているラウンドシステムではなく、単元内だけの独自ラウンドシステムを採用する。そして、文法指導と内容理解についても1つのラウンドとして取り上げて指導することとする。その理由としては、どの教科書やどの単元でも実現可能な方法であるからである。

そして2つ目は、帯活動についてである。帯活動では、既習表現の練習（いわゆる「弾丸インプット」や「1分間チャット」）などで正確な英文を言ったり書いたりする練習と自分の意見や感想などを言ったり書いたりする活動を計画する。これらの活動は、目標ア・イ・ウの達成に向けたスモールステップになるような活動として位置付けている。これら2つの特徴を取り入れた単元構成のフォーマットを次から説明する。

（1）単元内容フォーマット（独自ラウンドシステムについて）

①文法ラウンド（基本配当時数：2～3時間程度）

説明や機械的な練習のみで指導するだけでなく、フォーカス・オン・フォームの指導を基にして、英語でのやり取りやコミュニケーション活動を通して、言語構造に気付かせる指導を行う。補足的な説明は日本語で入れるが、おおむね英語でやり取りする活動をメインとする。各授業の活動最後には、本時で学習した英文を書く練習（1文ずつの並べ替えや英文作成）を取り入れる。【目標アを意識した活動】

<具体的な学習活動>

- ・ピクチャーカードを使って、絵についての説明を生徒とのやり取りを通して説明する。
- ・目標構文についてのリスニングと適語補充（主に単語のディクテーション）
- ・目標構文についての説明（日本語で簡単に）
- ・目標構文を活用したインタビュー活動（インフォメーションギャップを活用）
- ・目標構文の練習（並び替え問題、英作文問題など）

②リスニングラウンド（基本配当時数：2時間程度）

言語習得理論においては、言語を習得する時には豊富なインプットが必要であるため、教科書本文内容を繰り返し聞かせるように留意する。本文内容の順番に合うように絵を並び替える、本文内容の順番になるように英文を並び替える、ある特定の単語を聞き取る、などの活動を取り入れながら何回も英文を聞かせるようにする。また、このラウンドからは授業の初めに授業者による教科書内容に関するオーラルイントロダクションを行う。このオーラルイントロダクションは、始めは授業者のリテリングなどでの説明で行うが、徐々にQ&Aを入れながら、生徒とのやり取りに移行していくよう留意する。

<具体的な学習活動>

- ・授業者による教科書内容のオーラルイントロダクションを聞き、説明に必要な内容を日本語でメモする。
- ・単元全体をCDで聞き、話の流れに合うように絵を並び替える。
- ・絵を説明するために必要な情報をCDで聞き取り、日本語でメモを取る。
- ・ランダムに並べられた英文を見て、本文内容の順番になるように英文を聞いて並び替える。
- ・英文を聞いて、どの単語が読まれているかを選ぶ。（語彙選択聞き取り）

③内容理解ラウンド（基本配当時数：2時間程度）

5ラウンドシステム最後のリテリングをさせるためには、本文内容を正確に理解する必要があるため、内容理解についての設問を用意して、それに取り組ませる。具体的な内容は、日本語での設問について日本語で答えさせ、その答えの根拠となる英文を教科書から1文抜き出して書く活動である。設問の種類は、事実発問や推論発問など様々な種類の発問を用意する。個人差があるため、4人組のグループを使ってグループメンバー全員が理解できるように教え合いながら進めることを指導する。

<具体的な学習活動>

- ・CDを聞いて、聞こえた文字を指でなぞりながら聞く。
- ・新出単語の練習と確認をする。
- ・内容理解のワークシートを配布して、4人グループで問題を日本語で答える。
- ・本文内容理解問題を確認する（重要な構文を簡単に説明しながら）。

④音読ラウンド（基本配当時数：2時間程度）

リテリングにつなげるための練習として音読練習を多く取り入れる。到達目標をいくつか設定し、各自の目標に合わせてしっかり練習させる。目標設定については、音読する時間や音読する教材で変化をつける。音読する時間については、WPMを参考にして時間を設定する。音読する教材については、教科書内容そのまま、穴あき音読、置き換え音読、などの種類を用意する。音読ラウンドのまとめとして、音読で練習した穴あき音読や置き換え音読シートを英文で書く練習をさせる。

<具体的な学習活動>

- ・教師の音読に続いて、単元全体の本文を音読する。
- ・新出単語の確認と練習をする。
- ・CDの後に続いてリピート練習する。
- ・個人の目標に合わせて各自で音読練習をする（教科書での音読、穴あき音読、置き換え音読）。
- ・音読のワークシートを見ながら、英文を書く。
- ・生徒同士で音読チェックをする（目標達成ができているかどうか確認する）。

⑤リテリングラウンド（基本配当時数：2時間程度）

教科書内容をしっかり理解させ、音読練習をさせた後に、本文内容に関するピクチャーカードを使ってリテリングをさせる。個人やグループでしっかり考えさせて、繰り返し練習させる。途中で自分のリテリングした内容を書かせる活動を取り入れる。指導順番としては、口頭でのリテリング→リテリングを書く→再度口頭でのリテリング→リテリングを書く、を想定している。音読ラウンドと同じように、到達目標をいくつか設定し、個人で目標を設定させる。目標については、リテリングの時間、キーワード、自分の意見や感想を入れるなどで段階を分けるよう設定する。**【目標イ・ウを意識した活動】**

<具体的な学習活動>

- ・CDに合わせて、本文内容を音読する。
- ・絵を使って、リテリング練習を個人でする（内容を考えるなど）。
- ・ペアを変えながら、自分で考えたリテリングをする（3回程度）。
- ・自分で行ったリテリングを英文で書く。
- ・再度、リテリングの練習を口頭でする。
- ・再度、自分のリテリングを英文で書く。
- ・生徒同士でリテリングチェックをする（目標達成ができているかどうか確認する）。

(2) 具体的な指導例

①単元名 PROGRAM 6 由紀のイギリス旅行 (Sunshine I 開隆堂)

②単元目標

自分の懂れている人や身の回りの人についての紹介文を作り、伝えることができる。

【思考力・表現力・判断力】

③評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
<p><知識> 3単現のsを用いた文の構造を理解している。</p> <p><技能> 自分の紹介したい人物について、3単現のsを含む現在形やbe動詞などの簡単な語句や表現を用いて書く技能を身に付けている。</p>	<p>自分の紹介したい人のことが的確に相手に伝わるように、事実や自分の考え、話す順番や話し方を整理し、簡単な語句や表現を用いてまとまりのある英文を書いている。</p>	<p>自分の紹介したい人のことが的確に相手に伝わるように、事実や自分の考え、話す順番や話し方を整理し、簡単な語句や表現を用いてまとまりのある英文を書こうとしている。</p>

④ゴールイメージ (最終パフォーマンス課題)

生徒が紹介したい人の特徴について、5～7文程度のスピーチ形式で伝える(書く)。

例 Look at this picture. This is my favorite tennis player *Nishikori Kei*. He is a great tennis player. He plays tennis in the world. He likes many sports. He also likes music. I want to be a tennis player like him. Thank you.

⑤単元計画 (全11～12時間) ※□内の活動は「書くこと」につながる活動を示す。

めあて	主な学習活動
<p>・本単元でつきたい力を知る。</p> <p><文法ラウンド></p> <p>・3単現sの用法(肯定文)を理解する。</p> <p>(3単現sを使った英文を作ることができる)</p>	<p>○帯活動(既習の表現練習や1分間チャットなど)</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら、3単現のsを含むまとまった人物紹介に関する英文を聞く(リスニング活動)。</p> <p>○文構造について気づきを共有する。</p> <p>○表現問題練習をする。</p> <p>○友達や有名な人を説明する3ヒントクイズを作る。</p> <p>○振り返り(今日の1文を英文で書く)</p>

<p><文法ラウンド></p> <p>・3単現sの用法（疑問文・否定文）を理解する。（3単元sの疑問文・否定文を作ることができる）</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，その人物に関するやり取りのデモンストレーションを聞く（リスニング活動）。</p> <p>○文構造について気づきを共有する。</p> <p>○表現問題練習をする。</p> <p>○3単元sの疑問文を使った人物当てクイズをする。</p> <p>○振り返り（今日の1文を英文で書く）</p>
<p><リスニングラウンド></p> <p>・教科書本文内容の概要（あらすじ）を聞き取る。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，授業者による教科書本文内容についてのオーラルイントロダクションを聞く（生徒とのやり取りを入れながら進める）。</p> <p>○本文内容の順番になるように絵を並び替える活動（リスニング活動1）をする。</p> <p>○それぞれの絵を説明するために必要な情報を聞き取る（リスニング活動2）。</p> <p>○振り返り（本文内容についてわかったことを日本語で書く）</p>
<p><リスニングラウンド></p> <p>・教科書本文内容の具体的な内容を聞き取る。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，授業者による教科書本文内容についてのオーラルイントロダクションを聞く（生徒とのやり取りを入れながら進める）。</p> <p>○本文内容の順番になるように英文を並び替える活動（リスニング活動3）をする。</p> <p>○特定の単語を聞き取る活動（リスニング活動4）をする。</p> <p>○新出単語の練習をする。</p> <p>○振り返り（本文内容についてわかったことを日本語で書く）</p>
<p><内容理解ラウンド></p> <p>・教科書内容の具体的な内容を理解する。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，授業者による教科書本文内容についてのオーラルイントロダクションを聞いたり，Q&Aに取り組んだりする（生徒とのやり取りを入れながら進める）。</p> <p>○新出単語の練習をする。</p> <p>○教科書本文理解に関する設問に答える。</p> <p>○振り返り（本文内容についてわかったことを日本語で書く）</p>

<p><内容理解ラウンド></p> <p>・教科書内容の細かい内容を理解する。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，授業者による教科書本文内容についてのオーラルイントロダクションを聞いたり，Q&Aに取り組んだりする（生徒とのやり取りを入れながら進める）。</p> <p>○新出単語の練習をする。</p> <p>○教科書本文理解に関する設問について答え合わせ（確認）をする。</p> <p>○振り返り（本文内容についてわかったことを日本語で書く）</p>
<p><音読ラウンド></p> <p>・教科書本文内容を音読することができる。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，授業者による教科書本文内容についてのオーラルイントロダクションを聞いたり，Q&Aに取り組んだりする（生徒とのやり取りを入れながら進める）。</p> <p>○新出単語の練習をする。</p> <p>○個人で目標を設定し，音読練習をする。</p> <p>○振り返り（音読する時のポイントなどを日本語で書く。）</p>
<p><音読ラウンド></p> <p>・個人の目標に合わせた音読ができる。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，授業者による教科書本文内容についてのオーラルイントロダクションを聞いたり，Q&Aに取り組んだりする（生徒とのやり取りを入れながら進める）。</p> <p>○個人で目標を設定し，音読練習をする。</p> <p>○ペアで目標達成に向けた音読チェックをする。</p> <p>○振り返り（音読してみて，できたことや難しかった内容を日本語で書く。）</p>
<p><リテリングラウンド></p> <p>・教科書内容を自分の言葉で説明できる。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，授業者による教科書本文内容についてのリテリングを聞く（生徒とのやり取りを入れながら進める）。</p> <p>○個人で目標を設定し，シャーロックホームズを説明するリテリング練習をする。</p> <p>○リテリングをペアやグループで練習する。</p> <p>○自分のリテリングを書く。</p> <p>○振り返り（リテリング活動でできたこととできなかったことを日本語で書く。）</p>

<p><リテリングラウンド></p> <p>・個人の目標に合わせたリテリングができる。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○ピクチャーカードを見ながら，授業者による教科書本文内容についてのリテリングを聞く（生徒とのやり取りを入れながら進める）。</p> <p>○個人で設定した目標を達成するため，シャーロックホームズのリテリング練習をする。</p> <p>○ペアで目標達成に向けたリテリングチェックをする。</p> <p>○自分のリテリングを書く。</p> <p>○振り返り（自分や友達のリテリングを聞いて，発見したことなどを日本語で書く。）</p>
<p><パフォーマンス課題に向けた学習></p> <p>・自分が紹介したい人物について紹介文を書く。</p>	<p>○帯活動（既習の表現練習や1分間チャットなど）</p> <p>○トピック選定に向けたスピーキング活動</p> <p>例 Who is your favorite person?に関するチャット</p> <p>○マッピングを活用して，アイデアを出す。</p> <p>○マッピングを参考にして，英文作成をする。</p> <p>○英文を伝える練習をする。</p>

⑥「書くこと」の活動に関する補足 -リテリング活動について-

小学校では、「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写す」ことまでが目標となり，中学校では「まとまりのある文章を書く」ことが求められる。その2つの目標をつなげる指導として，リテリング活動を取り入れている。具体的には，生徒は単元の授業において音声で十分に慣れ親しんだ表現を使って，単元内容の絵を説明する活動となる。生徒は，教科書の表現を確認しながら（教科書の表現を書き写しながら）教科書内容をリテリングすることになる。ここで，小学校の時に行っていた「簡単な語句や基本的な表現を書き写す」と関連した活動になる。ただし，教科書の表現をそのまま書き写しては教科書内容の説明にならないので，人称代名詞を必要に応じて変えたり，話の流れに応じて接続詞を加えたりする必要がある。また可能な場合は，自分の感想を入れたり，リテリングを聞いている相手に質問を投げかけたりすることもできる。このようにリテリング活動の内容を少しずつ変えることによって，英文内容が変わってくる。この活動を通して，生徒は徐々に自分で考えて英文を作成する活動に移行することができると思われる。

2.4.4 まとめ

原則としては，小学校での学習の流れを中学校でも継承して指導する（口頭練習からしっかり練習させる）ことが重要だと考える。「書くこと」の指導につなげるためには，どれだけ児童生徒にしっかり口頭で練習させ，英語表現に慣れ親しませているかが「書くこと」につなげる最大のポイントだと考える。

2.5 小・中学校の連携を目指した 「話すこと [やり取り]」の指導

東京都千代田区立九段中等教育学校教諭 本多 敏幸

2.5.1 小学校学習指導要領と中学校学習指導要領との関連

新学習指導要領（小学校及び中学校は平成29年3月、高等学校は平成30年3月公示）において、話すことは「やり取り」と「発表」の2つの領域に分かれた。小学校学習指導要領の「話すこと [やり取り]」の目標は以下の3つである。

- ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。
- イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。
- ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。

外国語活動や小学5年生の外国語では、What color do you like?やWhen is your birthday?などの質問や応答をする活動が中心となる。これらを基にして、小学6年生では、児童同士の即興のやり取り（Small Talk）を行い、自分で考えた質問をしたり自分で考えた応答をしたりしながら、伝え合うことを目標にしている。小学校学習指導要領解説には、ウの例として次のやり取りが示されている。

- A : What sports do you like?
- B : I like baseball.
- A : Do you like ~ （野球選手の名前）?
- B : Yes.

中学校学習指導要領の「話すこと [やり取り]」の目標は以下の3つである。

- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。
- イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。

中学校学習指導要領解説には、「やり取りを行う際は、相手の発話に応じることが重要であり、それに関連した質問や意見を述べたりして、互いに協力して対話を継続・発展さ

せなければならない」とある。しかし、これらの目標を達成するのは容易ではない。継続的な指導と豊富な言語活動が不可欠となる。

「話すこと [やり取り]」を指導するにあたり、小学校から中学校へ上がるにつれて高められる（上げられる）ことを、【表現レベル】 【話題】 【内容】 【会話技術】 の4つの項目でまとめると以下となる。

【表現レベル】

小学校では習った表現をそのまま使用することが原則となるが、中学校ではそれに加えて英文を自分で考えて発話することになる。

【話題】

小学校では身近な話題となるが、中学校では、それに加え、共通に聞いたり読んだりしたことを話題として取り上げ、やり取りを行う。

【内容】

小学校では自分や相手のことについての考えや気持ちのやり取りが主であるが、中学校では述べることの情報を整理しながら、事実に加えて考えや気持ちのやり取りを行う。

【会話技術】

小学校では、相づちを打つ、質問をする、自分のことを述べてから相手に質問する、自分の感情や感想を述べる、話題を切り出す、話す順番を相手に渡す、会話を終えるなどの会話技術を使う。中学校では、これらに加え、相手が言ったことを確認する、わからないことについて尋ねる、説明する、自分の言ったことを相手が理解しているか確認する、話題を変える、話す順番を変えるなどの会話技術も使う。

以上のことを踏まえ、本事例では、小学校のウの目標から中学校のアの目標へのつながりについて、上記の4つの項目を踏まえ、生徒が即興のやり取りを行えるようになるために必要な教師の支援と指導を提案する。

2.5.2 実践事例

(1) 本単元と学習指導要領との関連

ア 関心のある事例について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。

(2) 単元について

①単元名

メイの好きなもの (ONE WORLD English Course 1, Lesson 3)

②単元の内容

メイの自己紹介のカードにテニスをすることやテニスラケットがほしいことが書いてあ

る。休み時間及び下校途中にケンタとメイが音楽やペットについて対話を行う。

③単元の目標

- ・自己紹介カードを書くことができる。
- ・一般動詞を使った質問や応答ができる。
- ・小学校で習ったことや教科書で学んだことを基にしながらやり取りを継続できる。

④言語材料

- ・一般動詞の肯定文及び否定文 (例) I play tennis. I don't have a good racket.
- ・一般動詞の疑問文とその応答 (例) Do you like music? —Yes, I do. / No, I don't.
- ・名詞の複数形 (例) I have some hamsters.

⑤本文

<Part 1>

Mei Lee

I play tennis. I'm on the tennis team. But I don't have a good racket. My racket is old. I want a new racket. Thank you.

<Part 2>

Kenta: Do you like music?

Mei: Yes, I do. I play the guitar every day.

Kenta: Really? Do you have a guitar?

Mei: No, I don't. I play my father's guitar.

<Part 3>

Mei: I like animals.

Kenta: Me, too.

Mei: Do you have any pets?

Kenta: Yes. I have some hamsters. How about you?

Mei: I don't have any pets.

(3) 本単元とやり取りの関連について

本単元は3つのパートで構成されているが、パート1は書くこと、パート2と3は「話すこと [やり取り]」の活動につなげられる内容である。文法事項は一般動詞の肯定文、否定文、疑問文であるが、これについてはすでに小学校で学習している。したがって、文法指導に時間を割くのではなく、言語活動を中心とした単元構成とする。本文をやり取りの模範として、どのような会話技術が使われているか生徒に気づかせる指導を行い、それをもとにして実際にやり取り(チャット)を行わせる。1で示した4つの項目と本指導実践との関係は次の通りである。

【表現レベル】自分で英文を考えて発話する(中学校)。表現を多様化させ、小学校よりも豊富なやり取りができるようにする。

【話題】身近な話題について話す(小中共通)。小学校で扱われたと思われる音楽やペットを話題にするが、同じ話題であっても、【表現レベル】【内容】【会話技術】を発展させる。

【内容】事実のやり取りを中心として、感情など他の内容を加える(小中共通)。

【会話技術】相づち（小中共通），話す順番を相手に渡す（小中共通），関連する質問を行う（小中共通）などを扱うが，様々な表現を指導し，使用させる。また，質問に対して応答する際，情報を加えて相手に返していく。

（４）指導計画と指導過程

①指導計画

	ねらい・学習活動
第1時	<ul style="list-style-type: none"> ○パート1のメイの自己紹介を読み，内容を理解する。 ○小学校で学習した一般動詞の肯定文と否定文の確認をする。 ○音読などの活動を通して，本文を正しく言えるようになった後，本文を見本として，自己紹介のカードを書く活動を行う。
第2時	<ul style="list-style-type: none"> ○パート2のケビンとメイの対話文を聞き，内容を理解する。 ○小学校で学習した一般動詞の疑問文と応答文の確認をする。 ○対話文から会話を行うときの大事な点を考える。その後，気付いたところをチャットに取り入れて話す。
第3時 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ○帯活動として，会話を継続することを目標にチャットを行う。（第4時以降も同様に行う） ○パート3のメイとケンタの対話文を聞き，内容を理解する。 ○名詞の複数形及びsomeとanyの使い方を確認する。 ○対話文から会話を行うときの大事な点を考える。その後，気付いたところをチャットに取り入れて話す。
第4時	<ul style="list-style-type: none"> ○パート3の対話文（メイとケンタ）に，自分で考えた英文を加え，スキット発表を行う。 ○パート4のボブとメイの対話文を聞き，内容を理解する。 ○対話文から会話を行うときの大事な点を考える。その後，気付いたところをチャットに取り入れて話す。
第5時	<ul style="list-style-type: none"> ○パート4の対話文（ボブとメイ）に，自分で考えた英文を加え，スキット発表を行う。 ○単元テスト（読むこと）を行う。
第6時	<ul style="list-style-type: none"> ○チャットのパフォーマンスを評価する。（教師の指名した2人を廊下に取り出し，チャットを行わせる） ○教室で待機している生徒は，教科書の英文を自分のことに直して書く活動を行う。

②指導過程（指導計画中の最も重要な指導を行う第3時の授業の指導案）

学習内容	生徒の活動	教師の指導・支援
1 あいさつ	<ul style="list-style-type: none"> ・教師やペアに挨拶をする。 ・教師のsmall talk（好きな音楽について）を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明るい雰囲気をつくる。 ・好きな音楽について生徒に話すことで，チャットにつなげる。

2 帯活動	<ul style="list-style-type: none"> ・好きな音楽についてチャットを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に考えた会話を行う上での大切なこと（情報を加えて応答するなど）を想起させる。 →「(5) 実践の詳細」を参照
3 本文の内容理解	<ul style="list-style-type: none"> (1) 教科書のイラストを見て、2人がどのような対話をしているか推測する。 (2) 本文を聞き、概要を理解する。 (3) 文法について確認する。 (4) 教科書本文を読み、挿絵を参考にして、それぞれの英文を言った理由をペアで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イラストから、対話の話題や内容などを自由に推測させる。 →「(5) 実践の詳細」を参照 ・何について話しているか、2人がペットを飼っているか確認させる。 ・名詞の複数形, someとanyの使い方について確認する。 ・生徒の気付きを大切にする。 →「(5) 実践の詳細」を参照
4 音読	<p>教師の指示に従って、音読練習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 教師の音読を真似て復唱する。 (2) 自力で正しく音読できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒全員が正しく音読できるようにする。コーラル・リーディングでは、教師のモデルを真似て復唱させる。その際、個々の生徒の発音を確認する。その後、バズ・リーディングでは、音読が苦手な生徒の支援を行う。
5 チャット	<ul style="list-style-type: none"> (1) チャットを行う際の目標を確認する。 (2) チャットを行う（ICレコーダーに録音する） (3) ICレコーダーを聞き、振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校で学習し、本文で使用されているMe, too.に関連して、Me, neither.を指導する。また、How about you?を使うときの留意点を確認する。 ・生徒の活動を観察する。 ・「2文以上の応答」「相づち」「How about you?やMe, too[neither].の使用」などについて、自己評価を行わせる。
6 まとめ	<ul style="list-style-type: none"> (1) 教科書本文を再度音読する。 (2) 課題の確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書全文のモデル音読をした後、感情を込めて音読させる。 ・次の授業で、①ペットの話題で再びチャットを行う、②対話文に自分で考えた英文を加えてスキットをすることを予告する。

(5) 実践の詳細

①「1 帯活動」の指導

今回のチャットの話題は「音楽」である。まず、どのような種類の音楽があり、英語で何と言うのかをteacher talkに入れ込んだ。そして、発話のモデルとして教師自身のことについて紹介をした。その後、生徒とのやり取りを通して、音楽の話題でよく行う質問文を引き出した。さらに、応答する際に2文で発話するように指示した。これまでであれば、相手の質問に対して1文で応答させることが多かったが、これからは関連する情報を考えて相手に返す指導が重要になる。

T: Do you like music? What kind of music do you like? Japanese pop music, American pop music, Korean pop music, rock music, classical music, dance music, or jazz? I love music and I like Japanese pop music and rock music. My favorite music group is *Ikimonogakari*.

Their music is fantastic. Does your partner like music? Let's have a chat about music. What questions can you ask? For example, "Do you like music?" And?

S: What kind of music do you like? [Who is your favorite singer? / Can you play the piano?]

T: You can ask some questions. Last time, you learned how to answer the question. Kenta says, "Do you like music?" and Mei answers, "Yes, I do." And?

Ss: I play the guitar every day.

T: Right. Mei answers with two sentences. Try to answer with two sentences. Now let's have a chat with your partner. Enjoy talking. Start.

②「3 本文の内容理解」における生徒の発話の例

○3-(1) イラストを見て、対話の話題や内容を推測する活動

中学校の教科書には掲載されているイラストが場面や状況を表していることが多い。このパートでは、イラストからメイとケンタが下校途中に対話していることがわかる。また、前から犬を連れて女性が来ることから、対話の話題が動物（犬）であることが推察できる。また、ハムスターの写真があることから、ハムスターの話題が出ることが推察できる。そこで、生徒から次のことを引き出したいと考えた。

- ・動物について話している（話題）
- ・ペットについて話している（話題）
- ・犬が好き（内容）
- ・犬はかわいい（内容）
- ・ハムスターを飼っている（内容）
- ・ハムスターを飼いたい（内容）

○3-(4) それぞれの英文を言った理由を考える活動

個々の発話には必ずその目的や機能がある。このことについて考えさせることで、生徒自身がやり取りを行うときの参考にできると考えた。

- ・犬を見て、I like animals.と話題を切り出した。
- ・Me, too.と言ったので、Do you have any pets?と質問した。

・相手からペットを飼っているか聞かれ、Yes.と答えたので、飼っているペットを伝えるために、I have some hamsters.の文を加えて言った。

これまでは、英文の意味のみを理解させる指導が多かったが、これからは発話の目的や機能も考えさせる指導が重要である。

③「5 チャット」の指導

このチャットでは、本文の話題である動物やペットについて、本文で使用されている表現を活用させることも目標の1つである。Me, too.という表現が本文で使用されている。生徒のチャットでは、よく使われる表現である。しかし、否定文に対してもMe, too.を使うことから、Me, neither.も指導した。

T: Let's have a chat again. The topic is about animals or pets. You just learned "Me, too." I'll teach you another phrase "Me, neither." (Write "Me, too." and "Me, neither." on the board.) When you say, "I like dogs," I say "Me, too." "Me, too." means "I like dogs, too." When you say, "I don't like snakes," I say "Me, neither." "Me, neither." means "I don't like snakes, either." Let's practice. Please say "Me, too." or "Me, neither." I like Japanese food.

Ss: Me, too.

T: I don't have a bus.

Ss: Me, neither.

T: I don't go to America every week.

Ss: Me, neither.

T: And use "How about you?" like this. I like dogs. How about you? I have a cat. How about you?

2.5.3 考察

教科書の対話文は、生徒にとってやり取りの良い教材となる。内容理解を行う際、意味を理解するだけでなく、どのような意図や目的があって発話が行われたのか、会話を続けるためにどのような表現や会話技術が使われているのかも生徒に気づかせる指導が大切であると考えている。教科書にはイラストが載せられており、これが話題を切り出す理由を示していることもある。今回の授業でも、犬を連れた女性が前から歩いて来ることから、I like animals.と話題を切り出し、話し相手がMe, too.と応答したことから、Do you have any pets?と対話を発展させているということに気づかせた。

文法事項（一般動詞の肯定文、否定文、疑問文）については小学校の学習事項となっているが、文構造が十分に理解できていない生徒がいるため、整理させる必要がある。疑問文はやり取りを行う上でとても重要である。問題集などで理解させるだけではなく、口頭でも十分に練習し、即興で使えるようにさせたい。

生徒はDo you like ~?などの小学校でよく使ったと思われる疑問文については定着しているが、他の動詞、特に新出の動詞を使った疑問文を発話するには時間がかかる。チャットなどの言語活動を通して意識的に使うように促すことで徐々に定着させたい。

生徒の発話を観察すると、冠詞の抜けや名詞の数の誤りが多くあった。これらについてはI Cレコーダーで自分の発話を確認させることで、次回に同じような英文を使うときに

誤りが減ることを期待している。

2.5.4 「話すこと [やり取り] 」の力を高めるための指導

小学校におけるSmall Talkの活動により、小学校卒業時において、ほとんどの児童が2ターン程度のやり取りはできるようになっている。しかし、使用する表現や対話内容は十分に練習したこと限定されている。自分で発話内容を考え、英文を正しく組み立てて発話することについては中学における指導事項である。やり取りを成立させるために指導しなければならない主な項目は以下の5点であると考えられる。

- ① 相手の質問に対し、自発的に情報を加えて返す
- ② 相手が言ったことに関連する質問を行う
- ③ 基本的な会話技術や会話表現を使用する
- ④ どんな話題（少なくとも身近な話題）でも何かしら言えるネタをもっている
- ⑤ 相手のことを考えて発話する（話題や伝える内容の選択、英語の難易度、など）

それでは、それぞれの項目の中学校における指導方法や言語活動の例を紹介したい。

① 相手の質問に対し、自発的に情報を加えて返す

相手の求める情報のみの応答を続けると、インタビューのように2人のうちの一方が質問を行い、他方がそれに答えるようなやり取りになってしまう。対話のキャッチボールになるように、生徒には質問に対して関連する情報を加えて相手に返すことを習慣化させたい。そこで、帯活動の中で、生徒同士のQ&A活動を行わせる際、答える側は2文以上で応答させる。この活動を続けることにより、応答する際には関連する情報を加えることが自然にできるようになる。

<活動の手順>

0. 20文から40文の質問文を載せたワークシートを作成する（「資料1」参照）。様々な話題を載せるとよい。情報を加えて応答する活動であるので、2文目が言いやすい質問文を考えて載せるようにする。質問文は中学1年生から2年生では身近な話題、中学3年生では社会的な話題を加えるとよい（「資料2」参照）。中学1年生用のワークシートには応答例（Answer）を載せるが、上級学年では応答例は載せない（生徒の状況によっては載せてもよい）。
1. ワークシートを配布し、質問（Question）を復唱させる。
2. 生徒の状況によって、教師が応答（Answer）のモデル文（2文）を生徒に聞かせ、発話をする際のヒントを与える。ただし、できれば教師が示した例とは違う表現を使って応答するように促す。
3. No. 1からNo. 10を行わせる。
4. 2回目からは1回目と違うパートナーとなるようにする（3回目以降も毎回替える）。パートナーを毎回替えることで、新鮮な気持ちで行える、良い表現をパートナーから学ぶなどの効果がある。
5. No. 6からNo. 15のように前回行った範囲の半分に新しい範囲を加えとよい。前回と同じ質問に回答することで、前回よりも上手に言えるようになるのと、新しい質問を入れることで新鮮な気持ちで活動を行わせることができる。
6. すべての質問文が終了したら、2分間程度の時間設定をして、順番にできるところま

を進めたり、アトランダムに質問文を選ばせ質問させたりなど、生徒が応答文を言えるようになるまで活動が続ける。

<資料1>

中学1年生対象（7月頃）のワークシート例

Enjoy English

— Questions and Answers 1 —

答える側はこのプリントを見てはいけません。

	Question	Answer
01	Are you from Hokkaido?	Yes, I am . I'm from Sapporo.
02	Do you like baseball?	Yes, I do . My favorite team is the Giants.
03	What's your favorite subject?	I like English . It's a lot of fun.
04	Do you come to school by bus?	Yes, I do . My house is in Shinjuku City.
05	Do you read a book every day?	No, I don't . But I like reading.
06	What's your favorite color?	It's blue . I like the color of the sky.

<資料2>

中学3年生対象のワークシート

Enjoy English

— Questions and Answers for Telling Reasons —

	Question
01	Do you think it's important for us to study foreign language at school?
02	Where is the best place for our school trip?
03	Do you think many people will live with a robot in the future?
04	Do you think Tokyo is a good city?
05	Do you think Japanese culture will become more popular outside Japan?
06	Which is better, eating school lunch or bringing a boxed lunch from home?

② 相手が言ったことに関連する質問を行う

①から⑤の5つの点の中で、生徒が特に苦手になっていることは、②の、質問を行うこと

であろう。令和元年度全国学力・学習状況調査の「話すこと」の調査の中に、情報や考えなどを即座にやり取りしたり、相手の発話の内容を踏まえて、それに関連した質問や意見を述べたりして、会話を継続させていくことができるかどうかを把握するための大問が設けられていた。これは、外国人の教師であるアラン先生が家族の写真をユイコに見せながら、簡単なやり取り（「資料3」参照）をした後、アラン先生からDo you have any other questions about them?と尋ねられ、適切な質問をコンピューターに録音するという問題であった。やり取りを踏まえた内容で適切に質問ができた生徒の反応率（正解とみなされた率）の合計が10.5%であったことから、質問を行うことに慣れていなかったことが推測できる。また、正確な英語で解答できた生徒が全体の8.4%であったことから、即興で正しい英文を組み立てる力が不十分であった。

<資料3>

アラン先生：Look at this picture of my family. This is my favorite picture.

ユイコ：Nice! Who is she?

アラン先生：Oh, she is my mother Nancy. And he is my brother, Tom. He can cook very well.

ユイコ：I see. What kind of work does your mother do?

アラン先生：She is a teacher.

Do you have any questions about them?

正答率の低い原因の1つに生徒が質問をする機会が少ないことが挙げられる。授業を拝見すると、教師が生徒に質問をすることはよくあるが、生徒が自分自身で考えた質問をする機会はほとんどない。そこで、教科書の本文の内容について質問文を作らせ、生徒同士で質疑応答を行わせるなどの活動を意識的に取り入れたい。また、チャットを行う際、話題に応じて適切な質問ができるように、チャット後の振り返りにおいて、自分が言った質問文、及び言った方がよかった質問文を書かせるなどの工夫を行いたい。質問しようとした内容の疑問文が分からないときには日本語で書いておき、教師が適宜、クラス全員に教えることで、生徒が使うことのできる質問文のバリエーションが増えていく。

③ 基本的な会話技術や会話表現を使用する

やり取りを行う際には会話技術や特有の会話表現を使う。例えば、日本語でやり取りを行う際、言葉（単語）が浮かばない際には「えーと」と言って間を埋めたり、別の単語で代用したり、その単語を説明したりしているはずである。英語のやり取りにおいても基本的な会話技術や会話表現を指導することで、自然なやり取りができるようになる。

チャットなどのやり取りを帯活動で行わせる際、会話技術や表現の中から1つを選び、指導するとよい。一度に多くのことを教えても活動の中で使用できない可能性があるため、1つのことに絞って、意識して使わせるとよい。指導したい基本的な項目を以下に紹介する。

チャットにおける指導項目の例

<態度に関わる項目>

- ・相手と視線を合わせる
- ・会話時間を考え、会話を共有する（一方的に話さないで相手にターンを渡す）
- ・質疑応答になるのを避ける（一方が質問し、他方が答えるだけにしない）
- ・情報を加えて応答する
- ・協力する（協力して会話を継続させるという意識をもつ）
- ・話題をすぐに変えない

<基本的な会話技術>

- ・フィラー (fillers) を使って間を埋める 例：Um. Well. Let me see.
- ・相づち (rejoinders) を打つ 例：Uh-huh. Right. I agree. Really? That's too bad.
- ・質問をする 例：What else did you do? What is it like? Why do you think so?
- ・自分のことを述べてから相手に質問する 例：I have a dog. How about you?
- ・相手の言ったことを確認する 例：Oh, you want a dog.
- ・自分の感情や感想を述べる 例：I think it is very important.
- ・説明する 例：It's a kind of bird.
- ・発話内容が相手に理解されているか確認する 例：Do you understand what I said?
- ・話題を切り出す 例：Look at this picture.
- ・話題を変える 例：By the way, ~.
- ・話す順番を得る 例：Me, too. I ~.
- ・話す順番を相手に渡す 例：How about you, B?
- ・会話を終える 例：See you at school.

<その他>

- ・ジェスチャー
- ・顔の表情

④ どんな話題（少なくとも身近な話題）でも何かしら言えるネタをもっている

やり取りが止まってしまう原因はいくつかある。話すことがなくなってしまうたり、語彙力や文法力が不足していて表現できなかつたりなどである。興味のある話題や話すことに慣れている話題については何かしら言えても、話題についての知識がなかったり考えたことがなかったりすると途端に発話がなくなる傾向がある。そこで、少なくとも身近な話題については、どんな話題であっても、やり取りが続けられるようにしておきたい。

①で紹介したQ&Aのワークシートには様々な話題を散りばめるようにしている。そうすることにより、何かしら言えるようにさせていく。どんな話題でも2～3文くらい言えるようになれば無言になることはまずない。教科書の題材やその他の題材に触れさせた後で、感想を伝え合うなどの言語活動を積極的に取り入れたい。

⑤ 相手のことを考えて発話する（話題や伝える内容の選択、英語の難易度、など）

やり取りは相手がいて成立する。相手のことを考えながらやり取りを行う態度を初めから育てていきたい。たとえば相手が間違っただけを言ったとしても馬鹿にしないなど、相

手に敬意を払いながらやり取りを行うことを頻繁に指導することが重要である。

英語力がついてきたら、相手によって話題を選んだり、伝える内容を選んだり、英語の難易度などにも留意しながらやり取りを行うように指導する。例えば、共通の話題を切り出したり、相手に話す順番を渡したりなどを意識してやり取りを行わせる。

2.5.5 まとめ

話すことのやり取りは、継続的に時間をかけて指導していかなければ上達しない。3年間の計画及び年間計画において、いつ何を指導していくのかを計画するとともに、教材研究において授業のどこでやり取りを行わせることができるのかを考えることも重要である。

今回の単元計画では、斬新なアイデアは入っていないかもしれないが、日々の授業でできるちょっとした工夫を取り入れてみた。今後の課題として、社会的な話題においても自分の意見や考えをしっかりと述べられること、より自然なやり取りができるようにすることなどが挙げられる。中学3年生のゴール設定をこれまでよりも高くし、達成できるようにしたい。

2.6 文・文構造・文法事項の学習内容と学習方法とを小・中学校で滑らかに連携させるための指導

広島大学大学院人間社会科学研究科准教授 榎葉みつ子

2.6.1 はじめに

小学校への外国語科の導入によって、小学校で英語の文及び文構造が指導されることになった。また、中学校では、文法事項に新たに現在完了進行形や仮定法が加わるなど、文・文構造・文法事項に関する指導内容が増えている。中学校の授業時数はこれまでと変わっておらず、その中でこのように高度化した目標を達成するためには、文・文構造・文法事項の指導に関しても、小・中学校での連携が重要になってくる。

本節では、まず、学習指導要領に示された学習内容と学習方法を、それぞれ小学校と中学校とで比較し、共通することや相違点を整理する。その上で、小・中学校の間で段差が生じるところを指摘し、その段差を解消するための留意点や指導法について述べる。

2.6.2 小・中学校の間での段差をなくすには

(1) 小・中学校での学習内容と学習方法

学校段階ごとの学習内容や学習方法を把握しておくために、学習指導要領から該当する項目を抜き出し、それぞれを学校種別にまとめた。次ページの表1は、学習内容を小学校の「文及び文構造」と中学校の「文、文構造及び文法事項」から、簡略化して示したものである。表2には、学習方法として、「内容の取扱い」の中から、文・文構造・文法事項の扱いに関する項目を示した。

まず、表1の学習内容を小・中で比べてみると、中学校ではコミュニケーションを支えるための文法の知識及び技能の充実ぶりが顕著である。小学校で学習した文及び文構造に加えて、中学校では重文と複文、[主語+動詞+間接目的語+直接目的語] [主語+動詞+目的語+補語]等の文構造など、多くの知識を学ぶからである。

また、中学校では新たに文法事項を学習することから、文や文構造に関するものも含めて、文法用語というメタ言語が使えるようになるという特徴も見出せる。小学校では文及び文構造を「表現」として、かたまりで学習するが、中学校では文法知識を用いて文を分析的に学習する。そのため、中学校では、文法知識を活用して多くの英文を理解したり産出したりすることができるようになっていく。このことは小・中学校における大きな違いの1つである。

さらに、中学校学習指導要領では「小学校の外国語科で扱われている『文及び文構造』についても引き続き別の場面や異なる表現の中で活用できるように指導する」とされていて、小学校での既習事項を中学校でどのように活かすのかという重要な課題と捉えることができる。

	小学校	中学校
文	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単文 ・ 疑問文 (be動詞, can, do, who, what, when, where, why, how) ・ 基本的な表現として, 代名詞のうち, I, you, he, sheなどの基本的なものを含む文, 動名詞や過去形のうち, 活用頻度の高い基本的なものを含む文 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 重文, 複文 ・ 疑問文 (may, will, which, whose) ・ 感嘆文 ・ 代名詞, 動名詞, 過去形は文法事項
文構造	<ul style="list-style-type: none"> ・ [主語 + 動詞 + 補語] 主語 + be動詞 + {名詞 / 代名詞 / 形容詞} ・ [主語 + 動詞 + 目的語] 主語 + 動詞 + {名詞 / 代名詞} 	<ul style="list-style-type: none"> ・ [主語 + 動詞 + 補語] 主語 + be動詞以外の動詞 + {名詞 / 形容詞} ・ [主語 + 動詞 + 目的語] 主語 + 動詞 + {動名詞 / to不定詞 / how (など) to不定詞}, 主語 + 動詞 + {thatで始まる節 / whatなどで始まる節} ・ [主語 + 動詞 + 間接目的語 + 直接目的語] ・ [主語 + 動詞 + 目的語 + 補語] ・ その他 (a) There + be動詞 + ~, (b) It + be動詞 + ~ (+ for ~) + to不定詞, (c) 主語 + tell, want など + 目的語 + to不定詞, (d) 主語 + be動詞 + 形容詞 + thatで始まる節
文法事項	(小学校では扱わない)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 代名詞, 接続詞, 助動詞, 前置詞, 動詞の時制及び相など, 形容詞や副詞を用いた比較表現, to不定詞, 動名詞, 現在分詞や過去分詞の形容詞としての用法, 受け身, 仮定法のうち基本的なもの

表1 小・中学校での学習内容

次に, 次ページの表2で小・中学校の学習方法を比べてみる。表現のしかたに違いはあるものの, 小・中学校に共通することは, 文法用語や用法を中心とするのではなく, 言語活動で活用するための知識として文・文構造・文法事項を学ぶとされていることである。また, 小・中学校を通して, 気づきによる規則性の学習が求められている。さらに, 文法知識をばらばらにではなく, 関連付けて深く学ぶことについても同様である。

小・中学校での大きな違いであるために、生徒に困難が伴うのは、やはり中学校で体系的に文法を学ぶことであろう。指導によっては、文法が難しいもの、役に立たないものと受け取られかねない。コミュニケーションの目的を達成するために必要かつ有用だと実感させることが大事だとされているが、どのように指導するかは重要な課題だと言える。

小学校	(ア) 児童が日本語と英語との語順等の違いや、関連のある文や文構造のまとまりを認識できるようにするために、効果的な指導ができるよう工夫すること。
	(イ) 文法の用語や用法の指導に偏ることがないように配慮して、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。
中学校	(ア) 英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとめて整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること。
	(イ) 文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションの目的を達成する上での必要性や有用性を実感させた上でその知識を活用させたり、繰り返し使用することで当該文法事項の規則性や構造などについて気付きを促したりするなど、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。
	(ウ) 用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し、実際に活用できるようにするとともに、語彙や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること。

表2 小・中学校での内容（文・文構造・文法事項）の取扱い

(2) 小中で滑らかに連携すべき事柄

学習内容と学習方法に関する比較から、小・中接続期に特に段差が生じやすいため注意すべきだと考えられるのは、次の2点である。

① 場面固有の「表現」から、多様な場面で活用できる文構造の知識及び技能へ

小学生は、経験した言語活動の場面と共に英文をまるごと「表現」として覚えている。しかし、中学生は、それまでに学んだ英文を、特定の場面での決まった表現としてではなく文構造という観点から捉えなおし、その文構造を言葉の働き等の観点から一般化して、他の場面でも使えるようになることが求められる。例えば小学校では、I enjoyed swimming.を夏休みの思い出を伝え合う場面での「水泳を楽しんだ」という意味の英文として学習するが、中学校では、その英文を分析して、「主語+動詞+目的語（動名詞）」の文構造や、enjoyの目的語としての動名詞という文法事項として、また、事実や気持ちを伝える表現としても認識ができるようにしなくてはならない。接続期には、中学校の文法指導における小学校の既習事項の活用、役立つものとしての文法用語の導入、英文を分析的に見る指導や別の場面で活用できるようにする指導といった対応が必要であろう。

② 文法規則への「気づき」から文法事項・文構造の指導へ

小学校では、文法規則への「気づき」を重視して、文脈の中で英語に触れさせながら、英文を小さなチャンクに分けたり、英語の語順を認識したりすることができるようにする

指導が行われる。文法を直接的な指導の対象としない小学校とは異なり、中学校では、文法用語を用いて文法規則を分析的に理解させたり、活用させたりする指導が行われる傾向がある。小学校で児童が身に付けた、言語を対象化して分析的に見る態度や帰納的な学習方法を基盤に、体系的な文法事項・文構造の知識を活用する中学校での学習方法にうまく発展させるため、鍵となるのは文法の有用感を実感させることではないだろうか。言語活動と関連付けた形で文法の有用性を感じさせるような指導の在り方が問われる。

2.6.3 中学校における指導（1）

中学校に入学して間もない頃の1年生を対象とした「自己紹介」の実践例を提案する。はじめに基本的な考え方を述べ、現在の教科書教材を使用する際に注意すべきことを踏まえた、小・中の接続期にふさわしい実践例を紹介する。

（1）接続期に中学校で留意すべき事柄

① 小学校の「文及び文構造」を活用できるようにする指導

特定の場面で使う「表現」として学んだ英文を活用できるようにするためには、言葉の機能に注意させて、違う場面でその英文を活用させることが重要である。また、文構造という観点から英文を分析して、その規則をあてはめて他の英文の意味を理解したり、自分が表現したい英文を産出させたりすることも必要である。

② 文法知識の有用性を実感させる指導

文法の知識があれば、規則に則って無限の英文を産出することができる。また、難解に見える英文も、文法の知識を用いてかみ砕き、その意味を理解することができる。文法の知識が英文の理解にも産出にも非常に有用であることは言うまでもない。しかし、規則や文法用語の暗記と問題演習に偏った授業では、生徒が文法知識を活用できるようにはならないだけでなく、英語学習への意欲にも影響する。生徒が文法の有用性を実感できるように、中学校全般を通じて、コミュニケーションの中で文法を学ばせたり、コミュニケーションのために活用させたりしなくてはならない。小学校での学習方法との段差をなくすために、中学校においては、文法知識のおかげでコミュニケーションの目的が達成されたという有用感が味わえるように工夫しなければならない。

③ 移行期にふさわしい言語活動の実施

移行期は、学習内容に無理や無駄が生じないように教育課程を慎重に編成することが求められる。特に2020年度は、小学校5・6年で教科として英語を学んできた中学校1年生が、旧教育課程の教科書を用いて学習する移行期最後の年である。生徒の立場からすると、中1の教科書の内容は、小学校で経験したり学んだりしてきた内容との重複が多いと感じられることであろう。言語活動の扱い方についても、学習履歴を活かし、かつ、重複による無駄をなくすために、中学校1年の教材をそれまでの見方とは異なった観点から見直し、適切な目標設定をした上で、内容を修正するなど、大きく扱いを変える必要がある。指導要領改訂の主旨に従って、コミュニケーションの目的・場面・状況から判断し表現するような、思考を伴う言語活動に変えていかななくてはならない。

(2) 移行期における現行の教科書教材の活用

「自己紹介」という話題はWe Can 1, 2で何度か扱われる上に、現行の中1の教科書すべてで扱われているため、生徒が頻繁に出会うことになる話題である。移行期は同じ話題が小中で繰り返し取り扱われることが予想されるが、自己紹介はその代表である。同じことの繰り返しという無駄をなくし、適切な目標設定をするために、現在使われている教科書（採択率上位の3点）について、活動手順とモデル文の特徴をみてみよう。

	New Horizon 1 (東京書籍)	Sunshine 1 (開隆堂)	New Crown 1 (三省堂)
単元名	Presentation 1 自己紹介 (pp.54,55)	My Project 1 自分のことを話そう (pp.44-47)	Project 1 自己紹介をしよう (pp.46,47)
モデル文	<p>①Hello. I'm Ikeda Shin. My favorite subject is English. I don't like math, but I study it every day.</p> <p>②My name is Kudo Kana. I like volleyball. I'm on the volleyball team. I practice it very hard.</p>	<p>①Hello, everyone. I'm Sato Jun. I'm a student at Nishi Junior High School. I'm from Midori-cho. (What club are you in?) I'm in the <i>shogi</i> club. I like <i>shogi</i>. I have a little dog. Thank you.</p> <p>②Hi, class. I'm Ito Emi. I'm a Higashi Junior High School student. I'm twelve years old. I live in Chuo-cho. I have two cats. (What sport do you like?) I like volleyball. I'm on the volleyball team. Thank you.</p>	<p>I am Lucy Brown. I am from London. I like music. I play the guitar. I like karaoke too. Do you like music?</p>
活動手順	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2人のモデル文を読んで内容を理解する ・ 自己紹介で取り上げた話題を選ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2人のスピーチを聞いて、どんなことについて話していたかを確認する ・ 今までに学習した表現を自分のことを話す表現にする 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブラウン先生の自己紹介を読んでわかったことをメモする ・ 自己紹介のあとのみんなからの質問を聞いて、話題とわかったことをメモする

<ul style="list-style-type: none"> ・①自分の名前 ②選んだ話題 ③さらに一言の文章構成に従って、原稿を作る ・発表して質問し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・話したいことと順番を決めて書く準備をする ・準備した内容を基に、原稿を書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の自己紹介のために話題と伝えたいことを整理する ・メモを基に原稿を書く
--	---	---

表3 中学校教科書における「自己紹介」の扱い

活動の手順は、大きく分けて3段階である。①モデル文と出会う、②モデル文を参考にして自分の自己紹介の準備をする、③原稿を書いて発表する、の順に展開される。教科書の指示に従って活動すると、コミュニケーションの目的・場面・状況を考えることなく、モデル文をただ真似て原稿を書くこととなる。

さらに、生徒は小学校でWe Can 1, 2を用いて、次のような自己紹介を経験している。

We Can 1 Unit 1 Hello, everyone. (自己紹介)

Hi, my name is Saki.
I like dogs.
I want a dog.
Thank you.

*Unit 1の活動内容を基に筆者作成

We Can 2 Unit 1 This is ME! (自己紹介)

Hello.
I'm Yuta.
I like dogs.
I like math.
I like soccer.
I can run fast.
My birthday is May 16.
Thank you.

We Can 1, 2の自己紹介では、理解した英語の一部を置き換えて自分のことを伝える活動を行っている。現行の中学校教科書の「自己紹介」でも同様の内容と手順が示されていて、小中でかなりの重複が見られる。中学校で同じ話題を扱う場合は、単なる繰り返しとにならないように、小・中の接続期に適した目標設定を行った上で、活動内容や学習方法も見直さなくてはならない。

(3) 実践例 (中学校の書く活動における文構造の指導)

モデル文をただ真似たり、ガイドに従って表現したりするのではなく、思考・判断を伴う言語活動にするために、まず、何のためにどのような自己紹介をするのかという目的や

場面を明示する。その上で、わかりやすいスピーチにするという目標を設定した実践例を提案する。

言語活動の中でも、書く活動では話す活動以上に正確さが求められる。また、紙面に残るため、産出英文を見直すことが可能でもある。そのため、書く活動は文法指導との関連を持たせやすい。書くことが導入されたばかりの現段階では、小学校の児童は、英文の書き写しや、モデル文を一部変えて書くという学習経験は積むものの、自在に英文を産出したり、英文の正確さを判断したりできるようになっている訳ではない。しかし、ある程度の経験や知識が蓄積されている中学校段階になると、既習の知識を整理する学習が必要であり、その学習を通じてメタ言語としての文法用語や文法規則の知識を得ることは、その後の文法知識及び技能の発展の契機となるものである。

本事例は、中学校入学時の学級開きの一環として、教室に掲示するという目的で、英語で簡単な自己紹介を書く活動として設定した。その活動を通じて、小学校で学習した文構造を振り返って、「主語＋動詞＋補語」「主語＋動詞＋目的語」の文構造や「be動詞」「一般動詞」等を学ばせ、それらを用いて自由に英文を書かせたり、書かれた英文の正確さを判断させたりする。自己モニターによってbe動詞と一般動詞が区別できて、作文を直せるようになることは、書く力がつくだけでなく、文法の有用感を実感することになり、文法の学習を好きにさせる効果もある。

【目標】

- ① 正しい語順で自分のことを書く。
- ② 日常的な場面で、目的に応じた紹介文を書く。
- ③ 読み手が理解できるように、わかりやすく書く。

【指導計画】

主な学習活動	教師の指導・支援
<p>①本単元の活動内容と目標を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しいクラスに早く馴染むために、自己紹介を教室に掲示することを知らせる ・だれに、何のために、どんな自己紹介をするのかを整理する 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級活動として言語活動の意義づけをする ・目的・場面・状況から、どんな内容がいいのかを判断させる
<p>②内容を考えて口頭で発表してみる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝えたいことのメモを作る ・メモを基にペアで発表しあう 	<ul style="list-style-type: none"> ・まず内容、次に表現形式についてペアで助言させる
<p>③自己紹介を書く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モデル文を読んで参考にできる点を見つける ・使いたい英語を調べたり尋ねたりする ・準備したことを基に英文を書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・モデル文を、内容・構成・表現といった観点から分析させる

<p>④書いた英文を文構造の知識を用いて修正する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語順についての既習知識を整理する ・「主語＋動詞＋目的語」「主語＋動詞＋補語」の文構造を知る ・動詞にbe動詞と一般動詞という区別があることを知る ・文構造の知識を使って英語で表現する練習をする ・文構造の知識を用いて英文を修正する 	<p>⑤完成した自己紹介を読み合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の中で文法の有用性を実感させる (指導手順・支援のしかたについては、以下に詳述)
--	---

【文構造の知識を用いて英文を修正させる指導】

指導計画では「④書いた英文を文構造の知識を用いて修正する」段階が、本実践例の中心であるため、その手順を説明する。

① 語順についての既習知識を整理する

小学校で既習の英文“I like music.”などの例を挙げて、「主語＋動詞＋～」という語順になっているという英語の特徴を思い出させる。

② 「主語＋動詞＋目的語」「主語＋動詞＋補語」の文構造を知る

モデル文の“I am Lucy Brown”を例に取り、この英文も「主語＋動詞＋～」という語順になっていることを示し、2つの例文は「主語」「動詞」、「なに、だれ」の順番になっているとまとめる。

注：「主語＋動詞＋目的語」と「主語＋動詞＋補語」の2つの文構造を扱ってはいるが、「語順」の気づきを「文構造」に発展させる段階であるため、目的語と補語という文法用語や、文構造の違いについては、ここではまだ触れない。

③ 動詞にbe動詞と一般動詞という区別があることを知る

「～です」という意味の動詞と「～する」という意味の動詞は区別し、それぞれbe動詞、一般動詞という名称で呼ばれることを板書にまとめる。

注：be動詞を深く理解することはできない段階なので、ここでは「～です」という説明にとどめる。

[板書]

＜語 順＞			＜英文の構造＞		
だれが	する (です)	なに・だれ	S (主語)	V (動詞)	なに・だれ
I <u>like</u> music.			一般動詞		
I <u>am</u> Lucy Brown.			be動詞 (am,is,are)		
			<u>*動詞はひとつ</u>		

④ 文構造の知識を使って英文を作る

＜活動1＞

T : Let's make English sentences using this rule. (We Can 2の巻末資料Word List (動作)を印刷したプリントを配布し, その中の1枚, 水を飲んでいるイラストを指して) Who does what? Let's start with the subject, I.

S : (「S+V+なに・だれ」の英文の構造に当てはめて) I drink water.

T : OK. I drink water. (部屋の掃除をしているイラストを指して) How about this?

S : I clean room.

T : OK. I clean the room.

Next, let's talk in pairs and make English sentences using this rule.

この後は, ペアで考えて作った英文を発表させたり, みんなでその日本語の意味を考えさせたりする。

＜活動2＞

T : Next let's try to put Japanese into English. What do you want to say in English?

S : 好きなユーチューバー。

T : All right. Your favorite YouTuber.

S : I like YouTuber ….

T : Start with the subject, my favorite YouTuber.

S : My favorite YouTuber … Hikakin.

T : My favorite YouTuber Hikakin? Um…, something is missing.

S : My favorite YouTuberが主語で, あ, 動詞, is ?

T : That's right. You need a be verb, IS. My favorite YouTuber is Hikakin.

S : Ha! My favorite YouTuber is Hikakin!

以下同様に, ルールに当てはめて, 生徒が英語で表現したいものを英文にする練習をさせる。

⑤ 文構造の知識を用いて英文を修正する

自己紹介の作品例

Hello. I am Rintaro Nakamura.
Please call me Rin.*
I am from Fuji Elementary School.*
I like baseball. My hero Suzuki Seiya.
I want to join the baseball team.*

*未習の英文(*付)は、表現として教える

中学校に入学したばかりの頃の自己紹介には必然性があるため、ふさわしい内容を考えてやすい。上記の作品例では、同級生が興味をもち、自分でも伝えておきたいこととして、愛称、出身小学校、入りたい部活動という内容が含まれている。しかし、どう表現したらいいかを自分で調べたり、質問したりして、それらの項目を盛り込んだ自己紹介が書けたものの、下線部の英文にbe動詞の脱落という誤りが見られる。そこで、仕上げの段階で、いったん書いた英文を読み手にとってわかりやすいかという視点でモニターし、文構造の知識を活用して、読み手が理解できる正確な英文に書き直す時間を設ける。それまでの段階での学習の成果として、書き手自身が次のように誤りを訂正できると期待される。

S：(文構造の知識を用いて誤りが無いか調べている) 主語はMy hero, 動詞は、動詞？
My hero … is… Ah! My hero IS Suzuki Seiya!

be動詞は特に間違いやすいが、言ったり書いたりするだけではそのことに気づきにくい。だが、文構造の知識を用いて見直しをすると自分で誤りに気づき、だれにも理解される英文に修正できるため、正確な英文を書く助けとなる文法知識の有用性を実感できる段階である。

目的・場面・状況にあった自己紹介はこの例に限らない。小学校で学んだ表現を活用しての次のような自己紹介も、思考や判断を経て表現したものであるならば、自分の個性を伝えるという目的に合致したものと見なすことができる。

(好きな動物の話) I like dogs. I have a small dog. I want a big dog.

(好きな料理の話) I like cooking. I make pancake on Sunday.

2.6.4 中学校における指導(2)

小学校で学んだ表現を場面に応じて活用できるようにすることも、小・中で連携すべき重要な事柄である。小・中接続期以降の適切な時期に、次のような指導を順次加えていきたい。

(1) 特定の場面と結びついた表現を別の場面で使えるようにする指導

自己紹介で用いた表現を、後日、別のものを紹介する場面で活用させる。例えば「学校紹介」という活動の中で、自己紹介で馴染んだ、I am twelve **years old**. I **have** a sister. などの表現は、別の場面では「創立〇年」や「在籍生徒数」なども表せることを、英文を

読んだり書いたりして学習させる。

学校紹介

Ikeda Junior High School is seventy **years old**.

We have 300 students in our school.

(2) 場面にふさわしい文構造・文法事項を使えるようにする指導

I want to …は、依頼の機能も果たす表現であるが、直截的であるため場面や相手によっては、I'd like to…を使う方がいいことは、これまでに中学校段階でも指導されてきた。しかし、多様な表現からより適切なものを場面に応じて選択することまでの指導はあまりなされていない。

目的・場面・状況に応じて、適切に表現することができるとは、同じ機能を果たす多様な表現を知っていること、その中から、ふさわしい表現を選択できることである。例えば、次の英文を比べてみよう。

- a. I want to borrow your notebook.
- b. I'd like to borrow your notebook.
- c. May I borrow your notebook?
- d. Would you lend me your notebook?
- e. I wish I could borrow your notebook.

c. May I …? d. Would you …? e. I wish … は、異なる文法事項であるが、どれも依頼の機能を果たしうる。ところが、依頼のために用いるとは言っても、これらの英文は丁寧さにおいて差がある。仲のいい友人になら、a. I want to borrow your notebook.と言えるかもしれないが、あまり親しくない同級生には、他の言い方が望ましいし、目上の人に大事なノートを貸してもらうような場合は、さらに丁寧な言い方を考えなくてはならないだろう。依頼という目的を果たすために、生徒はこのような違いを踏まえ、相手がだれか、相手とどのような関係か、また、依頼することが何か等によって、どの表現を使うかを判断し、その上で表現できるようにしなければならない。

依頼の場合に限らず、場面にふさわしい文構造・文法事項を使えるようにするためには、形式の特徴と意味に加えて、それぞれの文構造・文法項目がどのような機能を持つのかを理解させるだけでなく、他の文構造・文法事項との関連も意識させなくてはならない。その指導として、先述のa.~e.のように、同様の機能をもつ文法事項をまとめたり、それらを場に応じて使い分けたりする学習を取り入れていく。

2.6.5 おわりに

本節で提案した事例では、小学校での「文及び文構造」の学習成果を活用できるようにする指導として、表現として学んだ英文を文構造の観点から分析させたり、別の場面で使う練習を行わせたりした。その際に、文法知識の有用性を実感させるために、自分達で

第2章

思い思いの英語を作るという活動を盛り込んだ。また、移行期にふさわしい言語活動にするために、生徒の学習履歴を参考に教材の扱い方を変えて、思考を伴う活動を実施した。

これまでの文法指導との違いとして、日本語と英語との比較などでメタ言語能力の基盤を培ってきた小学校での学習を活かすことを意図して、文法の有用感を感じられるような展開となるように工夫した。実施の際は、限られた知識しかない中学1年生でも取り組めるように、既習事項とその定着状況を確認して、それを指導に反映させることに留意したい。

文法有用感を高めるとよいことは、それによって文法好意度が上がるからである。また、言語を意識することで、生徒は言語を効果的に使えるようになるとも言われている。コミュニケーション能力の育成は、文・文構造・文法事項の指導抜きでは語れない。本章では扱わなかった「語彙や修飾関係などにおける日本語との違い」を中学校ではどう指導するかなど、小・中接続期以降の充実した取り組みが期待される。

〈主要参考文献〉

- アレン玉井光江 (2010) 『小学校英語の教育法－理論と実践－』 大修館書店
岐阜県土岐市立小学校における授業公開事例 (2018～2019年度)
- 高松理英子ほか (2019) 「小学校ローマ字学習の現状と課題：英語・国語・総合的な学習の連携を目指して」『北海学園大学学園論集』178 p65-90
- 西原美幸. (2018) 校内授業研究「附属小CLIL型単元開発から考察する日本の小学校外国語教育への応用」
- 西原美幸. (2018) .「小学校英語科における「見方・考え方」を働かせて学びを深める児童の育成 - 中学年のCLIL型単元における事例からの一考察 - 」『学校教育』No.1216 pp.22-29, 広島大学附属小学校, 学校教育研究会
- 畑江美佳ほか (2014) 「「読み書き」能力の素地作りのために小学校からできること - Phonemic Awarenessを促す外国語活動の実践 - 」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』第5号, p11-p20
- 広島大学附属小学校. (2017) .「文部科学省研究開発学校指定平成29年度 (第4年次) 研究開発実施報告書」
- 本多敏幸 (2009) 「英語力がぐんぐん伸びる！コミュニケーション・タイム 13の帯活動&ワークシート」 (明治図書)
- 松浦伸和 (2005) 「入門期におけるローマ字力と英語学力の関係」『日本教科教育学会誌』第28巻2号 p81-p89
- 松浦伸和ほか (2017) 『中学校新学習指導要領の展開』 (明治図書)
- 松川禮子 (2004) 『明日の小学校英語教育を拓く』アプリコット
- 松川禮子・大下邦幸編著 (2007) 『小学校英語と中学校英語を結ぶ』高稜社
- 丸山千亜紀 (2010) 「小学校英語活動から中学校英語教育への移行時における指導上の問題」『摂南大学教育学研究』vol.6 p89-100
- 文部科学省編 (2014) 『初等教育資料』No.911
- 文部科学省. (2016) .「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- 文部科学省. (2017) .「小学校学習指導要領」
- 文部科学省. (2017) .「小学校学習指導要領解説 総則編」
- 文部科学省. (2017) .「小学校学習指導要領解説 外国語編」
- 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領」
- 文部科学省 (2018) 「中学校学習指導要領解説」
- 文部科学省・国立教育政策研究所 (2019) 「平成31年度 (令和元年度) 全国学力・学習状況調査報告書 (中学校 英語)」
- 文部科学省編 (2019) 『初等教育資料』No.983
- 文部科学省編 (2020) 『初等教育資料』No.989
- ELEC同友会英語教育学会実践研究部会編著 (2003) 「中学校・高校英語 段階的スピーキング活動42」 (三省堂)
- John Austin (1962) *How to Do Things with Words*, Cambridge
- Krashen, S.D. (1985) . *The input hypothesis: Issues and implications*. Essex, England: Longman

執筆者一覧（所属は令和2年7月現在）

氏名	所属
松浦 伸和	広島大学大学院人間社会科学研究科 教授
直山木綿子	文部科学省初等中等教育局視学官
加納 幹雄	岐阜聖徳学園大学 教授
檜葉みつ子	広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授
西原 美幸	広島大学附属小学校 主幹教諭
坂田 美佳	徳島県鳴門市立坂東小学校 教諭
細川 裕香	広島県呉市立昭和北小学校 教諭
本多 敏幸	東京都千代田区立九段中等教育学校 教諭
山崎 学肖	広島県廿日市市立七尾中学校 教諭
堀本 陽平	広島県立福山明王台高等学校 教諭

公益財団法人 日本教材文化研究財団定款

第1章 総則

(名称)

第1条 この法人は、公益財団法人 日本教材文化研究財団と称する。

(事務所)

第2条 この法人は、主たる事務所を、東京都新宿区に置く。

2 この法人は、理事会の決議を経て、必要な地に従たる事務所を設置することができる。これを変更または廃止する場合も同様とする。

第2章 目的及び事業

(目的)

第3条 この法人は、学校教育、社会教育及び家庭教育における教育方法に関する調査研究を行うとともに、学習指導の改善に資する教材・サービス等の開発利用をはかり、もってわが国の教育の振興に寄与することを目的とする。

(事業)

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

- (1) 学校教育、社会教育及び家庭教育における学力形成に役立つ指導方法の調査研究と教材開発
 - (2) 家庭の教育力の向上がはかれる教材やサービスの調査研究と普及公開
 - (3) 前二号に掲げる研究成果の発表及びその普及啓蒙
 - (4) 教育方法に関する国内外の研究成果の収集及び一般の利用に供すること
 - (5) 他団体の検定試験問題及びその試験に関係する教材の監修
 - (6) その他、目的を達成するために必要な事業
- 2 前項の事業は、日本全国において行うものとする。

第3章 資産及び会計

(基本財産)

第5条 この法人の目的である事業を行うために不可欠な別表の財産は、この法人の基本財産とする。

2 基本財産は、この法人の目的を達成するために理事長が管理しなければならないが、基本財産の一部を処分しようとするとき及び基本財産から除外しようとするときは、あらかじめ理事会及び評議員会の承認を要する。

(事業年度)

第6条 この法人の事業年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

(事業計画及び収支予算)

第7条 この法人の事業計画書、収支予算書並びに資金調達及び設備投資の見込みを記載した書類については、毎事業年度開始の日の前日までに、理事長が作成し、理事会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も同様とする。

2 前項の書類については、主たる事務所に、当該事業年度が終了するまでの間備え置き、一般の閲覧に供するものとする。

(事業報告及び決算)

第8条 この法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後3箇月以内に、理事長が次の各号の書類を作成し、

監事の監査を受けた上で、理事会の承認を受けなければならない。承認を受けた書類のうち、第1号、第3号、第4号及び第6号の書類については、定時評議員会に提出し、第1号の書類についてはその内容を報告し、その他の書類については、承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告
- (2) 事業報告の附属明細書
- (3) 貸借対照表
- (4) 正味財産増減計算書
- (5) 貸借対照表及び正味財産増減計算書の附属明細書
- (6) 財産目録

2 第1項の規定により報告または承認された書類のほか、次の各号の書類を主たる事務所に5年間備え置き、個人の住所に関する記載を除き一般の閲覧に供するとともに、定款を主たる事務所に備え置き、一般の閲覧に供するものとする。

- (1) 監査報告
- (2) 理事及び監事並びに評議員の名簿
- (3) 理事及び監事並びに評議員の報酬等の支給の基準を記載した書類
- (4) 運営組織及び事業活動の状況の概要及びこれらに関する数値のうち重要なものを記載した書類

(公益目的取得財産残額の算定)

第9条 理事長は、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律施行規則第48条の規定に基づき、毎事業年度、当該事業年度の末日における公益目的取得財産残額を算定し、前条第2項第4号の書類に記載するものとする。

第4章 評議員

(評議員)

第10条 この法人に、評議員16名以上21名以内を置く。

(評議員の選任及び解任)

第11条 評議員の選任及び解任は、評議員選定委員会において行う。

2 評議員選定委員会は、評議員1名、監事1名、事務局員1名、次項の定めに基づいて選任された外部委員2名の合計5名で構成する。

3 評議員選定委員会の外部委員は、次のいずれにも該当しない者を理事会において選任する。

- (1) この法人または関連団体（主要な取引先及び重要な利害関係を有する団体を含む。以下同じ。）の業務を執行する者または使用人
- (2) 過去に前号に規定する者となったことがある者
- (3) 第1号または第2号に該当する者の配偶者、三親等内の親族、使用人（過去に使用人となった者も含む。）

4 評議員選定委員会に提出する評議員候補者は、理事会または評議員会がそれぞれ推薦することができる。評議員選定委員会の運営についての詳細は理事会において定める。

5 評議員選定委員会に評議員候補者を推薦する場合には、次に掲げる事項のほか、当該候補者を評議員として適任と判断した理由を委員に説明しなければならない。

- (1) 当該候補者の経歴
- (2) 当該候補者を候補者とした理由
- (3) 当該候補者とこの法人及び役員等（理事、監事及び評議員）との関係
- (4) 当該候補者の兼職状況

6 評議員選定委員会の決議は、委員の過半数が出席し、

その過半数をもって行う。ただし、外部委員の1名以上が出席し、かつ、外部委員の1名以上が賛成することを要する。

- 7 評議員選定委員会は、第10条で定める評議員の定数を欠くこととなるときに備えて、補欠の評議員を選任することができる。
- 8 前項の場合には、評議員選定委員会は、次の各号の事項も併せて決定しなければならない。
 - (1) 当該候補者が補欠の評議員である旨
 - (2) 当該候補者を1人または2人以上の特定の評議員の補欠の評議員として選任するときは、その旨及び当該特定の評議員の氏名
 - (3) 同一の評議員（2人以上の評議員の補欠として選任した場合にあっては、当該2人以上の評議員）につき2人以上の補欠の評議員を選任するときは、当該補欠の評議員相互間の優先順位
- 9 第7項の補欠の評議員の選任に係る決議は、当該決議後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで、その効力を有する。

(評議員の任期)

- 第12条 評議員の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとする。また、再任を妨げない。
- 2 前項の規定にかかわらず、任期の満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、退任した評議員の任期の満了するときまでとする。
- 3 評議員は、第10条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了または辞任により退任した後も、新たに選任された評議員が就任するまで、なお評議員としての権利義務を有する。

(評議員に対する報酬等)

- 第13条 評議員に対して、各年度の総額が500万円を超えない範囲で、評議員会において定める報酬等を支給することができる。
- 2 前項の規定にかかわらず、評議員には費用を弁償することができる。

第5章 評議員会

(構成)

第14条 評議員会は、すべての評議員をもって構成する。

(権限)

- 第15条 評議員会は、次の各号の事項について決議する。
 - (1) 理事及び監事の選任及び解任
 - (2) 理事及び監事の報酬等の額
 - (3) 評議員に対する報酬等の支給の基準
 - (4) 貸借対照表及び正味財産増減計算書の承認
 - (5) 定款の変更
 - (6) 残余財産の処分
 - (7) 基本財産の処分または除外の承認
 - (8) その他評議員会で決議するものとして法令またはこの定款で定められた事項

(開催)

第16条 評議員会は、定時評議員会として毎事業年度終了後3箇月以内に1回開催するほか、臨時評議員会として必要がある場合に開催する。

(招集)

第17条 評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき理事長が招集する。

2 評議員は、理事長に対して、評議員会の目的である事項及び招集の理由を示して、評議員会の招集を請求することができる。

(議長)

- 第18条 評議員会の議長は理事長とする。
- 2 理事長が欠けたときまたは理事長に事故があるときは、評議員の互選によって定める。

(決議)

- 第19条 評議員会の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。
- 2 前項の規定にかかわらず、次の各号の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上に当たる多数をもって行わなければならない。
 - (1) 監事の解任
 - (2) 評議員に対する報酬等の支給の基準
 - (3) 定款の変更
 - (4) 基本財産の処分または除外の承認
 - (5) その他法令で定められた事項
- 3 理事または監事を選任する議案を決議するに際しては、各候補者ごとに第1項の決議を行わなければならない。理事または監事の候補者の合計数が第21条に定める定数を上回る場合には、過半数の賛成を得た候補者の中から得票数の多い順に定数の枠に達するまでの者を選任することとする。

(議事録)

- 第20条 評議員会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。
- 2 議長は、前項の議事録に記名押印する。

第6章 役員

(役員の設定)

- 第21条 この法人に、次の役員を置く。
 - (1) 理事 7名以上12名以内
 - (2) 監事 2名または3名
- 2 理事のうち1名を理事長とする。
- 3 理事長以外の理事のうち、1名を専務理事及び2名を常務理事とする。
- 4 第2項の理事長をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（平成18年法律第48号）に規定する代表理事とし、第3項の専務理事及び常務理事をもって同法第197条で準用する同法第91条第1項に規定する業務執行理事（理事会の決議により法人の業務を執行する理事として選定された理事をいう。以下同じ。）とする。

(役員を選任)

- 第22条 理事及び監事は、評議員会の決議によって選任する。
- 2 理事長及び専務理事並びに常務理事は、理事会の決議によって理事の中から選定する。

(理事の職務及び権限)

- 第23条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの定款で定めるところにより、職務を執行する。
- 2 理事長は、法令及びこの定款で定めるところにより、この法人の業務を代表し、その業務を執行する。
- 3 専務理事は、理事長を補佐する。
- 4 常務理事は、理事長及び専務理事を補佐し、理事会の議決に基づき、日常の事務に従事する。
- 5 理事長及び専務理事並びに常務理事は、毎事業年度に4箇月を超える間隔で2回以上、自己の職務の執行の状

況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務及び権限)

第24条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。

2 監事は、いつでも、理事及び事務局員に対して事業の報告を求め、この法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。

(役員任期)

第25条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとする。

2 監事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結のときまでとする。

3 前項の規定にかかわらず、任期の満了前に退任した理事または監事の補欠として選任された理事または監事の任期は、前任者の任期の満了するときまでとする。

4 理事または監事については、再任を妨げない。

5 理事または監事が第21条に定める定数に足りなくなるときまたは欠けたときは、任期の満了または辞任により退任した後も、それぞれ新たに選任された理事または監事が就任するまで、なお理事または監事としての権利義務を有する。

(役員解任)

第26条 理事または監事が、次の各号のいずれかに該当するときは、評議員会の決議によって解任することができる。

- (1) 職務上の義務に違反し、または職務を怠ったとき
- (2) 心身の故障のため、職務の執行に支障がありまたはこれに堪えないとき

(役員に対する報酬等)

第27条 理事及び監事に対して、各年度の総額が300万円を超えない範囲で、評議員会において定める報酬等を支給することができる。

2 前項の規定にかかわらず、理事及び監事には費用を弁償することができる。

第7章 理事会

(構成)

第28条 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(権限)

第29条 理事会は、次の各号の職務を行う。

- (1) この法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 理事長及び専務理事並びに常務理事の選定及び解職

(招集)

第30条 理事会は、理事長が招集するものとする。

2 理事長が欠けたときまたは理事長に事故があるときは、各理事が理事会を招集する。

(議長)

第31条 理事会の議長は、理事長とする。

2 理事長が欠けたときまたは理事長に事故があるときは、専務理事が理事会の議長となる。

(決議)

第32条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

2 前項の規定にかかわらず、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第197条において準用する同法第96条の要件を満たしたときは、理事会の決議があったものとみなす。

(議事録)

第33条 理事会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。

2 出席した理事長及び監事は、前項の議事録に記名押印する。ただし、理事長の選定を行う理事会については、他の出席した理事も記名押印する。

第8章 定款の変更及び解散

(定款の変更)

第34条 この定款は、評議員会の決議によって変更することができる。

2 前項の規定は、この定款の第3条及び第4条並びに第11条についても適用する。

(解散)

第35条 この法人は、基本財産の滅失によるこの法人の目的である事業の成功の不能、その他法令で定められた事由によって解散する。

(公益認定の取消し等に伴う贈与)

第36条 この法人が公益認定の取消しの処分を受けた場合または合併により法人が消滅する場合（その権利義務を承継する法人が公益法人であるときを除く。）には、評議員会の決議を経て、公益目的取得財産残額に相当する額の財産を、当該公益認定の取消しの日または当該合併の日から1箇月以内に、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人または国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

(残余財産の帰属)

第37条 この法人が清算をする場合において有する残余財産は、評議員会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人または国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第9章 公告の方法

(公告の方法)

第38条 この法人の公告は、電子公告による方法により行う。

2 事故その他やむを得ない事由によって前項の電子公告を行うことができない場合は、官報に掲載する方法により行う。

第10章 事務局その他

(事務局)

第39条 この法人に事務局を設置する。

2 事務局には、事務局長及び所要の職員を置く。

3 事務局長及び重要な職員は、理事長が理事会の承認を得て任免する。

4 前項以外の職員は、理事長が任免する。

5 事務局の組織、内部管理に必要な規則その他については、理事会が定める。

(委 任)

第40条 この定款に定めるもののほか、この定款の施行について必要な事項は、理事会の決議を経て、理事長が定める。

附 則

- 1 この定款は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第106条第1項に定める公益法人の設立の登記の日から施行する。
- 2 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第106条第1項に定める特例民法法人の解散の登記と、公益法人の設立の登記を行ったときは、第6条の規定にかかわらず、解散の登記の日の前日を事業年度の末日とし、設立の登記の日を事業年度の開始日とする。
- 3 第22条の規定にかかわらず、この法人の最初の理事長は杉山吉茂、専務理事は新免利也、常務理事は星村平和及び中井武文とする。
- 4 第11条の規定にかかわらず、この法人の最初の評議員は、旧主務官庁の認可を受けて、評議員選定委員会において行うところにより、次に掲げるものとする。

有田 和正	尾田 幸雄
梶田 叡一	角屋 重樹
亀井 浩明	北島 義斉
木村 治美	佐島 群巳
佐野 金吾	清水 厚実
田中 博之	玉井美知子
中川 栄次	中里 至正
中渕 正堯	波多野義郎
原田 智仁	宮本 茂雄
山極 隆	大倉 公喜
- 5 昭和45年の法人設立時の理事及び監事は、次のとおりとする。

- | | | |
|----|--------|--------|
| 理事 | (理事長) | 平澤 興 |
| 理事 | (専務理事) | 堀場正夫 |
| 理事 | (常務理事) | 鯨坂二夫 |
| 理事 | (常務理事) | 渡辺 茂 |
| 理事 | (常務理事) | 近藤達夫 |
| 理事 | | 平塚益徳 |
| 理事 | | 保田 與重郎 |
| 理事 | | 奥西 保 |
| 理事 | | 北島織衛 |
| 理事 | | 田中克己 |
| 監事 | | 高橋武夫 |
| 監事 | | 辰野千壽 |
| 監事 | | 工藤 清 |

賛助会員規約

第1条 公益財団法人日本教材文化研究財団の事業目的に賛同し、事業その他運営を支援するものを賛助会員(以下「会員」という)とする。

- 第2条 会員は、法人、団体または個人とし、次の各号に定める賛助会費(以下「会員」という)を納めるものとする。
- (1) 法人および団体会員 一口30万円以上
 - (2) 個人会員 一口6万円以上
 - (3) 個人準会員 一口6万円未満

第3条 会員になろうとするものは、会費を添えて入会届を提出し、理事会の承認を受けなければならない。

第4条 会員は、この法人の事業を行う上に必要なことから、この法人の事業を行う上に必要なことについて研究協議し、その遂行に協力するものとする。

- 第5条 会員は次の各号の事由によってその資格を失う。
- (1) 脱退
 - (2) 禁治産および準禁治産並びに破産の宣告
 - (3) 死亡、失踪宣告またはこの法人の解散
 - (4) 除名

第6条 会員で脱退しようとするものは、書面で申し出なければならない。

- 第7条 会員が次の各号(1)に該当するときは、理事現在数の4分の3以上出席した理事会の議決をもってこれを除名することができる。
- (1) 会費を滞納したとき
 - (2) この法人の会員としての義務に違反したとき
 - (3) この法人の名誉を傷つけまたはこの法人の目的に反する行為があったとき

第8条 既納の会費は、いかなる事由があってもこれを返還しない。

第9条 各年度において納入された会費は、事業の充実およびその継続的かつ確実な実施のため、その半分を管理費に使用する。

内閣府所管

公益財団法人 日本教材文化研究財団

理事・監事・評議員

(1) 理事・監事名簿 (敬称略) 12名

(令和2年8月31日現在)

役名	氏名	就任年月日	就重	職務・専門分野	備考
理事長	村上 和雄	令和2年6月12日 (理事長就任 H.26.3.7)	重	法人の代表 業務の総理	筑波大学名誉教授 全日本家庭教育研究会総裁
専務理事	新免 利也	令和2年6月12日	重	事務総運 括営	(株)新学社執行役員東京支社長
常務理事	角屋 重樹	令和2年6月12日	重	理科教育	広島大学名誉教授 日本体育大学教授
常務理事	中井 武文	令和2年6月12日	重	財務	(株)新学社取締役相談役
理事	北島 義俊	令和2年6月12日	重	財務	大日本印刷(株)代表取締役会長
理事	清水 美憲	令和2年6月12日	就	教育評価 学論	筑波大学人間系教授
理事	田中 博之	令和2年6月12日	就	教育工学 学	早稲田大学教職大学院教授
理事	中川 栄次	令和2年6月12日	重	財務	(株)新学社代表取締役社長
理事	中洌 正堯	令和2年6月12日	重	国語教育学	元兵庫教育大学学長 兵庫教育大学名誉教授
理事	原田 智仁	令和2年6月12日	重	社会科教育	兵庫教育大学名誉教授 滋賀大学教育学部特任教授
監事	橋本 博文	令和2年6月12日	重	財務	大日本印刷(株)常務取締役
監事	平石 隆雄	令和2年6月12日	重	財務	(株)新学社執行役員

(50音順)

(2) 評議員名簿 (敬称略) 18名

役名	氏名	就任年月日	就重	担当職務	備考
評議員	秋田喜代美	平成29年6月2日	重	教育心理学・発達心理学 学校教育学	東京大学大学院教授
評議員	浅井 和行	平成30年6月1日	重	教育工学 メディア教育	京都教育大学理事・副学長
評議員	安彦 忠彦	平成30年6月1日	重	教育課程論 教育評価・教育方法	名古屋大学名誉教授 神奈川大学特別招聘教授
評議員	稲垣 応顕	令和2年5月18日	就	社会心理学	上越教育大学教職大学院教授
評議員	亀井 浩明	平成30年6月1日	重	初等中等教育 キャリア教育	元東京都教委指導部長 帝京大学名誉教授
評議員	北島 義斉	平成30年6月1日	重	財務	大日本印刷(株)代表取締役社長
評議員	櫻井 茂男	平成30年6月1日	重	認知心理学・発達心理学 キャリア教育	筑波大学名誉教授
評議員	佐藤 晴雄	令和2年5月18日	重	教育経営学・教育行政学 社会教育学・青少年教育論	日本大学教授
評議員	佐野 金吾	平成30年6月1日	重	社会科教育 教育課程・学校経営	元東京家政学院中・高等学校長
評議員	下田 好行	平成30年6月1日	重	国語教育学 教育方法	元国立教育政策研究所総括研究官 東洋大学教授
評議員	鈴木由美子	令和2年5月18日	就	社会科学・教育学 教科教育学	広島大学大学院教授
評議員	高木 展郎	平成30年6月1日	重	国語科教育学 教育方法	横浜国立大学名誉教授
評議員	堀井 啓幸	令和2年5月18日	重	教育経営学 教育環境	常葉大学教授
評議員	前田 英樹	平成30年6月1日	重	フランス語 思想論	立教大学名誉教授
評議員	松浦 伸和	平成30年6月1日	重	英語教育学	広島大学大学院教授
評議員	峯 明秀	平成30年6月1日	重	社会科教育学	大阪教育大学教授
評議員	油布佐和子	令和2年5月18日	重	教育社会学・学校の社会学 教師教職研究 児童生徒の問題行動	早稲田大学教育・総合科学学術院教授
評議員	吉田 武男	平成30年6月1日	重	道徳教育 家庭教育論	筑波大学名誉教授 関西外国語大学大学院教授

(50音順)

調査研究シリーズ 84

小・中学校の滑らかな接続を目指した 英語科学習指導の研究

令和2年9月30日発行

編集／公益財団法人 日本教材文化研究財団

発行人／新免 利也（専務理事）

発行所／公益財団法人 日本教材文化研究財団

〒162-0841 東京都新宿区払方町14番地 1

電話 03-5225-0255 FAX 03-5225-0256

<http://www.jfecr.or.jp>

表紙デザイン：アイクリエイト(株)

印刷 (株)天理時報社